

高島A遺跡発掘調査報告書

-鏡宮高島土地区画整理事業に伴う発掘調査-

2006年3月

富山県射水市教育委員会



調査区遠景（南から富山湾を望む）



調査区周辺（昭和22年米軍撮影）



特殊石製品（弥生時代後期）

高島 A 遺跡発掘調査報告書

-鏡宮高島土地区画整理事業に伴う発掘調査-

2006年3月

富山県射水市教育委員会



序

富山県射水市は、平成 17 年 11 月 1 日に新湊市、射水郡小杉町、大門町、大島町、下村の 1 市 3 町 1 村が合併して誕生しました。

射水市は、北は富山湾に面し、南に射水丘陵、中央部には肥沃な射水平野が広がっています。当市は、古くから日本海交易や放生津潟に流れ込む河川を利用した水運の交通網が発達し、旧石器時代以来の遺跡が密集する射水丘陵、万葉集にも詠まれた三島野や奈呉の浦、古代の神事を今に伝える下村の加茂神社、中世期に越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた放生津など、市内各所に先人たちの足跡が残されています。

先人が残した歴史・文化は、現代に生きる私たちが未来へ引き継ぐべき貴重な財産であります。市内に残る数々の遺跡も、地域に根ざした歴史を語り継いでくれる重要な郷土資料といえるでしょう。

本報告書は、射水市（旧新湊市）鏡宮地区で計画されている土地地区画整理事業に先立ち実施した、高島 A 遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

調査では、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする多くの遺構や土器・石器などが見つかりました。また、全国的にも類例の無い特殊な形状をした石製品の出土により多くの注目を集め、現地説明会の開催とあわせて、地域の方々にも遺跡の存在や重要性を直接伝えることができたことが、本調査の大きな成果であったと思われまます。

今後、これらの遺跡を保護し、また、地域の歴史を広く一般に紹介することに本報告書が多少なりとも役立つことができれば幸いに存じます。

最後に現地調査から報告書作成まで多大なご協力・ご助言を賜った関係諸氏に感謝申し上げますとともに、今後とも文化財保護に変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 18 年 3 月

射水市教育委員会
教育長 竹内 伸 一



例 言

1. 本書は平成17年度に実施した富山県射水市（旧新湊市）鏡宮地内に所在する、高島A遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、射水市鏡宮地区で計画された土地区画整理事業に先立ち、新湊市鏡宮高島土地区画整理組合の委託を受け、新湊市教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査事務局は平成17年10月31日までは新湊市教育委員会生涯学習課に置き、生涯学習課長 川口泰子が調査事務を総括した。同年11月1日以降は、調査事務を射水市教育委員会文化課が引き継ぎ、文化課長 川口武治が調査事務を総括した。
4. 現地発掘調査及び出土品整理から調査報告書刊行に至る室内作業は新湊市教育委員会（平成17年11月1日より射水市教育委員会）の監理の下、株式会社エイ・テックが実施した。
5. 調査期間、面積及び調査担当者は以下の通りである。

【現地発掘調査】平成17年5月17日～9月12日 3,212㎡

調査担当者 新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則
株式会社エイ・テック 堀井泰樹 藤井秀明 後藤浩之

【整理・報告書作成】平成17年5月17日～平成18年3月31日

担当者 新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則（平成17年11月1日
より射水市教育委員会文化課 学芸員）
株式会社エイ・テック 堀井泰樹

6. 本書の執筆はⅡ-1を射水市教育委員会 金三津英則が、Vをバリノ・サーヴェイ株式会社が、それ以外の執筆・編集は堀井が担当した。
7. 調査の実施から本書作成にあたっては、下記の方々から貴重な御教示・御指導をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略 五十音順）

赤羽久忠 泉 拓良 上野 章 岡村秀典 岡本淳一郎 岸本雅敏 久々忠義 小山浩和 清水正明
高梨清志 高橋浩二 高橋章司 田村昌宏 藤田慎一 松井 潔 水野正好 山本正敏

8. 遺物写真の内、特殊石製品は西大寺フォト（杉本和樹氏）に撮影を委託し、その成果品を使用した。
9. 現地発掘調査及び整理作業参加者は、下記の通りである。（敬称略）

【現地発掘調査】網谷勲二 伊藤信敬 井波睦紀 岩本勝国 海老伸悦 甲 輝夫 久郷平行

佐伯 登 近岡清三 永田 修 西野 彰 野口紀之 八田 弘 松木明男

湊 敏之 宮田 豊 林恵美子 藤本百合子 松井コウ 山本田鶴子




（以上、（社）新湊市シルバー人材センター）

澤田雅志 宮脇 満（以上、金沢学院大学学生）

【整理作業】相佐啓子 上田恵子 三島幸代 渡辺悦子

10. 出土遺物、記録図面等は射水市教育委員会が一括して保存・公開している。

凡 例

1. 本書の挿図に用いた方位は座標北（真北は東偏2' 58"）、標高基準は海拔高である。
2. 本書の土層及び出土遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2004年版）に準拠している。
3. 遺物実測図中のスクリーントーンの張り込みは次の通り表現した。なお、須恵器の断面は黒塗りとした。
スス-  赤彩-  黒斑- 
4. 実測図・観察表・写真図版の遺物番号はそれぞれ対応している。

本文目次

巻頭カラー写真

序

例言

I 遺跡の環境

1. 地理的環境…………… 1
2. 歴史的環境…………… 2

II 調査に至る経緯及び経過

1. 調査の経緯…………… 4
2. 現地調査の経過…………… 5

III 調査の方法及び基本層序

1. 調査の方法…………… 6
2. 基本層序…………… 8

IV 調査の結果

1. 検出遺構…………… 9
2. 出土遺物…………… 46
3. その他の出土遺物…………… 89
4. 特殊石製品…………… 91

V 理化学分析…………… 97

VI 考察…………… 120

写真図版…………… 125

挿図目次

第1図	射水市位置図	1
第2図	高島A遺跡周辺遺跡位置図	3
第3図	高島A遺跡範囲	4
第4図	各調査区位置図	7
第5図	層位模式図	8
第6図	C-1区遺構検出状況及びSP14平面・層位図	10
第7図	C-1区遺構層位図	11
第8図	C-1区土器出土状況図	12
第9図	C-2区遺構検出状況図	15
第10図	C-2区SK01検出状況及び遺構層位図	15
第11図	C-2区南側土器出土状況及び遺構層位図	17
第12図	C-3区遺構検出状況及び遺構層位図	20
第13図	D-1・2区遺構検出状況及び谷部層位図	21
第14図	D-1区遺構検出状況及び遺構層位図	23
第15図	D-2区遺構検出状況及び遺構層位図	25
第16図	E-1区遺構検出状況及び遺構層位図	31
第17図	E-2区遺構検出状況及び遺構層位図	34
第18図	E-3区遺構検出状況図	36
第19図	E-3区遺構層位図	37
第20図	E-4区遺構検出状況図	39
第21図	E-4区遺構層位図	39
第22図	E-4区SD01土器出土状況図	39
第23図	出土遺物実測図(土器1～8:C-1区土器溜まりSD06)	54
第24図	出土遺物実測図(土器9～24:C-1区SD07①SD07②)	55
第25図	出土遺物実測図(土器25～34:C-1区SD07②SX03包含層 :C-2区土器溜まりSD02SD03SD05SD08)	56
第26図	出土遺物実測図(土器35～43:C-2区SD08)	57
第27図	出土遺物実測図(土器44～55:C-2区SD08SK01)	58
第28図	出土遺物実測図(土器56～65:C-2区SK01SK05)	59
第29図	出土遺物実測図(土器66～70:C-2区SK05)	60
第30図	出土遺物実測図(土器71～81:C-2区SP04:D-1区土器溜まり)	61
第31図	出土遺物実測図(土器82～91:D-1区土器溜まりSD14・SD15SX01)	62
第32図	出土遺物実測図(土器92～107:D-1区包含層)	63
第33図	出土遺物実測図(土器108～121:D-1区谷)	64
第34図	出土遺物実測図(土器122～127:D-1区谷128～132:D-2区SD01SD02)	65
第35図	出土遺物実測図(土器133～137:D-2区SK02SK04SK06SK07)	66
第36図	出土遺物実測図(土器138～148:D-2区SK08SK11SP43SP58SK01)	67
第37図	出土遺物実測図(土器149～153:D-2区SX01)	68
第38図	出土遺物実測図(土器154～159:D-2区包含層:E-1区SD01)	69

第 39 図	出土遺物実測図 (土器 160 ~ 180 : E-1 区 SD02)	70
第 40 図	出土遺物実測図 (土器 181 ~ 192 : E-1 区 SD02 SD05 SD08 SD09 SD11 SK02)	71
第 41 図	出土遺物実測図 (土器 193 ~ 206 : E-1 区 包含層)	72
第 42 図	出土遺物実測図 (土器 207 ~ 227 : E-1 区 包含層)	73
第 43 図	出土遺物実測図 (土器 228 ~ 239 : E-2 区 SD01 SD02 SD03 SK01)	74
第 44 図	出土遺物実測図 (土器 240 ~ 256 : E-2 区 SK02 SP03 包含層)	75
第 45 図	出土遺物実測図 (土器 257 ~ 276 : E-3 区 SD06 SD07 SD10 SD11 SD12 SD13 包含層) ..	76
第 46 図	出土遺物実測図 (土器 277 ~ 286 : E-3 区 SK01 包含層)	77
第 47 図	出土遺物実測図 (土器 287 ~ 299 : E-4 区 SD01)	78
第 48 図	出土遺物実測図 (土器 300 ~ 307 : E-4 区 SD01)	79
第 49 図	出土遺物実測図 (土器 308 ~ 312 : E-4 区 SD01)	80
第 50 図	出土遺物実測図 (土器 313 ~ 327 : E-4 区 SD01)	81
第 51 図	出土遺物実測図 (土器 328 ~ 338 : E-4 区 SD01 SD02 SK02)	82
第 52 図	石製品	93
第 53 図	石製品・土製品・木製品・古銭	94
第 54 図	特殊石製品	95
第 55 図	ボーリング調査地点	106
第 56 図	ボーリング調査地点の柱状図	107
第 57 図	主要珪酸化石群集の層位分布	108
第 58 図	花粉化石群集層位分布	112
第 59 図	植物珪酸体群集と珪化組織片の産状	114
図版 1	ボーリング試料	116
図版 2	珪酸化石・種実遺体	117
図版 3	花粉化石	118
図版 4	植物珪酸体	119

表目次

表 1. 検出遺構一覧	41
表 2. 土器観察表	83
表 3. 珪藻分析結果	109
表 4. 珪藻化石の生態性区分および環境指標群	111
表 5. 花粉分析・イネ属同定結果	113
表 6. 植物珪酸体分析結果	115
表 7. 微細物分析結果	115

I 遺跡の環境

1. 地理的環境

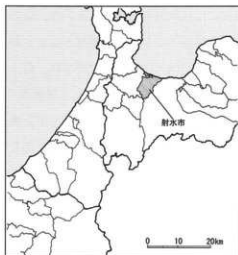
富山県射水市の市域は東西約11km、南北約15kmで総面積109.18km²である。東西を県下の二大都市である富山市、高岡市と隣接し、交通の便に恵まれていることから、高度経済成長期以降、住宅団地の造成が頻繁に行われ、ベッドタウン化が進んでいる。現在の人口は約95,000人余りである。市内には、日本海側最大級の特定重要港湾である伏木富山港（新湊地区）や北陸自動車道小杉インターチェンジがあり、双方を南北に結ぶ国道472号と東西を走る国道8号が交差している。

南に北アルプス、北に日本海を望む富山県は、北アルプスに端を発する黒部川・片貝川・早月川・常願寺川・神通川・庄川・小矢部川などの7大河川やこれらの支流によって

扇状地や自然堤防、潟埋積平野を形成し、広義の富山平野を成している。これに対し、常願寺川と神通川により形成された狭義の富山平野が県内のほぼ中央に位置し、その西側に射水平野が位置する。

射水平野は、西に庄川の新扇状地、東に神通川の旧扇状地が重なることで形成された、複合扇状地性三角州沖積平野で、標高は約0～5mと県内で最も標高の低い地域である。最終氷期であった約2万年前には現在の海面よりも100m以上も海面が低下し、海岸汀線が現在よりもかなり沖合へ後退したが、気温の上昇に伴い海面が上昇してくる約7千年前のいわゆる縄文海進時には、かなり内陸まで海面が広がり、大きな遠浅の湾が形成された。縄文時代中期以降、気候の寒冷化による海水面の低下や、南部に位置する射水丘陵からの土砂の堆積が進展することで、海岸近くの放生津潟（現・富山新港）を残し周辺に広大な低湿地を形成した。標高差を殆ど持たない放生津潟周辺では河川の流れが滞留し沼沢池を形成、湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、平野部が開けていくことになる。乾田化の進んだ現在ではかつての面影を留めていないが、数十年前までは縦横に水路が走る水郷地帯として知られていた。

このような自然環境の中で、先人達は生活の場を求めながら集落を形成していった。平均気温が比較的高い縄文時代の前期から中期にかけての遺跡は射水平野においては殆どみられず、南太閤山I遺跡のように射水丘陵上に形成するか、蛭ヶ森貝塚のように羽羽山丘陵の麓付近に



第1図 射水市位置図

形成していく。気候の寒冷化に伴い、海水面が低下していく縄文時代晩期から弥生時代になると平野部にかけて集落を形成していった。

2. 歴史的環境

地形的に丘陵部（射水丘陵）と平野部（射水平野）に分けられる射水市には、459箇所の遺跡が密集している。丘陵部には古墳や生産遺跡が、平野部には集落遺跡が多く確認されている。

丘陵部には後期旧石器時代以来の先人達の足跡が残されている。縄文時代には生活の場として、弥生から古墳時代にかけては墓域としても利用され、多数の方形周溝墓や古墳が確認されている。古代には高岡市伏木に国府が設置され、射水丘陵は国指定史跡の小杉丸山遺跡をはじめ、小杉流通業務団地内遺跡・上野南遺跡など須恵器窯跡 39 遺跡、製鉄遺跡 147 遺跡を数える県内最大規模の生産遺跡集中地帯となった。窯や炉を築くのに適した地形、粘土・薪・水等の原料供給源の豊富さに加え、生産地と消費地が河川を通じて直結するなど、立地条件に恵まれていたためと考えられる。

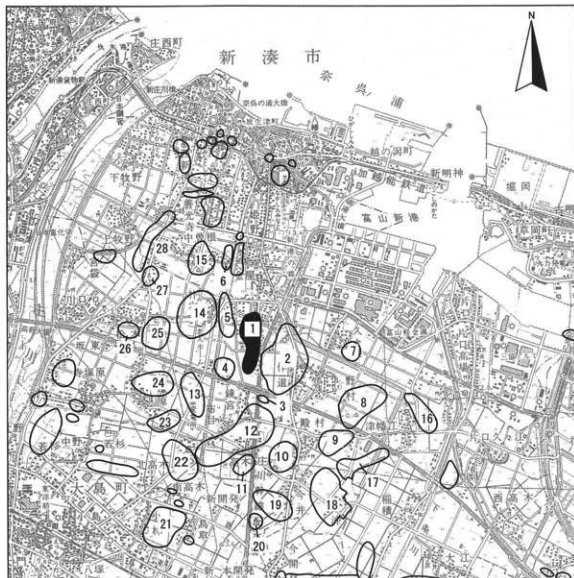
平野部では、沖積平野の形成に伴い人々が生活圏を広めていった。水稻耕作が本格化した弥生時代以降には遺跡数が飛躍的に増加し、作道遺跡・北高木遺跡・二口油免遺跡・小杉伊勢領遺跡などの集落遺跡が、河川に近い自然堤防や微高地上に分布する。古代以降には、丘陵部と平野部及び日本海とを河川が結び、交通・輸送の要衝として多くの集落が営まれていたと考えられる。中世には現在の富山新港付近の放生津が発展し、守護所が設置されるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

高島A遺跡は、国道8号北側に所在する弥生から古墳時代を中心とする遺跡である。遺跡範囲はかつての西神楽川の流路に沿うような形で、南北約750m、東西約170mにわたって広がっている。一帯の標高は約1.5～1.8mである。遺跡の存在は、昭和43年当時のほ場整備等の工事掘削土中に散布していた土器片等を、新湊市立南部中学校（当時）の生徒達が採集したことから認知されるようになった。採集した遺物は昭和46年に『古代遺跡中露出遺物拾得物内訳明細書』として小冊子にまとめられている。この小冊子には、ほぼ現在の高島A遺跡・津幡江遺跡・高木荒畑遺跡・松木中鹿遺跡・朴木A遺跡の範囲に当たる場所で採集された遺物が紹介されている。高島A遺跡は、「高島南部地先弥生遺跡」として紹介されており、「弥生中期貝殻土器片」が多数含まれていると報告されている。

過去の発掘調査では、国道472号南部中学校口交差点西側の平成9年度調査区で、弥生時代中期後半の円形周溝状遺構や方形周溝墓が確認されており、また、国道472号を挟んで東隣する作道遺跡では、平成16年度の発掘調査で、弥生時代中期中葉を中心とする集落跡を確認し、栗林式土器の搬入品を含む多数の弥生土器が出土した。

高島A遺跡の周辺は、弥生・古墳時代の遺跡が多く所在する地域である。東隣する作道遺跡をはじめ、西側には昭和40年の西部主幹排水路工事の際に弥生土器を主体とする土器やシジミ貝

が多数露出していたと伝えられている朴木A遺跡、南側には縄文時代後期から近世までの複合遺跡である高木・荒畑遺跡、北側の高岡市牧野地内には弥生から中世までの複合遺跡として著名な中曽根遺跡などがある。これらの遺跡はいずれもかつての神楽川流域に相当する地域であり、流域では上流に位置する北高木遺跡、小林遺跡、三ヶ・本開発遺跡、布目沢北・東遺跡、二口油免遺跡等の多くの遺跡が所在し、この神楽川が遺跡の立地に重要な役割を果たしていたことが指摘されている。



第2図 高島A遺跡周辺遺跡位置図 (S=1/50,000)

1. 高島A遺跡 2. 作道遺跡 3. 鏡宮遺跡 4. 鏡宮北遺跡 5. 朴木A遺跡 6. 中曽根館遺跡 7. 久々湊遺跡
8. 野村遺跡 9. 津幡江西遺跡 10. 今井西遺跡 11. 南浦遺跡 12. 高木・荒畑遺跡 13. 神塚原東B遺跡
14. 朴木C遺跡 15. 中曽根遺跡 16. 東津幡江遺跡 17. 津幡江遺跡 18. 今井遺跡 19. 今井南遺跡
20. 今井二島遺跡 21. 小林遺跡 22. 北高木遺跡 23. 神塚原東A遺跡 24. 神塚原遺跡 25. 松木中鹿遺跡
26. 松木大ノ田遺跡 27. 松木遺跡 28. 中曽根西遺跡

II 調査に至る経緯及び経過

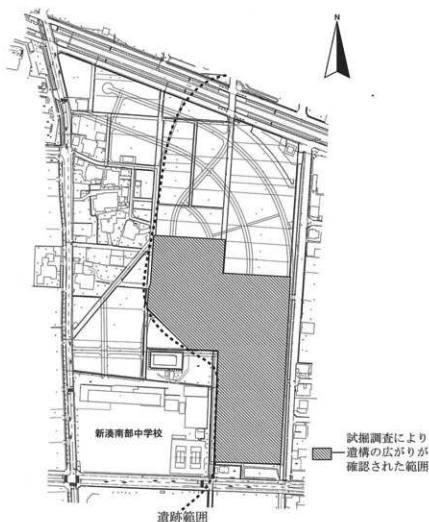
1. 調査の経緯

平成13年、新湊市（現射水市）鏡宮地区における土地区画整理事業計画の照会を受けた。新湊市（現射水市）教育委員会では、事業計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である高島A遺跡が所在し、また西側にも朴木A遺跡が隣接しているため、事業計画地全域を対象とした試掘調査が必要である旨回答し、市教育委員会が主体となって国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施することとなった。

試掘調査は、平成14年10月3日から11月7日にかけて事業計画地全域の54,120㎡を対象に実施した。調査の結果、事業計画地の南半分のおよそ25,000㎡を中心に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構の広がりを確認し、多数の弥生土器、土師器等が出土した。試掘調査の詳細については『市内遺跡試掘調査報告書』（新湊市教育委員会2003）を参照されたい。

上記の試掘調査の結果、埋蔵文化財の所在が確認された部分での工事施工に際して、その保護措置が必要となったため、新湊市鏡宮高島土地区画整理組合設立準備委員会と市教育委員会とで事業計画についての協議を重ねた。

協議の結果、計画道路部分及び宅地等、地下の埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合には、埋蔵文化財の記録保存を目的とする事前の発



第3図 高島A遺跡範囲

掘調査を実施することと、組合事業として行う計画道路部分の約3,200㎡について、事業者である土地区画整理組合が発掘調査費用を負担すること。発掘調査は市教育委員会の監理の下、株式会社エイ・テックが実施すること。宅地部分は造成盛土のみに留めることで合意に達した。

平成17年5月7日に新湊市（現射水市）鏡宮高島土地区画整理組合が設立され、同日付で文化財保護法第93条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出及び組合・市教育委員会・株式会社エイ・テックの三者間で埋蔵文化財の取り扱い及び調査方法に関する協定を締結し、5月17日より現地における発掘調査を開始した。（金三津）

2. 現地調査の経過

現地における発掘調査経過は以下の通りである。

平成17年

- | | |
|--------|--------------------------------------------------------------|
| 5月17日 | 作業初日。C-1区より表土掘削後、遺構検出作業に入る。 |
| 5月20日 | C-2区、D-1区表土掘削。C-2区において土器が面的な広がりをもせつつあることから、重機掘削を中断し、人力掘削に変更。 |
| 6月1日 | 土壌サンプル採取のため、バリノ・サーヴェイ株式会社辻本氏来跡。
C-3区遺構掘削終了後、空中写真撮影。 |
| 6月18日 | D-1区部分的に空中写真撮影。 |
| 6月22日 | D-1区谷部の肩より特殊石製品出土。出土状況写真及び出土地点記録後取り上げ。 |
| 6月27日 | C-1・2区、D-1区空中写真撮影。 |
| 7月2～5日 | C-1・2区、D-1区埋め戻し作業。 |
| 7月6日 | D-2区より表土掘削を開始。 |
| 7月8日 | E-4区までの表土掘削をすべて終了。引き続きD区及びE区に分かれ作業に入る。 |
| 7月22日 | 土壌サンプル採取のため、バリノ・サーヴェイ株式会社千葉氏来跡。 |
| 8月5日 | D-2区遺構掘削終了。空中写真撮影後、埋め戻し作業。 |
| 8月11日 | E-1区空中写真撮影。 |
| 9月4日 | 午前10時より現地説明会。 |
| 9月9日 | E-2・3・4区の空中写真撮影。 |
| 9月10日 | 全ての現地作業終了。 |
| 9月12日 | 新湊市教育委員会完了検査。検査後、直ちに埋め戻し作業及び撤収作業。 |
| 9月13日 | 調査事務所撤収作業。 |

Ⅲ 調査の方法及び基本層序

1. 調査の方法

調査区は、土地区画整理事業の工区に合わせ、C・D・Eの3区に大別し、調査区が分断されている場所や工程により細分した。

調査はC区よりバックホウを用いて表土掘削を行った。表土掘削後直ちに遺構検出作業を行い、作業終了後、検出状況の写真撮影、検出状況略図の作成後遺構掘削作業を行った。表土除去中に土器などが多量に出土した際には、直ちに重機を止め、人力により検出作業を行い取り上げ作業を行った。柱穴状遺構は半截、土坑状遺構は4分割を基本とし、溝状遺構はベルトを残し掘削を行った。土層確認後、それぞれ全掘し、写真撮影を行った。遺物の取り上げ方法については、包含層出土の遺物は順次グリッドごとに取り上げを行い、包含層掘削の際にある程度まとまって出土した土器に対しては、出土状況図を作成し、写真撮影後に番号を振り、取り上げを行った。C-2区において広範囲に出土した土器群に対しては、ラジコンヘリコプターを使用して写真撮影を行い、その後、1mごとの小グリッドを作成し、取り上げを行った。遺構内出土遺物については、出土状況写真を撮影後、図化し、それぞれ番号を振り取り上げを行った。脆弱化が激しく、取り上げが困難な遺物に関しては現地にて硬化処理を行い、土壌とともに取り上げ、整理室にて土壌を取り除き、接合作業を行った。

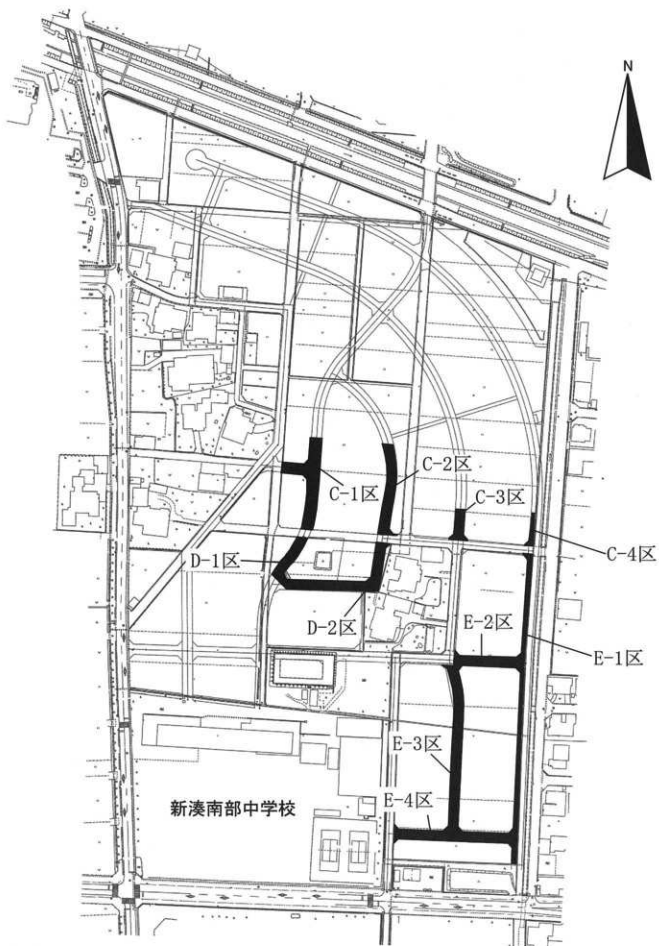
表土掘削と同時進行で、調査グリッドの設定を行った。各調査区がそれぞれ離れていること、また調査区の幅が狭いことから5mピッチで調査グリッドを設定した。公共座標値 X84125.000、Y-7420.000を原点とし、南北をX0～260、東西をY0～165とした。

遺構検出及び遺構掘削が終了した調査区より、順次遺構図作成のため、ラジコンヘリコプターにて空中写真撮影を行った。空中写真撮影は計6回行い、その後図化作業を行った。

空中写真撮影終了後、市教育委員会の完了検査を受け、終了した調査区より順次埋め戻し作業を行った。

現地調査に目途がついた9月4日に現地説明会を行った。

出土した遺物は、現地にて出土地点などをラベルに記入後、整理室に持ち帰り、洗浄・硬化処理・注記作業などの諸作業を行った。



第4図 各調査区位置図

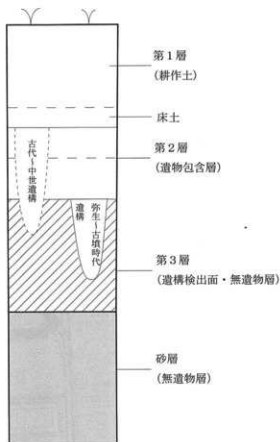
2. 基本層序

調査区の現況は水田・畑作地で、標高は約0.9～1.3mと標高差は少なく、基本土層は3層で形成されている。第1層は現在の水田耕作土で黒褐色粘土層で、遺物は弥生時代の土器から近世までの陶磁器類が出土した。第2層は遺物包含層の暗灰色粘土層であるが、若干の砂質を含んでいる。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期が主体となって出土した。第3層は遺構検出面で、黄灰色粘土層、若干シルト質が混じる。

第2層の遺物包含層はほ場整備などにより削平されており、調査区全体において確認できる箇所と確認できない箇所がある。確認できる箇所においては、非常に薄く、出土する遺物は耕作などにより損壊を受けたために小片になって出土した。D-1・2区においては、土質はほぼ同じだが、砂質の混入割合などにより2分層できる。

第3層は射水平野一帯で確認されるグライ化土壌で調査地全域に広がる。土質は全域ほぼ同じだが、粘質の強弱及び砂質の含有量の差は確認できる。第3層も第2層と同様、ほ場整備などの際に削平を受けているものとみられる。C-1区で出土した第3層直上の遺物が損壊を受けていることから、この削平の状況を知ることができる。

第1層から第3層まで深度は約15～20cm程と浅い。その為、表土をはぎ取った段階で、すぐに遺構検出面の第3層が確認された。



第5図 層位模式図

IV 調査の結果

1. 検出遺構

今回の発掘調査において検出した遺構は表1のとおりである。主な検出遺構は柱穴状遺構(SP)・土坑(SK)・井戸状遺構(SE)・溝状遺構(SD)である。性格が不明な遺構はSXと略称した。また、遺構に関係なく土器がまとめて出土した箇所は土器溜まり(PD)と略称し、一括遺物として取り上げた。遺構の名称については、調査時の混乱を避けるため、各調査区で完結させた。

なお、遺構の法量は検出面を基準に測定した数値である。

C-1 区

1) 柱穴状遺構

多数の柱穴状遺構が検出したが、大半が不整形で浅く、遺物はみられなかった。C-1区は表土から遺構検出面まで約0.2mと浅いことから、ほ場整備の際に削平されているものと考えられるが、SP13・14・15はしっかりとした柱穴状遺構となっている。調査区の幅が狭いためどのような広がりを見せるかは不明だが、SP13とSP15は大きさなどからセット関係になるものと考えられる。SP14では床面に比較的大きな石で構成された石組みを検出した。石組みを検出した柱穴状遺構はこのSP14のみである。SP13・14・15とも、時期比定できる遺物は出土しなかった。

2) 土坑

検出した土坑は3基である。SK04では弥生土器と土師器が混在して出土したが、その他では時期比定できる遺物は出土しなかった。SK03は丁寧に掘削されており、掘り方が内湾するフラスコ状になっている。3基の関連性は明確にできなかった。

3) 溝状遺構

・SD01

東西に走る溝で、深度約0.1mと浅い。遺物は出土しなかった。

・SD02 ①②

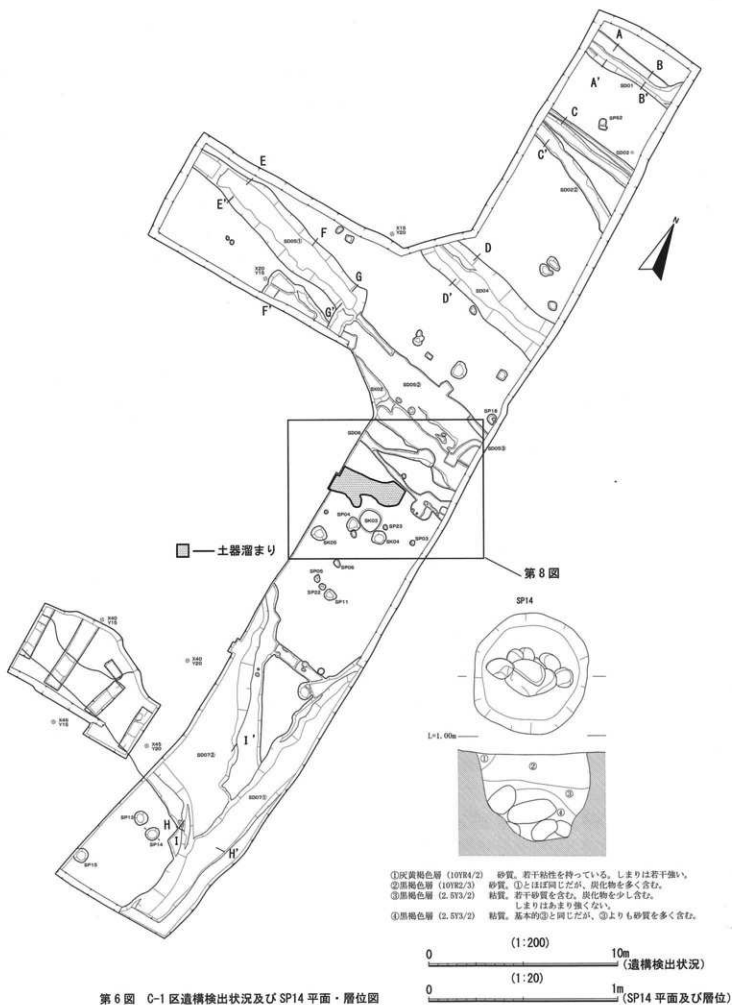
SD01と同様、東西に走る2股の溝で深度約0.1mと浅い。近世から近現代の陶磁器が出土した。

・SD04

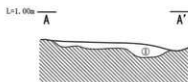
東西に走る溝で、深度約0.9m、V字型の断面を呈する。小片ではあるが、弥生時代後期から古墳時代前期とみられる高坏脚部等が出土した。

・SD05 ①②③

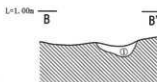
東西に走る溝である。検出段階では1本の溝とみられたが、掘削後複数の溝になったことから、3つに分類した。SD05 ②と③は深度約0.1mと浅い。東側に行くほど若干深くなる。遺物は弥生時代後期の甕口縁部や高坏の脚部が出土した。SD05 ①は西に行くに従って高低差約0.4mと急激に深くなっていき、一番深い箇所が約0.7mである。断面は逆台形を呈する。遺物は弥生時代後



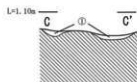
第6図 C-1区遺構検出状況及びSP14平面・層位図



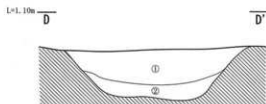
①黒褐色層 (7.5Y3/2) シルト



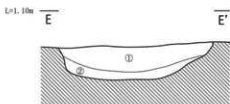
①灰オリーブ色層 (5Y6/2) シルト



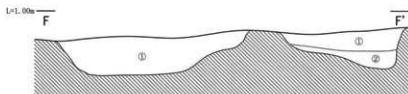
①黒褐色層 (7.5Y3/2) 粘質。若干砂質をまじる。



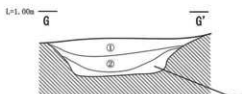
①黒褐色層 (7.5Y2/2) 粘質。基本的に粘土。しまり強く、粘質強い。
②黒色層 (7.5Y2/1) ①とほぼ同じ。



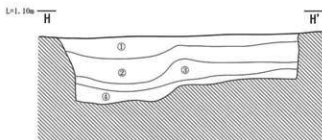
①黒褐色層 (7.5Y3/2) 粘質。しまり強く、粘質強い。
②暗灰色層 (7.5Y4/1) 基本的に①と同じ。



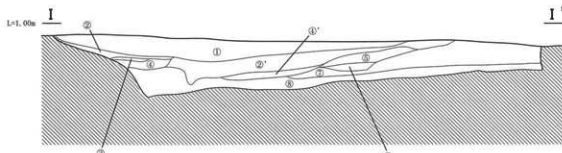
①黒褐色層 (7.5Y3/2) 粘質。しまり強く、粘質強い。
②暗灰色層 (7.5Y4/1) 基本的に①と同じ。



①黒褐色層 (7.5Y3/2) 粘質。しまり強く、粘質強い。
②暗灰色層 (7.5Y4/1) 基本的に①と同じ。
③黒色層 (10Y3/2) ブロック状に地山含む。粘質強い。



①黒褐色層 (7.5Y3/2) 強粘質。砂質を若干含む。しまり強く炭化物を少し含む。基本的に粘土床土。
②暗褐色層 (7.5Y2/3) 弱粘質。①とほぼ同じだが、しまりは①ほど強くない。
③黒色層 (10Y2/1) 粘質。砂質はほとんどなし。グライ化した粘土層を部分的に含み、炭化物を多く含む。
④黒色層 (10Y2/1) ③とほぼ同じだが、砂質を多く含む。炭化物は③ほど多くない。

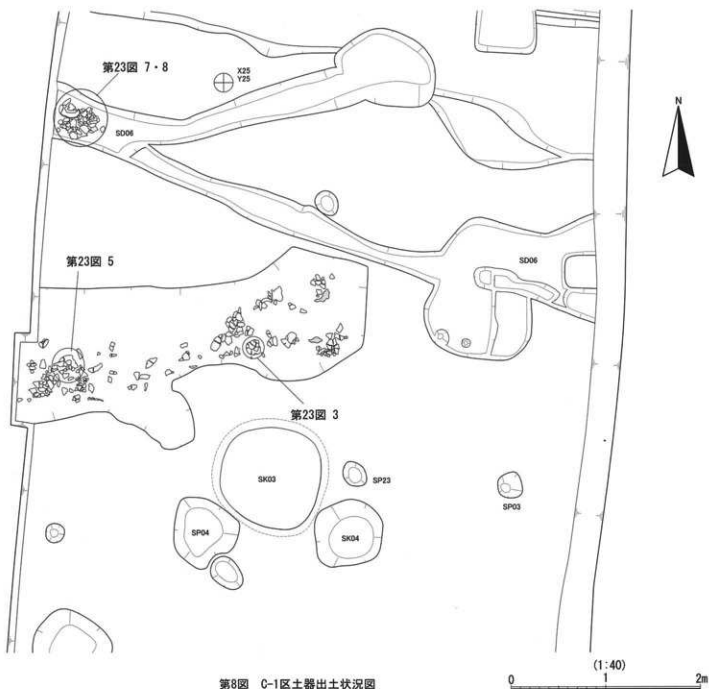


①にぶい黄褐色層 (10Y4/3) シルト。しまり無し。炭化物含む。
②①と同じ粘質強くしまり強い。
②' ①とほぼ同じ。
③オリーブ黒色層 (7.5Y3/2) 粘質。しまり強く炭化物を多く含む。
④暗灰黄色層 (7.5Y4/2) 粘質。しまり若干強く部分的に砂質を含む。
④' オリーブ黒色層 (7.5Y3/2) ④と同じ。若干しまりが④より強く炭化物を若干含む。
⑤④' に同じ。④より砂質少ない。④より炭化物を多く含む。
⑥暗褐色層 (10Y3/3) 粘質。しまり強く地山をブロック状に含む。
⑦⑥と同じ ⑤よりも炭化物を含まない。
⑧灰黄褐色層 (10Y4/2) しまり強く基本⑦と同じ。ただし⑦よりも砂質は少ない。

第7図 C-1区遺構層位図

(1:40)

0 1 2m



第8図 C-1区土器出土状況図

期から古墳時代前期の土器と珠洲焼の甕胴部等が出土した。

・SD06

東西に走る幅の狭い2股の溝状遺構で、深度約0.2mである。溝の末端に溜とみられる部分が確認できたことから水路状の遺構の可能性ある。遺物は弥生時代後期の壺が出土した。

・SD07 ①②

南北に走るSD07 ①と東西に走るSD07 ②の2本の溝である。SD07 ①は②を切っている。SD07 ①は調査区外に展開しており、正確な幅は確認できない。深度約1.0m、断面はV字形となっている。遺物は弥生時代後期の土器が肩部でまとまって出土した。その他に埋土中から下駄等の木製品も出土した。SD07 ②は東から西にかけて展開する溝である。SD07 ①に切られている。断面

はV字形を呈し、深度約0.9mで①とさほど差はない。②の遺物は弥生時代後期の土器が中心である。

C-2 区

1) 柱穴状遺構

多数の柱穴状遺構を検出したが、X50Y64～75より北側の柱穴状遺構群は不整形で浅く、遺物は出土しなかった。おそらく後世の耕作もしくはほ場整備の際の削平の影響を受けているものと考えられる。X50Y64～75より南側で検出した柱穴状遺構は、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期である。遺構が比較的狭い範囲で検出したため、性格は不明である。

2) 土坑

・SK01

長径約5.0m短径約2.0mの不整形の楕円形を呈する土坑である。東側の肩部に遺構を囲むように弥生時代中期末の土器が出土した。また、遺構の床面より環状石器などの石製品が出土した。床面より出土した土器と肩部より出土した土器には時期差はない。

・SK02

SK01に隣接する土坑である。出土遺物から、SK01とSK02とは時期差はないものと考えられる。

・SK05

長辺約3.0m短辺約1.8mで長方形を呈する多量に土器を含んだ土坑である。西側に展開するものとみられるが、SD03に切られているため確認できない。遺物は弥生時代中期から後期にかけてのものであり、後期の土器は小片が多く遺構上面からの出土が主で、中期の土器は遺構床面付近から出土した。

3) 溝状遺構

・SD01

C-2区北側を東西に走る溝状遺構である。深度約0.2mと浅く、遺物は少量であるが、近世以降の陶磁器片が出土した。

・SD02

C-2区中央付近を東西に走る溝状遺構である。深度約0.3mと浅く、遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

・SD03

C-2区西壁際で検出した溝状遺構である。前述したSK05を切るように南北に走る遺構である。深度約0.5mと深く、断面は逆台形になっている。遺物は弥生時代後期の壺が出土した。

・SD04

SD03に隣接する南北に走る溝状遺構である。最大幅0.6mと狭く、深度約0.5mとSD03とほぼ同じである。断面は緩やかなV字形を呈す。肩部に乗るように弥生時代後期の土器が出土した。SD04を掘削する際にSK05の遺物が混入したものと考えられる。

・SD05

南北に走る溝状遺構である。北側に行くほど浅くなり、南側に行くほど深くなっている。深度約0.2～0.4mである。北側では浅いため掘り方は確認できなかった。断面はなだらかな逆台形を呈しており、後世の削平や柱穴状遺構などにより損壊を受けている。遺物は弥生時代中期後半から後期にかけての土器片が出土したが、まとまった状態での出土ではなかった。

・SD08

北西から南東方向に走る溝状遺構である。深度約0.2mと浅い。SD05と同様になだらかな逆台形の断面を呈する。全体的に遺物が多いが、包含層からの混入と考えられる。東壁際で一段低くなっている箇所からは土器がまとめて出土した。壁を観察するに、調査区外に遺構は続き、土器も多量に含んでいる。遺構上面からは弥生時代後期の土器が、床面近くでは中期の土器がそれぞれ出土した。

・SD09

C-2区東壁際で検出した溝状遺構である。これまで検出した調査区を縦横断する溝状遺構ではなく、調査区途中で終わる溝状遺構である。全体的に遺物を含んでおり、弥生時代後期の土器群が大半である。

C-3区

1) 溝状遺構

・SD01

C-3区南側で検出した北西から南東に走る溝状遺構である。深度約0.3mで、断面はV字形を呈する。遺物は、弥生時代中期から後期の土器や珠洲焼等が出土した。

C-4区

この調査区では、排水溝造成時に遺構の大半が破壊されたものとみられ、遺構は検出しなかった。遺物は小片ではあるが弥生時代後期以降から中世・近現代までの土器などが少量混在して出土した。

D-1区

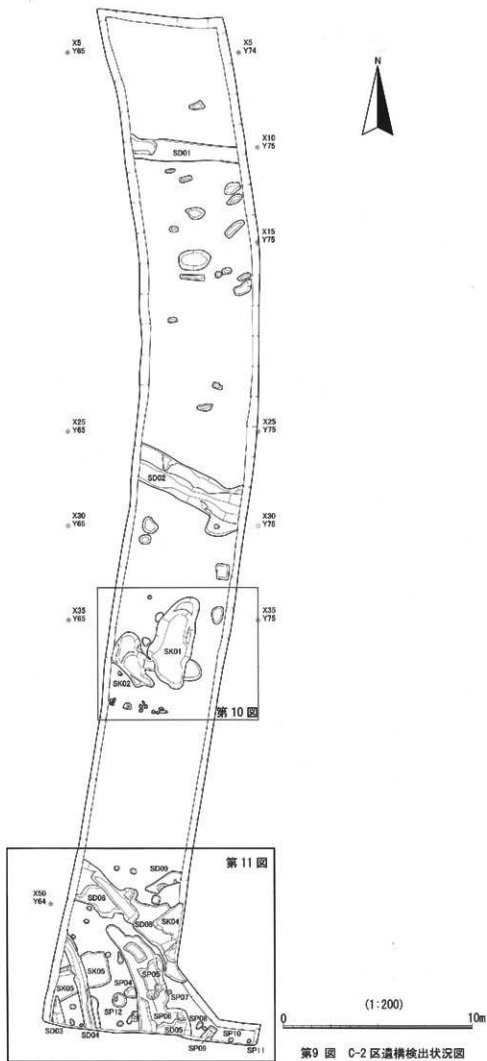
1) 柱穴状遺構

検出した柱穴状遺構は不整形かつ、規則性がない。出土遺物もなく、帰属時期も不明である。近世以降の耕作時もしくはほ場整備の際に削平されたと考えられる。

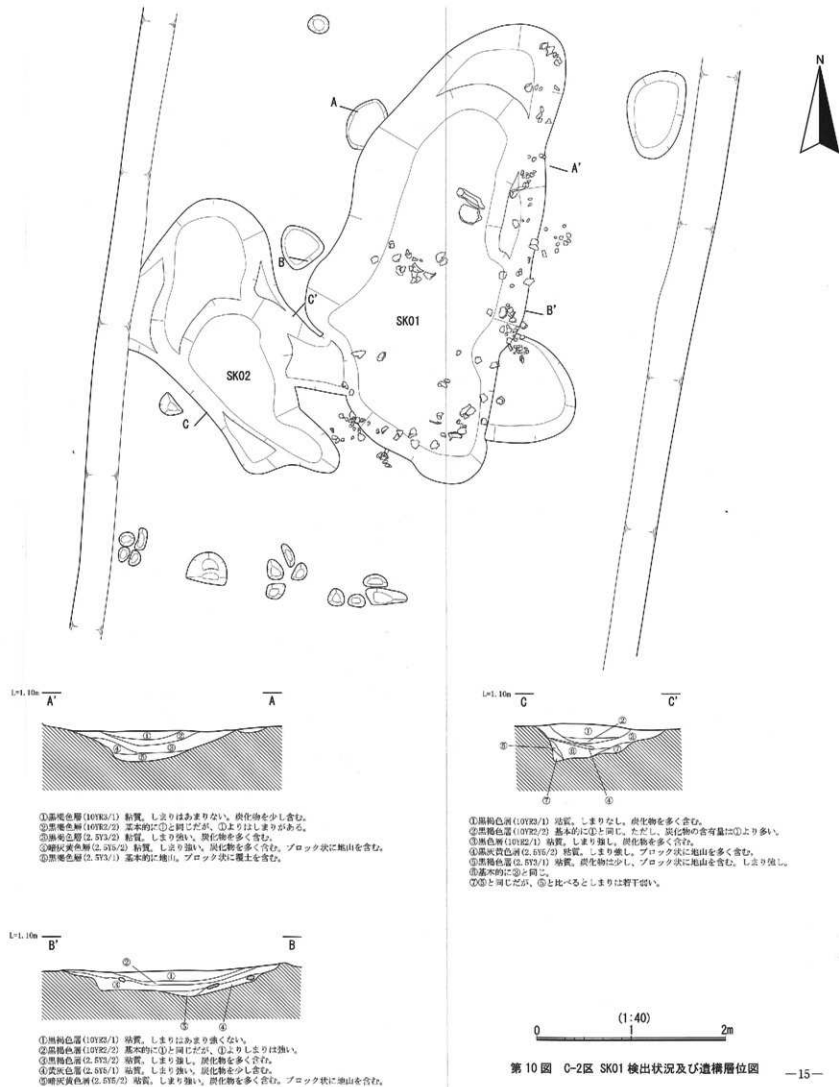
2) 土坑

・SK01

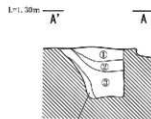
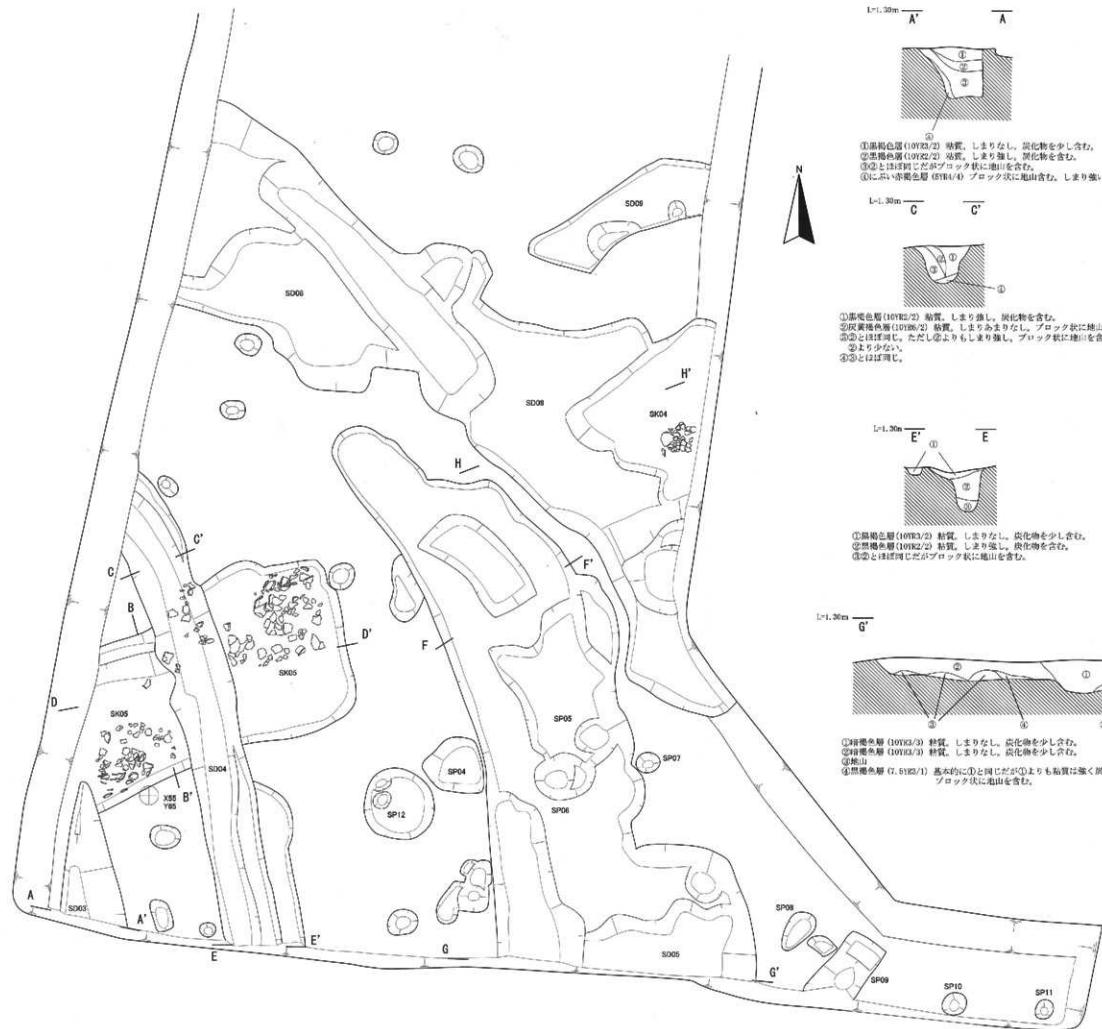
D-1区北側で検出したSK04を切る土坑である。深度は約0.6mである。遺物は小片の土器とともに曲物の底板とみられる木製品が床面から出土した。



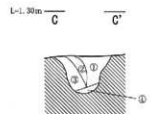
第9図 C-2区遺構検出状況図



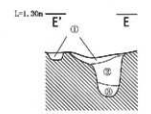
第10図 C-2区 SK01 検出状況及び遺構層位置図



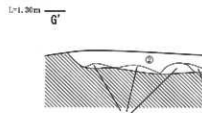
- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0192/2) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 - ②黒褐色層 (0192/2) 粘質。しまり強し。炭化物を含む。
 - ③②とほぼ同じだがブロック状に堆山を含む。
 - ④に多い赤褐色層 (0191/4) ブロック状に堆山含む。しまり強し。



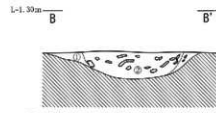
- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0192/2) 粘質。しまり強し。炭化物を含む。
 - ②赤褐色層 (0192/2) 粘質。しまりあまりなし。ブロック状に堆山を含む。
 - ③②とほぼ同じ。ただし②よりもしまり強し。ブロック状に堆山を含むが②より少ない。
 - ④③とはほぼ同じ。



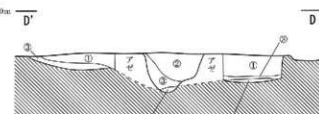
- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0193/2) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 - ②黒褐色層 (0192/2) 粘質。しまり強し。炭化物を含む。
 - ③②とほぼ同じだがブロック状に堆山を含む。



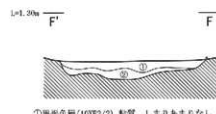
- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0193/3) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 - ②黒褐色層 (0193/3) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 - ③堆山
 - ④黒褐色層 (7. 0192/1) 基本的に①と同じだが②よりも粘質に強く炭化物も多く含む。ブロック状に堆山を含む。



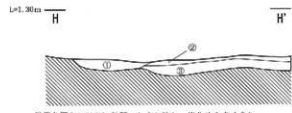
- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0193/3) 粘質。炭化物・土層を多く含む。
 - ②黒褐色層 (0193/2) 粘質。ブロック状に堆山を含む。



- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0193/1) 粘質。しまり強し。炭化物を多く含む。
 - ②黒褐色層 (0192/2) 粘質。しまり強し。ブロック状に堆山を含む。
 - ③黒褐色層 (0192/2) 粘質。しまり強し。炭化物を含む。
 - ④黄灰色層 (2. 019/1) 粘質。しまり強し。基本的に堆山だがブロック状に堆山の礫土を含む。
 - ⑤基本的に堆山だがブロック状に堆山の礫土を含む。炭化物を含む。



- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0193/2) 粘質。しまりあまりなし。炭化物を少し含む。
 - ②赤褐色層 (2. 019/2) 粘質。しまりあまりあり。ブロック状に①を含む。



- L=1.30m
- ①黒褐色層 (0192/1) 粘質。しまり強し。炭化物を多く含む。
 - ②赤褐色層 (0194/2) 粘質。しまり弱し。炭化物を少し含む。
 - ③赤褐色層 (7. 017/1) 堆山。ブロック状に②を含む。

第11図 C-2区南側土器出土状況及び通構層位図

(1:40)

0 1 2m

・ SK04

SE01・02及びSK01に切られる土坑である。長辺約5.0m短辺約4.0mの長方形を呈し、深度約0.5mである。遺物は出土しなかった。

・ SK05

D-1区南西壁際で検出した直径約1.0mの円形の土坑である。深度約0.1mと浅い。

・ SK06

SK05の隣で検出したD-1区外に展開する長方形の土坑である。深度約0.1mでSK05と同様、浅い土坑である。

・ SK07

D-1区南西壁際で検出した不整形の土坑である。調査区外に展開するものと考えられるが、深度約0.1mと浅い。

・ SK08

D-1区北壁際で検出した長辺約1.5m、短辺約0.8mの長方形の土坑である。深度約0.1mと浅い。遺物は出土しなかった。

・ SK09

D-1区中央北側で検出した円形の土坑である。最大幅約0.9m、深度約0.1mと広く浅い。遺物は出土しなかった。

3) 井戸状遺構

・ SE01

D-1区北側で検出した井戸状遺構である。SK04を切っている。最大幅約0.9mの楕円形を呈し、深度約0.7mと深い。遺物は土師器が少量出土し、その他に曲物の側板、箸類などの木製品が出土した。

・ SE02

SE01に隣接する井戸状遺構である。長辺約0.9m、短辺約0.8mの長方形を呈し、深度約0.8mとSE01同様、深い。遺物は少量の土師器片が出土した。

4) 溝状遺構

・ SD01

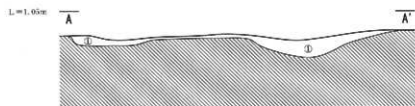
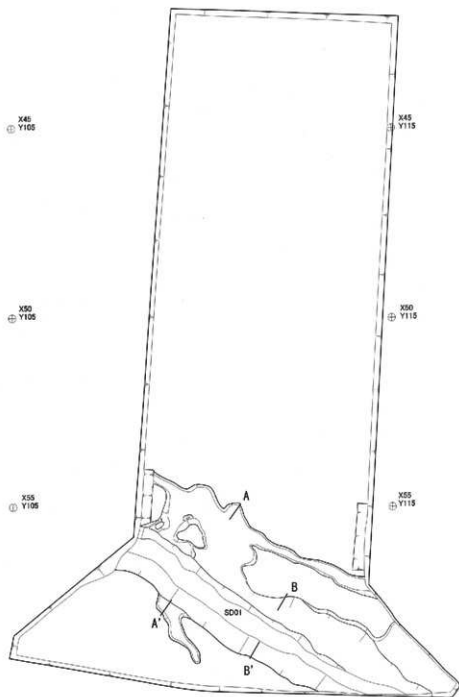
D-1区北壁際で検出した東西に走る溝状遺構である。深度約0.6mと深く、断面はV字形を呈する。遺物は小片の土器が出土した。調査区北側に展開するが、道路により削平されている。

・ SD02

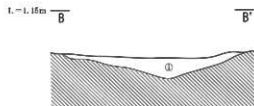
SD01とSK04を接合するようにある溝状遺構である。断面は緩やかなV字形だが、深度約0.2mと浅い。SE01などがオーバーフローした時に、SD01に流し込むための溝状遺構の可能性がある。

・ SD03・04

D-1区北側を東西に走る溝状遺構である。2本の溝状遺構は平行に走る。断面は緩やかな逆台形で、深度約0.1mと浅い。表土から検出面まで浅いので、後世に削平されたと考えられる。遺



①黒褐色層位(513/2) かなり強い粘質。しまりは強く炭化物を少し含む。

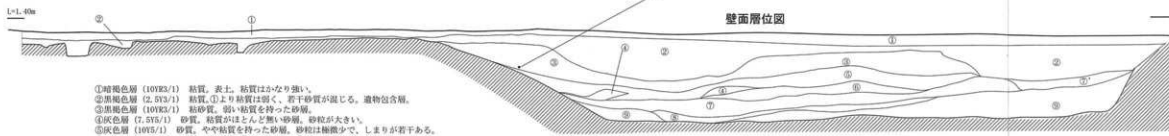
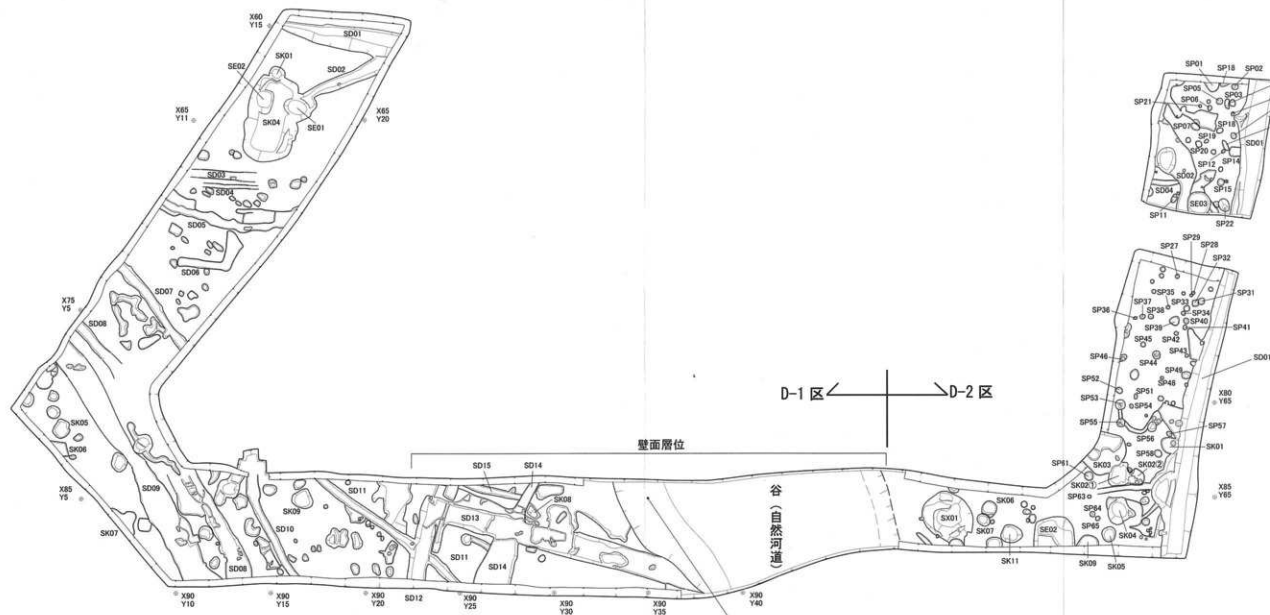


①黒褐色層(2.513/2) かなり強い粘質。しまりは強い炭化物を少し含む。

0 (1:100) 5m (遺構検出状況)

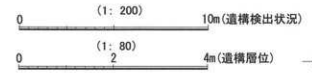
0 (1:40) 1m (遺構層位)

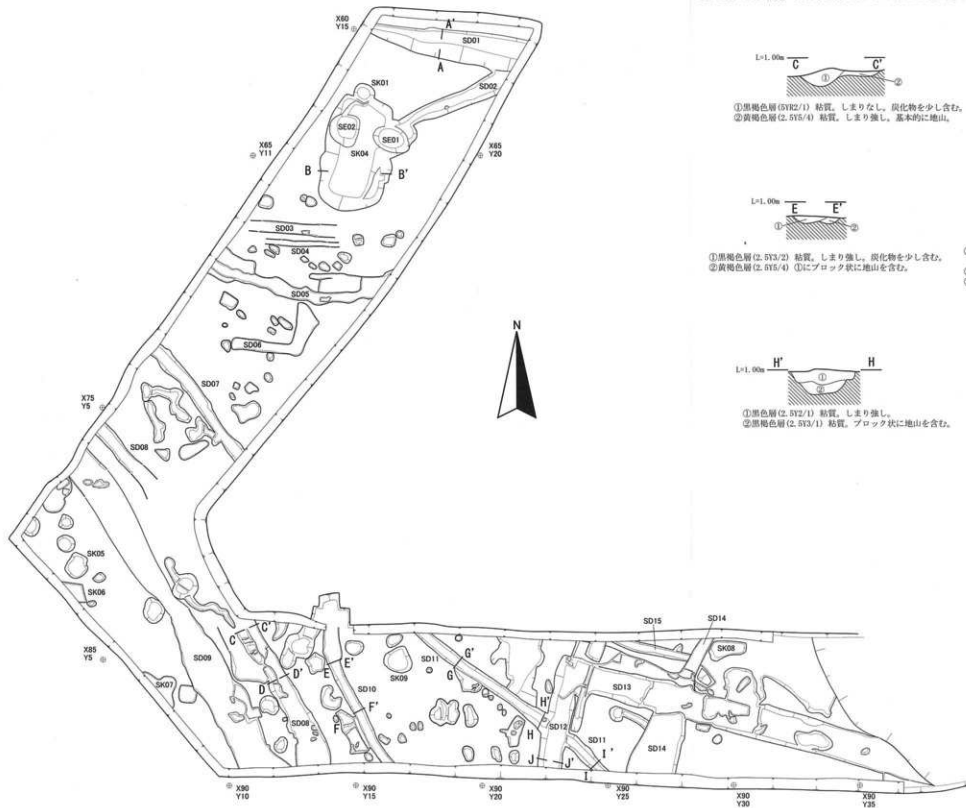
第 12 図 C-3 区遺構検出状況及び遺構層位図



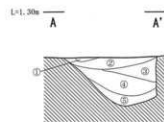
- ①暗褐色層 (10YR2/1) 粘質。表土。粘質はかなり強い。
- ②黒褐色層 (2.5Y3/1) 粘質。①より粘質は弱く、若干砂質が混じる。遺物を含む。
- ③黒褐色層 (10YR2/1) 粘砂質。弱く粘質を持った砂質。
- ④灰色層 (7.5Y5/1) 砂質。粘質がほとんど無い砂質。砂粒が大きい。
- ⑤灰色層 (10Y5/1) 砂質。やや粘質を含んだ砂質。砂粒は細粒で、しまりが若干ある。
- ⑥灰色層 (7.5Y5/1) 砂質。基本的に④と同じだが、①よりは砂粒が小さい。
- ⑦オリーブ黒色層 (7.5Y2/1) 粘砂質。粘質はかなり強いが、しまりはあまり強くない。
- ⑧⑦と基本的に同じ。若干①よりしまりは強い。
- ⑨灰色層 (7.5Y5/1) 砂質。粘質は無く、砂粒は大きい。しまりなし。
- ⑩オリーブ黒色層 (5Y3/1) 粘質。粗土層。腐食有機物を多量に含む。

第 13 図 D-1-2 区遺構検出状況及び谷部層位図

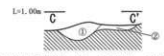




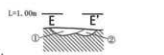
第14図 D-1区遺構検出状況及び遺構層位図



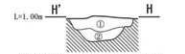
- ①焼灰色層(10Y96/1) 粘質。しまりはあまりなし、ブロック状に地山を含む。
 ②は①と同じだが、しまり、粘質とも①より強い。
 ③焼灰色層(10Y94/1) 粘質。しまり強し。炭化物を少し含む、ブロック状に地山を含む。
 ④とほぼ同じ、しかし、しまりは②より強い。
 ⑤黒色層(5Y2/1) 粘質。しまり、粘質とも強い。砂質を全く含まず、ブロック状に地山を含む。



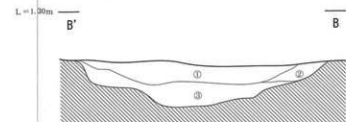
- ①黒褐色層(5Y92/1) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 ②黄褐色層(2.5Y5/4) 粘質。しまり強し。基本的に地山。



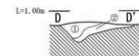
- ①黒褐色層(2.5Y3/2) 粘質。しまり強し。炭化物を少し含む。
 ②黄褐色層(2.5Y5/4) 粘質。しまり強し。①はブロック状に地山を含む。



- ①黒色層(2.5Y2/1) 粘質。しまり強し。
 ②黒褐色層(2.5Y3/1) 粘質。ブロック状に地山を含む。



- ①焼灰色層(10Y96/1) 粘質。若干砂質が混じる。ブロック状に地山を含む。
 ②焼灰色層(10Y95/1) 粘質。しまり強し。炭化物を若干含む。
 ③黒色層(5Y92/1) 粘質。しまり強し。基本的に②と同じと見られるが、若干②よりしまりが強い。



- ①黒褐色層(5Y92/1) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 ②黄褐色層(2.5Y5/4) ①にブロック状に地山を含む。



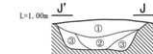
- ①オリーブ褐色層(2.5Y4/4) 粘質。しまり強し。炭化物を含む、ブロック状に地山を含む。
 ②黒褐色層(2.5Y3/2) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 ③黄褐色層(2.5Y5/4) 粘質。地山。



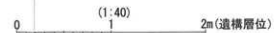
- ①黒褐色層(5Y92/1) 粘質。しまりなし。炭化物を少し含む。
 ②黒褐色層(2.5Y3/2) 粘質。しまりなし。ブロック状に地山を含む。

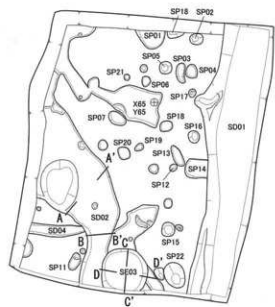


- ①黒色層(2.5Y2/1) 粘質。
 ②黒褐色層(2.5Y3/1) ①に少し地山が混じる。



- ①黒色層(2.5Y2/1) ②に少し地山が混じる。
 ②黒色層(2.5Y2/1) 粘質。
 ③黒褐色層(2.5Y3/1) ②にブロック状に地山を含む。



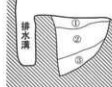


L=1.30m A' A



- ①黒褐色層 (2.5V3/1) 粘質。しまり若干あり。炭化物を少し含む。
 ②①とほぼ同じだが、炭化物を粘質に多く含む。
 ③黒褐色層 (10YR3/1) ①とほぼ同じだが、若干砂質が強い。

L=1.30m C' C



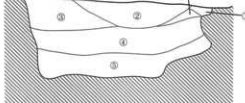
- ①暗褐色層 (10YR2/3) 粘質。しまり強し。ブロック状に地山を含む。
 ②黒色層 (2.5Y2/1) 粘質。しまり若干強し。ブロック状に地山を含む。
 ③灰色層 (7.5Y6/1) 砂質。しまりなし。黒色土を部分的に含む。

L=1.10m E' E



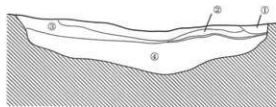
- ①黒褐色層 (7.5YR3/1) 粘質。遺物を多く含む。
 ②暗褐色層 (7.5YR3/4) 粘質。しまりあり。
 ③黒褐色層 (5YR2/1) 粘質。しまり強く炭化物を含む。ブロック状に地山を含む。

L=1.10m G' G



- ①に引く褐色層 (7.5YR5/4) 粘質。しまり強い。
 ①' に引く褐色層 (7.5YR5/4) 粘質。しまり強い。
 ②暗褐色層 (7.5YR3/1) 砂質。
 ③黒褐色層 (7.5YR2/3) 粘質。砂混じり。
 ④黒層 (7.5YR2/1) 腐植土。
 ⑤相灰色層 (7.5YR6/1) 地山。黒色混じり。

L=1.10m I' I



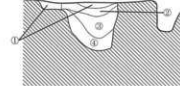
- ①黒色層 (7.5YR2/1) 粘質。炭化物を多く含む。
 ②に引く褐色層 (7.5YR5/2) 粘質。地山をブロック状に含む。
 ③基本的には①と同じ。①よりしまりは強い。
 ④①-③と同じ。粘質。しまりも若干強い。

L=1.30m B' B



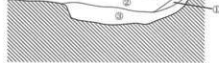
- ①暗褐色層 (2.5Y3/1) 粘質。しまり若干あり。炭化物を少し含む。

L=1.00m D' D



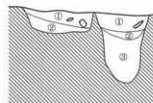
- ①暗褐色層 (10YR3/3) 粘質。しまり強し。ブロック状に地山を含む。
 ②暗褐色層 (10YR7/4) 粘質。砂質強し。しまりなし。基本的な地山。
 ③灰色層 (2.5Y2/1) 粘質。しまり若干強し。ブロック状に地山を含む。
 ④灰色層 (7.5Y6/1) 砂質。しまりなし。黒色土を部分的に含む。

L=1.10m F' F



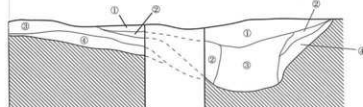
- ①黒褐色層 (7.5YR3/1) 粘質。遺物を多く含む。
 ②暗褐色層 (7.5YR3/4) 粘質。しまりあり。
 ③黒褐色層 (5YR2/1) 粘質。しまり強く炭化物を含む。ブロック状に地山を含む。

L=1.10m H' H

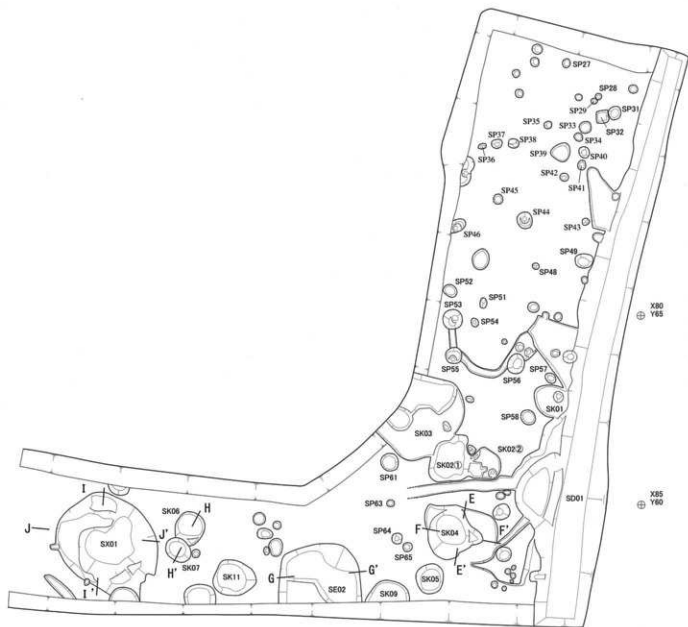


- ①黒色層 (7.5YR2/1) 粘質。しまりはあまり強くない。
 ②黒褐色層 (7.5YR2/1) 基本的には①と同じ。しまりは強い。
 ③暗褐色層 (7.5YR3/1) 粘質。しまり強い。

L=1.10m J' J



- ①黒色層 (7.5YR2/1) 粘質。炭化物を多く含む。
 ②に引く褐色層 (7.5YR5/2) 粘質。地山をブロック状に含む。
 ③基本的には①と同じ。①よりしまりは強い。
 ④①-③と同じ。粘質。しまりも若干強い。



0 (1:200) 5m (遺構検出状況)

第15図 D-2区遺構検出状況及び遺構層位図

0 (1:40) 2m (遺構層位)

物は出土しなかった。

・SD05

SD03・04の隣で検出した東西に走る溝状遺構である。形が不整形なのは、SD03・04と同様、ほ場整備や耕作による影響が考えられる。深度約0.1mと浅い。遺物は出土しなかった。

・SD06

SD05の隣で検出したL字状に曲がる溝状遺構である。深度約0.1mと浅い。この溝状遺構も削平されているため、全容は明らかでない。

・SD07

北西から南東に向けて走る溝状遺構である。最大幅約0.5mと狭く、深度約0.1mと浅いことから後世に削平されたと考えられる。遺物は出土しなかった。

・SD08

SD07に平行するように北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約0.9m、深度約0.1mである。SD07と同様、ほ場整備などにより削平されたと考えられる。遺物は出土しなかった。

・SD09

SD08と平行するように北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約1.5mと広いが、深度約0.1mと浅い。ほ場整備や耕作により削平されたと考えられる。珠洲焼の底部が1点出土した。

・SD10

SD08・09に平行する溝状遺構である。最大幅約0.3m、深度約0.2mである。遺物は出土しなかった。

・SD11

SD10にほぼ平行する溝状遺構である。遺構の方向、幅からSD07の延長線になるものと考えられる。

・SD12

SD11を切るように南北方向に走る溝状遺構である。最大幅約0.9m、深度約0.2mである。遺物は小片の土器が出土したが、時期等については不明である。

・SD13

SD12に直交するように北西から南東方向に走る溝状遺構である。SD12との切り合いは不明確だが、SD12がSD13を切っているかと考えられる。幅約1.0mと広く、深度は南東方向に行くに従って深くなっていく。しかし、谷部（自然河道）にさしかかる箇所より明確な遺構の線は消滅している。遺構自体からの出土遺物は少なかったが、北側の肩部においては土器が一括で出土した（第28図）。土器の他にも、グリーン・タフのチップに混じって翡翠製石製品が出土した（第53図12）。

・SD14

SD13に切られるようにSD12とほぼ平行に南北に走る溝状遺構である。最大幅約1.6mだが、北方向に行くほど幅が狭くなっていく。深度約0.1mと浅い。遺物は小片の土器が出土した。

・SD15

SD14に切られるようにSD13に平行する溝状遺構である。最大幅約0.2mと狭く、深度約0.2mである。遺物は小片の土器が出土した。

5) その他の遺構

谷部もしくは自然河道と思われる落ち込みを検出した。深度約0.7mと深い。堆積層は砂層で構成されている。遺物は第33図(108～121)・第34図(122～126)の土器群が出土した。また、落ち込みが始まる西側の肩部からは特殊石製品(第54図)が出土した。しかし、この石製品に伴う遺構は確認できなかった。

D-2区

1) 柱状遺構

多数の柱状遺構を検出した。しかし、削平を受けており浅く小さい。また遺物を伴う柱状遺構は少なく、遺物も小片で帰属時期はほとんどが不明である。

2) 土坑

・SK01

SD01の肩部にある土坑である。最大幅約0.9mで楕円形を呈し、深度約0.2mである。床面には柱状遺構が掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

・SK02

SK03と隣接する土坑である。深度約0.1mと浅い。遺物は弥生時代後期の把手付土器が出土した(第30図134)。

・SK03

SK02に隣接する土坑である。切り合いは不明確だが、SK03がSK02に掘り込まれたと考えられる。調査区外にも展開し、深度は壁際付近で約0.3mと西に向けて深くなっている。

・SK04

D-2区中央付近で検出した円形の土坑である。直径約1.0m、深度約0.6mである。遺構上面より高杯の杯部が裏返しの状態で埋土より出土した。時期は弥生時代後期後半とみられる。

・SK05

SK04と隣接するように検出した円形の土坑である。直径約0.9m、深度約0.4mである。遺物は出土しなかった。

・SK06

D-2区西側で検出した円形の土坑である。直径約0.9m、深度約0.3mとSK05とほぼ同じである。遺物は弥生時代後期の土器片と珠洲焼甕が遺構上面より出土した。

・SK07

SK06に隣接する土坑である。楕円形を呈し、最大幅約0.6m、深度約0.5mと大きさはSK06よりも小さい。出土遺物はSK06と同様、上面に珠洲焼甕の破片が出土した。

・SK09

D-2 区南壁際で検出したSE02と隣接する土坑である。調査区外に展開する。深度約0.1mと浅いが、壁を見ると調査区外に向かって深くなっていく。遺物は出土しなかった。

・SK11

SK06・07南東で検出した楕円形の土坑である。最大幅約1.0m、深度約0.5mと大きめの土坑である。SK11の周辺には土器が調査区南側に展開するようにまとまって出土した。SK11の出土土器と周辺でまとまっている出土遺物との間には時期差はない。

3) 井戸状遺構

・SE02

隅丸方形を呈する井戸状遺構である。最大幅約2.5m、深度約1.0mと大きく深い。地山を掘り込み、湧水層とみられる砂層まで掘り込んでいる。調査区外に展開するとみられる。遺物は小片の土器が出土した。

・SE03

円形を呈し直径約1.0m、深度約0.8mとSE02に比べて小さい。SE02と同様、地山を掘り抜き湧水層とみられる砂層面まで達している。遺物は埋土中に小片の弥生土器が出土した。

4) 溝状遺構

・SD01

D-1 区東側で検出した溝状遺構で、調査区に東隣する民家の敷地へ展開するとみられる。深度約0.7mである。遺物は弥生土器や珠洲焼甕の破片などが混在して出土した。なお、当区と道路を挟んで北側に隣接するC-2区では、このSD01に対応する溝は確認できなかったことから、調査区北端部で東もしくは西方向に屈曲する可能性がある。

・SD02

SE03に隣接するように中央南から北西方向に屈曲する溝状遺構である。南側では深度約0.1mと浅いが、調査区西壁付近では約0.2mと深くなっていく。この溝状遺構は北西方向に広がっていくことも特徴的である。断面はややなだらかな摺鉢状となっており、遺構床面直上には炭化物が層序をなしていた。弥生時代中期後半とみられる土器や珠洲焼摺鉢が出土した。

5) その他の遺構

その他の遺構として、SX01と呼称した遺構を検出した。最大幅約2.4mのやや楕円形を呈し、深度約1.0mと大きく深い。床面は、テラスを持ちながらオーバーハング気味に地山を掘り込み、砂層まで達している。遺物は弥生時代中期後半から中世にかけての土器が出土した。この遺構に関しては、土壌分析を行っており、常時水溜まりになっていたという結果が出ている。遺構の形状や遺物の出土状況などから中世の井戸状遺構の可能性はある。

E-1 区

調査区の幅が約1mと大変狭く、すぐ隣を走る排水溝造成時の損壊を受けている。また、表土

から浅いため、ほ場整備や耕作などにより削平されたとみられる。その為、遺構の残存状況は悪い。

1) 柱穴状遺構

複数の柱穴状遺構を検出した。大部分が削平を受けたとみられ、小さいものになっている。また、各遺構間の関係性については、調査区の幅が狭いことから限定されるが、SP17・18・19は遺構の形態や埋土がほぼ同じであることから関連性を持っているとみられる。2間の建物になるとみられるが、時期は不明である。また、SP04・05の様に溝状遺構に絡む柱穴状遺構も確認できた。

2) 溝状遺構

・SD01

E-1区中央付近で検出した北西から南東方向に向かう溝状遺構である。最大幅約0.8m、深度約0.1mと浅い。遺構の一部は近世の攪乱により損壊を受けている。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した。

・SD02

L字状に屈曲する溝状遺構で、SD01に切られる。最大幅約0.7m、深度約0.2mである。排水溝造成時により一部損壊を受け、さらに排水溝がある東側に展開するため、全容は明らかではない。弥生時代後期の土器が出土した。

・SD03

東西に走る溝状遺構である。大部分が排水溝造成時に損壊を受けている。最大幅約1.0m、深度約0.1mと広く浅い。遺物は出土しなかった。

・SD04

東西に走る溝状遺構である。SD03と同様、大部分が損壊を受けている。最大幅約0.4m、深度約0.1mである。遺物は出土しなかった。

・SD05

北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約1.5m、深度約0.1mと広く浅い。弥生時代後期後半の土器が出土した。この溝より北側では遺構は検出しなかった。

・SD06

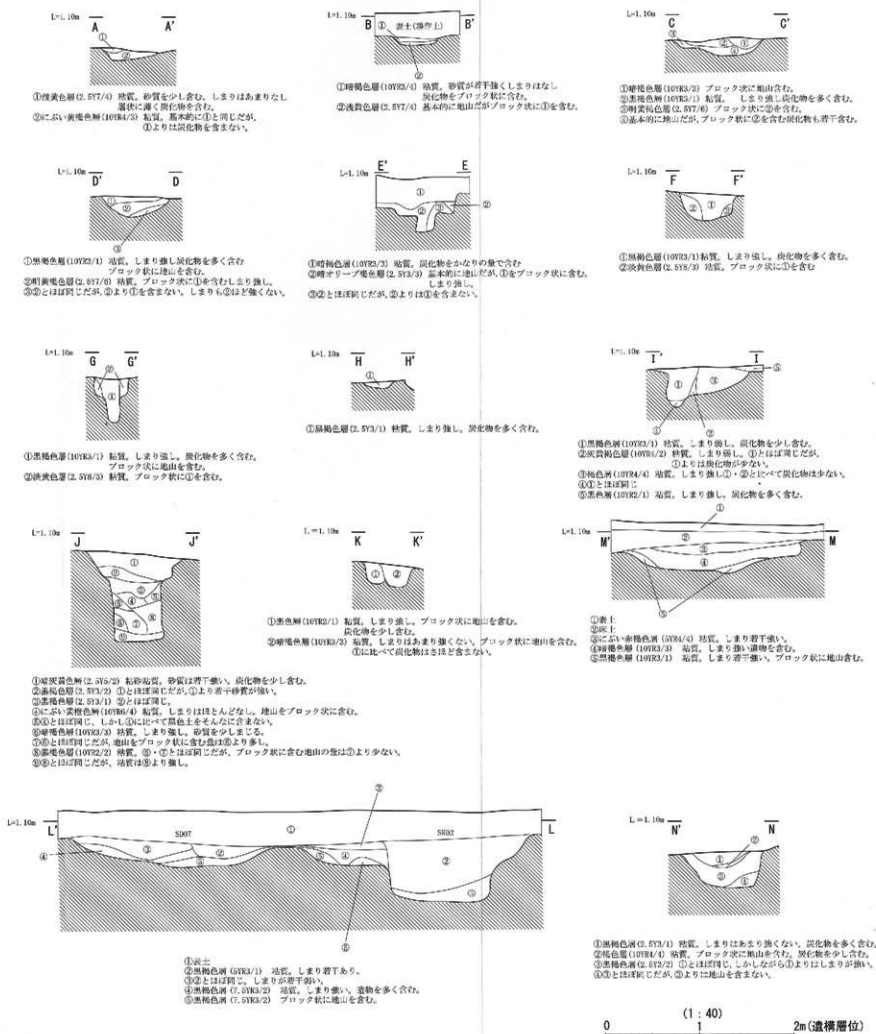
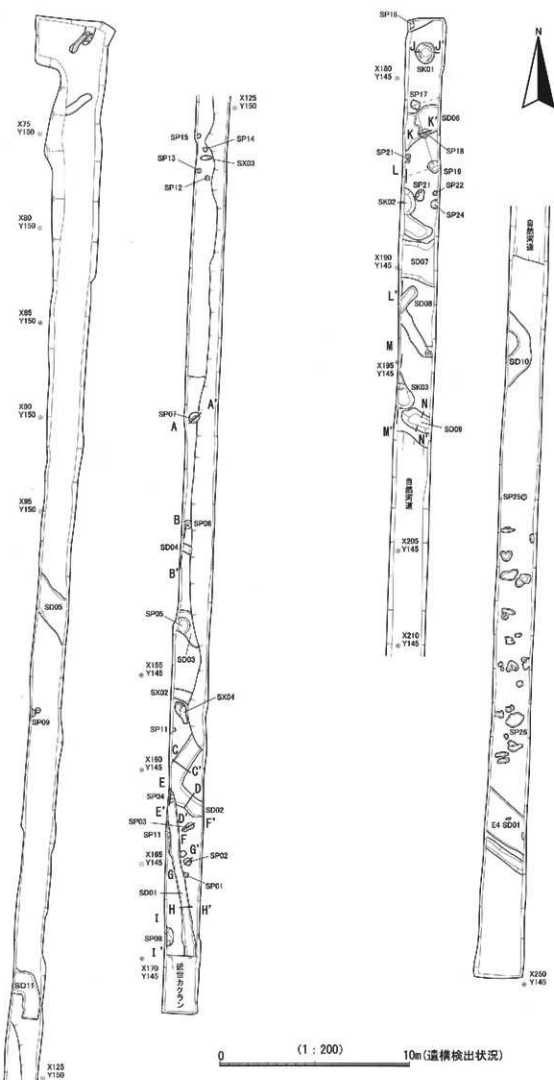
東西に走る溝状遺構である。最大幅約1.5m、深度約0.1mと広く浅い。弥生時代後期後半の土器が出土した。

・SD07

東西に走る溝状遺構である。最大幅約2.0m、深度約0.2mと広く浅い。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した。遺構の形状等からSD06と調査区外で繋がる可能性があり、その場合、周溝状の遺構になると考えられる。

・SD08

SD07に隣接する溝状遺構である。調査区は横切らず、調査区中央付近にその先端があり、南西方向に展開する。西壁の状況から調査区外に続いているものと考えられる。最大幅約0.8m、



第16図 E-1区遺構検出状況及び遺構層位図

深度約 0.1m である。弥生時代中期後半の土器が出土した。

・SD09

SK03 に隣接する溝状遺構である。最大幅約 1.0m、深度約 0.4m である。弥生時代中期後半の土器が出土した。

・SD10

中央付近で屈曲する周溝状遺構である。最大幅約 1.0m、深度約 0.1m と広く浅い。遺物は出土しなかった。

この他、南側でも溝状遺構を検出したが、E-4 区で検出した溝状遺構と同一の遺構のため、E-4 区の項で取り扱うことにする。

3) 土坑

・SK01

E-1 区中央付近で検出した円形の土坑である。直径約 1.0m、深度約 1.0m の大きな土坑で、検出面から下約 0.3m までは摺鉢状の断面を呈するが、それから下は壁面がほぼ垂直で円筒形を呈する。井戸状遺構としては小さく、柱穴としては大きい。この SK01 に対応する遺構は検出しなかった。

・SK02

E-1 区西壁にかかる円形とみられる土坑である。最大幅約 1.8m、深度約 0.7m と、SK01 よりは浅い。遺構内部より古墳時代前期のほぼ完形に近い甕が口縁を上に向けた状態で出土した。

・SK03

SD09 に隣接する楕円形の土坑である。調査区西側に展開するものとみられる。最大幅約 2m、深度約 0.2m である。遺物は出土しなかった。SD09 の続きの部分の可能性も考えられる。

4) その他の遺構

その他性格不明の遺構や近現代の攪乱、自然河道などを検出した。

E-2 区

1) 柱穴状遺構

複数の柱穴状遺構を検出したが、削平を受けているとみられ、いずれも形が小さく浅い。セツト関係になるとみられる柱穴状遺構も確認できるが、展開方向などは不明である。

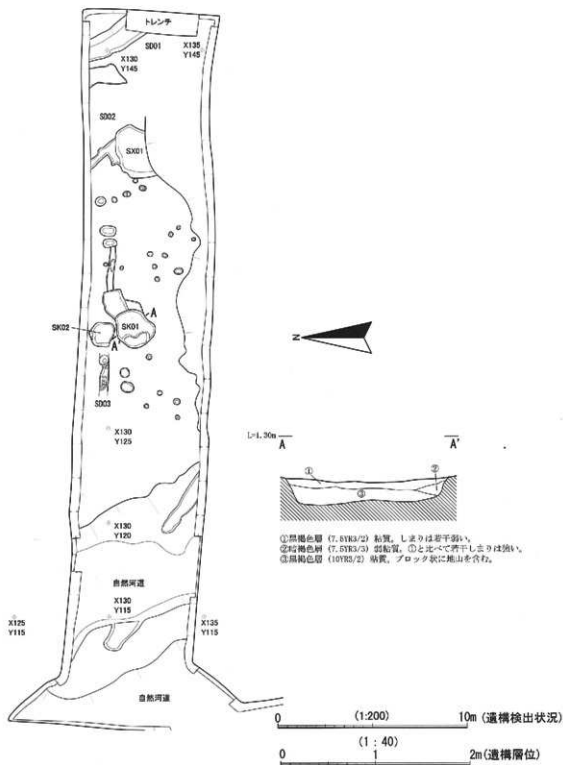
2) 土坑

・SK01

E-2 区中央北壁付近で検出した長方形の土坑である。最大幅約 3.5m、深度約 0.3m と大きい。遺物は多く含んでおり、弥生時代中期後半から後期後半にかけての土器が出土した。

・SK02

SK01 に隣接する方形の土坑である。最大幅約 1.3m、深度約 0.2m と SK01 に比べて浅い。遺物は SK01 と同時期の遺物が出土したことから、両者はほぼ同時期の遺構として捉えることができ



第17図 E-2区遺構検出状況及び遺構層位図

る。

3) その他の遺構

自然河道とみられる落ち込みを検出した。埋土は基本的に砂層で、深度約0.3m、弥生時代後期の土器片を多量に含んでいる。

E-3 区

1) 溝状遺構

・SD01

E-3 及び E-4 区をまたぐ北西から南東方向に走る溝状遺構である。最大幅約 1.8m、深度約 0.5m で、断面は V 字形を呈する。比較的大きな溝ではあるが、遺物はほとんど含まず、また、埋土も一度に埋められたような堆積をしている。

・SD02

SD01 に隣接する溝状遺構である。E-3 区西壁ではこの SD02 の続きを確認することはできなかった。最大幅約 0.2m と狭い。遺物は出土しなかった。

・SD03

SD02 に平行する溝状遺構である。遺構の規模は SD02 とほぼ同じである。E-3 区西壁・東壁では SD03 の続きを確認できなかった。遺物は出土しなかった。

・SD04

SD02・03 に平行する溝状遺構である。遺構の規模は 02・03 とほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

・SD05

SD02・03・04 に切れ、北東から南西に向けて走る溝状遺構である。遺構の規模は 02・03 とほぼ同じである。遺物は出土しなかった。

・SD06

北西方向から調査区西側で屈曲し、南東方向に向かう周溝とみられる溝状遺構である。なだらかに L 字状に屈曲しており最大幅約 3.0m、深度約 0.2m と広く浅い。遺構西・北側の肩部はなだらかだが、東・南側は角度をもっている。遺物はいずれも混入とみられるが、弥生時代後期の土器片、須恵器杯や壺口縁部などが出土した。調査区外に展開する。

・SD07

SD06 に切られている、北西から南東に向けて走る溝状遺構である。遺構の規模は SD02 とほぼ同じである。古墳時代前期の土器が出土した。

・SD08

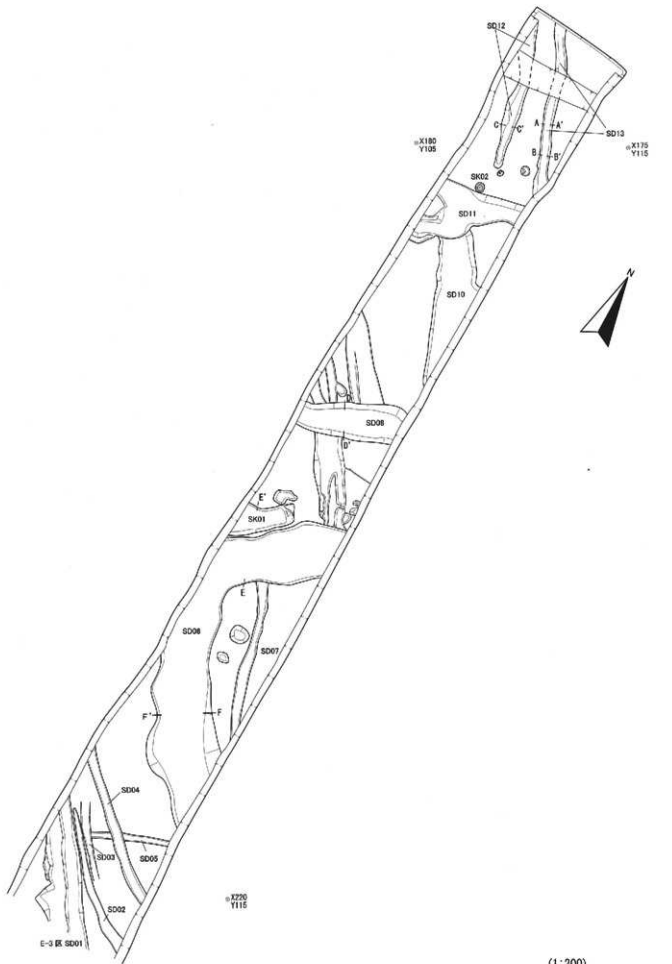
北東から南西に走る溝状遺構である。最大幅約 2.0m、深度約 0.3m である。遺物は弥生時代後期の土器が上面より出土した。

・SD10

北西から南東に走る溝状遺構である。東壁では確認できるが、SD11 に切られているため、西壁では確認できない。南東方向に向けて広がっている。深度は約 0.4m である。

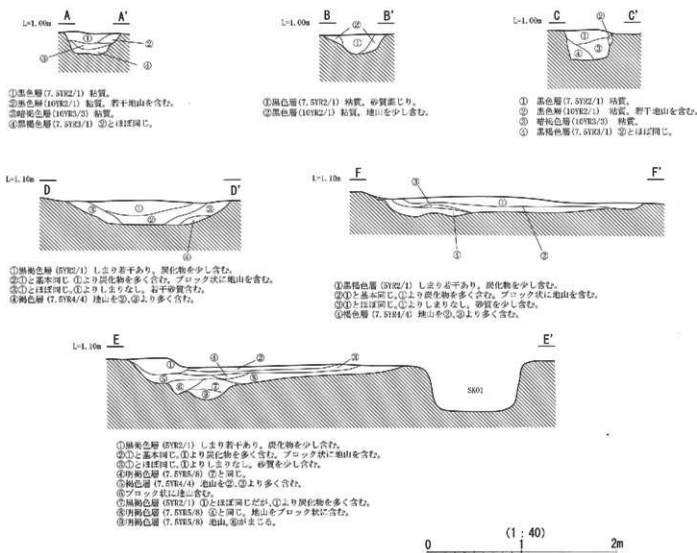
・SD11

東西に走る溝状遺構である。SD10 を切っており、1本の溝から2段の溝になっている。幅は最



第 18 图 E-3 区遺構検出状況図

0 (1:200) 10m



第19図 E-3区遺構層位図

大で約2.0m 深度約0.2mと若干浅い。北側の肩部がややなだらかになっているが、南側は角度がある。遺物は古墳時代前期の上器が出土した。

・SD12

北西から調査区中央付近で終わる溝状遺構である。近現代の擾乱により損壊を受けている。最大幅約0.7m、深度約0.4mである。遺物は古墳時代前期の甕が完形品で横たわるように出土した。

・SD13

SD12に平行する溝状遺構である。途中、近現代の擾乱で損壊を受けている。遺構の規模はSD12とほぼ同じである。遺物は少量だが、SD12とほぼ同時期の土器が出土した。

2) 土坑

・SK01

この区で土坑とみられる遺構は、このSK01のみである。SD06に隣接する土坑で、西壁を観察すると、調査区外に続くものとみられる。深度約0.5mである。遺構床面直上で、木組みとみら

れる材を置き、その上から土器が出土した。土器は古墳時代前期の甕とみられる。口縁部のみが欠損しているが、保存状態は良好である。土器内部の土壌は遺構埋土と同質の土壌とみられる。

E-4 区

1) 柱穴状遺構

・SP01

検出した柱穴状遺構はこのSP01のみである。直径約0.6m、深度約0.4mの円形の柱穴状遺構である。この遺構に対応する遺構はE-4区及び隣接するE-1区でも検出していない。遺物は出土しなかった。

2) 溝状遺構

・SD01 ①

E-4区北西から南東方向に向けて走る溝状遺構である。E-1区南端部でもこの溝の続きが確認できた。最大幅約1.7m、深度約0.4mである。肩部は両方ともほぼ垂直である。遺物は床面一面に広がりを見せ、時期は弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけての土器が出土したが、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器群が主体である。

・SD01 ②

E-4区南壁付近でほぼ直角に屈曲する溝状遺構である。①との切り合い関係は不明瞭である。最大幅約1.0mで、肩部はほぼ垂直である。

・SD02

X235Y125付近でL字状に屈曲する溝状遺構であり、遺構の末端は調査区内で完結している。断面は南側の肩部がややなだらかで、北側がほぼ垂直になる。また、北側には地山を含んだ土壌が流れ込んでいる。遺物は底面に弥生時代中期後半の長頸壺と、同一個体とみられる胴部が出土した。

・SD05

E-4区西側で北西から南東方向に向けて走る溝状遺構である。最大幅約1.0m、深度約0.2mと浅い。遺物は出土しなかった。この溝から西側部分及びE-3区SD01との間では遺構は確認されない。

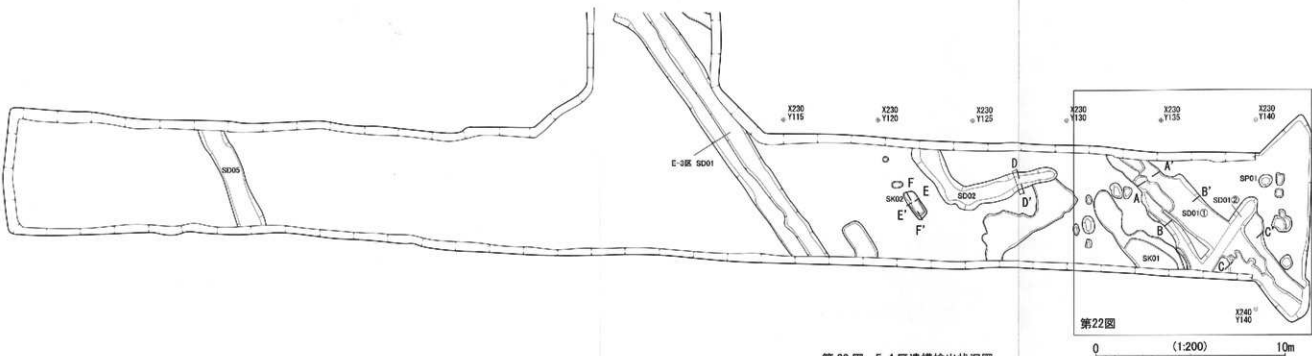
3) 土坑

・SK01

SD01②に隣接する土坑である。最大幅約1.0m、深度約0.2mと浅い。遺物は小片だが、弥生時代後期後半の土器が出土した。

・SK02

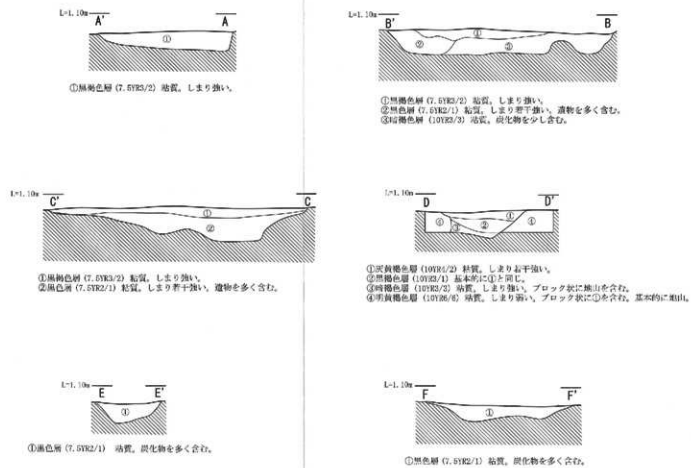
SD02に隣接する長方形の土坑である。最大幅約2.0m、深度約0.2mとSK01と同様に浅い。遺物は弥生時代中期後半の土器が横たわるように出土した。



第20図 E-4区遺構検出状況図



第22図 E-4区SD01土器出土状況図



第21図 E-4区遺構層位図

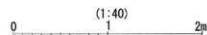


表1. 検出遺構一覧①

地区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時期	備考
		X	Y			
C-1	SP03	29	28	無	不明	
	SP04	29	24	無	不明	
	SP05	33	24	無	不明	
	SP06	32	25	無	不明	
	SP11	34	25	無	不明	
	SP13	48	22	無	不明	
	SP15	49	23	無	不明	床面に石組みが検出。礎石?
	SP16	62	19	無	不明	
	SP18	22	29	無	不明	
	SP22	33	25	無	不明	
	SP23	29	27	無	不明	
	SP92	5	29	無	不明	
	SK03	29	26	無	不明	
	SK04	30	27	土器	弥生～中世?	中世の遺物は上からの流れ込み?
	SK01	2～3	25～26	無	不明	
	SK02①	6～7	25～30	陶器類	近世～近現代	
	SK02②	6～10	25～30	陶器類	近世～近現代	
	SK04	15～17	22～30	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	
	SK05①	16～20	9～20	土器・埴輪	弥生時代後期～古墳時代前期・中世	
	SK05②	20～23	25～29	土器	弥生時代後期	
	SK05③	23～24	29～28	土器	弥生時代後期	
	SK06	26～27	23～29	土器	弥生時代後期	SK03に平行する。
	SK07①	48～53	28～25	土器・下駄	弥生時代後期～古墳時代前期・中世	①は②を切る。
	SK07②	42～46	22～25	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	①に併れる。
	SK03	23	23	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	SK07の横断壁?
	C-2	SP04	64	68	土器	中世
SP05		63	69	無	不明	SK05を覆り込む。
SP06		65	69	無	不明	SK05を覆り込む。
SP07		64	70	無	不明	SK05に近接、かなり小さい。
SP08		67	72	無	不明	
SP09		67	73	無	不明	鎌倉区河原に展開する?
SP10		67	74	無	不明	
SP11		68	75	無	不明	
SP12		63	66	無	不明	
SK01		37	71	土器・石器	弥生時代中期	
SK02		37	68	土器	弥生時代中期	
SK05		51	62	土器	弥生時代中期後半～後葉	中葉土器は床面、後期土器は上面より出土している。
SK01		10～16	68～74	陶器類	近世～近現代	
SK02		27～29	68～71	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	C-1区SK04と並びつく?
SK03		53～56	64～64	土器	弥生時代後期	SK05を切る。
SK04		52～57	66～66	土器	弥生時代後期	
SK05		52～57	67～70	土器	弥生時代中期後半～後葉	
SK08	19～23	66～71	土器	弥生時代中葉～後葉		
SK09	48～49	71～69	土器	弥生時代後葉	土器に併れる。	
C-3	SK01	56～69	108～115	土器・埴輪	弥生時代中期～後葉・中世	C-1区SK04、C-2区SK02の延長?
	SK01	63	15	土器・木製品	中世	SK04を覆り込む。
B-1	SK04	63	15	無	不明	SK01・02・SK01に覆り込まれる。

表 1. 検出遺構一覧②

地区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時期	備考
		X	Y			
D-1	SK05	81	4	無	不明	
	SK06	82	4	無	不明	
	SK07	87	7	無	不明	
	SK08	86	28	無	不明	周辺では土層が一帯で付土している。
	SK09	86	17	無	不明	
	SK01	84	17	土師器・木製品	中世	SK04を覆り込む。
	SK02	85	14	土師器	中世	SK01を覆り込む。
	SD01	69~60	16~22	土師器?	古墳~古代?	C-1(FS007)①とほぼ直交する。
	SD02	62~64	21~17	無	不明	SD01とSK04を包含させる。
	SD03	68~68	11~13	無	不明	瀬戸時の載?
	SD04	68~68	12~14	無	不明	瀬戸時の載?
	SD05	69~70	9~16	無	不明	瀬戸時の載?
	SD06	71~73	13~16	無	不明	瀬戸時の載?
	SD07	73~77	7~11	無	不明	
	SD09	76~89	5~13	無	不明	SK07に平行。
	SD00	77~89	4~11	瓦・埴輪	中世	
	SD10	84~89	14~16	無	不明	SK08に平行。
	SD11	84~99	17~28	無	不明	SK07の延長?
	SD12	84~89	24~23	土師	不明	SD11を切る。
	SD13	86~89	25~27	土器・石製品	弥生時代後期~古墳時代前期	SD12に直交。SD12を切る。
SD14	84~99	29~27	土器	不明	SD12に切られる。	
SD15	84~85	25~28	土師	不明	SD14に切られ、SD13と平行する。	
SD01	84~86	27~31	土器	弥生時代中~後半		
D-2	SP01	63	66	無	不明	
	SP02	63	66	無	不明	
	SP03	64	66	無	不明	
	SP04	64	66	無	不明	
	SP05	61	65	無	不明	
	SP06	64	65	無	不明	
	SP07	66	64	無	不明	
	SP08	66	65	無	不明	
	SP11	69	63	無	不明	
	SP12	67	66	無	不明	
	SP13	67	66	無	不明	
	SP14	67	67	無	不明	
	SP15	68	66	無	不明	
	SP16	66	66	無	不明	
	SP17	66	66	無	不明	
	SP18	63	66	無	不明	
	SP19	66	64	無	不明	
	SP20	66	63	無	不明	
	SP21	61	61	無	不明	
	SP22	69	66	無	不明	
SP27	73	63	無	不明		
SP28	71	63	無	不明		
SP29	74	63	無	不明		
SP31	74	64	無	不明		

表1. 検出遺構一覧③

地区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時期	備考
		X	Y			
B-1	SP32	75	51	瓦	不明	
	SP33	75	53	瓦	不明	
	SP34	75	53	瓦	不明	
	SP35	75	52	瓦	不明	
	SP36	76	51	瓦	不明	
	SP37	76	52	瓦	不明	
	SP38	76	52	瓦	不明	
	SP39	76	53	瓦	不明	
	SP40	76	53	瓦	不明	
	SP41	76	53	瓦	不明	
	SP42	76	53	瓦	不明	
	SP43	77	53	土器	弥生時代後期～古墳時代前期	
	SP44	77	52	瓦	不明	
	SP45	77	51	瓦	不明	SP42とセット?
	SP46	77	50	瓦	不明	
	SP48	80	52	瓦	不明	
	SP49	79	51	瓦	不明	
	SP51	79	51	瓦	不明	
	SP52	79	50	瓦	不明	SP40とセット?
	SP53	80	50	瓦	不明	
	SP54	80	51	瓦	不明	
	SP55	81	50	瓦	不明	
	SP56	81	52	瓦	不明	
	SP57	82	53	瓦	不明	
	SP58	82	52	土器	弥生時代後期	
	SP61	84	58	瓦	不明	
	SP63	85	58	瓦	不明	
	SP64	85	58	瓦	不明	
	SP65	85	58	瓦	不明	
	SK01	82	63	瓦	不明	
	SK02	83	60	土器	弥生時代後期	
	SK03	83	59	瓦	不明	SK02を参照。
SK04	85	60	土器	弥生時代後期後半		
SK05	87	59	瓦	不明	SK04に隣接。	
SK06	86	53	土器・漆器	弥生時代後期・中世	SK07に近られる。	
SK07	85	53	土器・漆器	弥生時代後期・中世	SK06に近られる。	
SK08	87	53	土器	弥生時代後期		
SK09	87	58	瓦	不明		
SK11	87	54	土器	弥生時代後期	堀山層を掘り抜き、砂層まで達する。	
SK02	87	56	土器	古墳～中世?	堀山層を掘り抜き、砂層まで達する。	
SK03	89	64	土器	弥生時代後期・中世	堀山層を掘り抜き、砂層まで達する。	
SK01	63～87	68～63	土器・漆器	弥生時代後期・中世	第28図128・129。横線を受ける。	
SK02	68～79	66～63	土器・漆器	弥生時代中期・中世	SK03に隣接。	
SK04	68～68	72～73	瓦	不明		
SK01	86	51	土器	弥生時代中期後半・中世		
E-1	SP91	166	147	瓦	不明	
	SP92	165	148	瓦	不明	

表1. 検出遺構一覧④

地区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時期	備考
		X	Y			
E-1	SP03	103	148	土	不明	
	SP04	101	147	土	不明	
	SP05	102	147	土	不明	
	SP06	147	147	土	不明	
	SP07	141	148	土	不明	
	SP08	169	148	土	不明	
	SP09	106	149	土	不明	
	SP10	163	148	土	不明	
	SP11	157	148	土	不明	
	SP12	129	149	土	不明	
	SP13	128	148	土	不明	
	SP14	127	149	土	不明	
	SP15	120	148	土	不明	
	SP16	177	146	土	不明	
	SP17	181	146	土	不明	SP18・19とセット?
	SP18	183	146	土	不明	SP17・19とセット?
	SP19	181	147	土	不明	SP17・18とセット?
	SP20	196	146	土	不明	
	SP21	194	146	土	不明	
	SP22	187	147	土	不明	
	SP24	187	147	土	不明	
	SP25	224	145	土	不明	
	SP26	226	144	土	不明	
	SK01	179	146	土器	弥生時代前期	井戸もしくは柱穴、土器を収納する。
	SK02	186	148	土器	古墳時代前期	
SK03	196	146	土	不明	SK06の一部の可能性あり。	
SK01	102~170	147~148	土器	古墳時代前期		
SK02	108~102	148~148	土器	弥生時代前期		
SK03	151~152	147~146	土	不明		
SK04	147	147	土	不明		
SK05	90~100	150~102	土器	弥生時代後期後半		
SK06	182~184	145~147	土器	弥生時代後期後半		
SK07	182~182	146~147	土器	弥生時代後期～古墳時代前期		
SK08	191~192	146~145	土器	弥生時代中期後半	SK07に隣接。	
SK09	198~198	146~147	土器	弥生時代中期後半	SK03に隣接。	
SK10	147~215	144~144	土	不明		
SK11	129~121	148~156	土器	弥生時代前期		
SK02	156	147	土器	古代～中世		
SK03	127	148	土器	古代～中世		
SK04	157	147	土器	古代～中世		
E-2	SK01	131	130	土器	弥生時代中期後半～後期後半	
	SK02	130	130	土器	弥生時代中期後半～後期後半	
	SK01	130	148	土器	古墳時代前期	
	SK02	130	140	土器	弥生時代中期後半～古墳時代前期	
	SK03	130	127	土器	弥生時代中期後半～古墳時代前期	
SK01	131	129	土	不明		
E-3	SK01	201	107	土器	古墳時代前期	穴間で木組みをみ、土器を置く。溝状遺構の可能性あり。

表1. 検出遺構一覧⑤

地 区	遺構番号	グリッド		出土遺物	時 期	備 考
		X	Y			
E-3	S001	220~227	105~110	土器	近世	E-4区にまたがる。
	S002	220~226	106~111	無	不明	S001に隣接。
	S003	220~222	106~100	無	不明	
	S004	216~222	105~111	無	不明	
	S005	219~220	111~107	無	不明	S002・03・04に切られる。
	S006	201~215	111~111	土器・瓦葺部	弥生時代後期～古墳時代前期・古代	なだらかに字に囲まれる。瓦葺?
	S007	204~212	109~111	土器	古墳時代前期	S006に知られる。
	S008	191~195	111~106	土器	弥生時代前期	
	S010	196~200	108~111	土器	弥生時代中期～古墳時代前期	S011に知られる。
	S011	181~182	111~107	土器	古墳時代前期	S010を切る。
	S012	172~179	107~109	土器	古墳時代前期	瓦葺?
	S013	171~179	108~111	土器	古墳時代前期	S012とセット?
E-4	S01	233	141	無	不明	
	S01	237	134	土器	弥生時代後期後半	S001に隣接。
	S02	234	119	土器	弥生時代中期後半	S001に隣接。
	S01	232~242	134~143	土器	弥生時代中期後半～古墳時代前期	
	S02	232~231	123~129	土器	弥生時代中期後半	
S05	231~236	85~86	無	不明		

※ “時期” 項目は出土遺物の時期について記載している。

2. 出土遺物

今回出土した遺物は、縄文時代、弥生時代中期から後期、古墳時代前期、中世から近世と幅広いが、弥生時代後期から古墳時代前期が主体である。包含層より出土した遺物もあるが、耕作土より浅いため大半が小片になっている。その為、今回図示した遺物は遺構より出土した土器群を主体としている。

C-1 区

・土器溜まり出土土器（第23図1～6）

C-1区中央部付近で検出した土器溜まりである。後世の耕作などにより損壊を受けた状態で出土した。1は受口状の口縁で、口縁部に刻目文を施す甕である。2・4は口縁に面を持つ甕である。3は口縁に面を持ち、擬凹線文を施す鉢である。5・6は高坏脚部である。

・SD06出土土器（第23図7・8）

7・8は頸部から口縁部にかけて直立する壺である。口縁端部に刻目文を施し、波状口縁を呈する。全面ハケメ調整だが、8の頸部はハケメ調整の後、ミガキ調整を行っている。

・SD07①出土土器（第24図9～17）

9は口縁部を肥厚させ、擬凹線文を施す壺である。10は面を持つ器台口縁部に擬凹線文を施す。外面全体に赤彩を施す。11は口縁部を受口状にして刻目文を施す甕である。12から15は付加状口縁である。16は高坏坏部で口縁端部及び屈曲部に漆を塗布し、口縁内面には赤彩を施す。17は壺の胴部である。

・SD07②出土土器（第24図18～24・第25図25）

18は付加状口縁の壺である。19は口縁部が外反する甕口縁部である。20から24は壺口縁部である。20は面を持つ口縁部で、21は付加状口縁部、22から24は直立する口縁部である。25は口縁部が外反する器台である。外面は細かなミガキ調整を行っている。

・SX03出土土器（第25図26）

遺構上面から出土した小型甕である。

・包含層出土土器（第25図27・28）

27は口縁部に刺突文を施す。28は頸部から胴部上半にかけて刻目文及び直線文を施す。

C-2 区

・土器溜まり出土土器（第25図30・31）

南側の遺構検出時に多量に検出した土器群である。耕作等による削平で全て細かい破片であった。30は小型壺の胴部である。31は高坏脚部である。

・SD02出土土器（第25図32）

口縁に段を持つ壺である。

・SD03 出土土器 (第 25 図 34)

口縁に面を持つ壺である。外面はミガキ調整、内面はケズリ調整を行っている。

・SD05 出土土器 (第 25 図 33)

小型の無頸台付鉢である。脚裾部に刻目文を施す。

・SD08 出土土器 (第 25 図 29、第 26 図 35～43、第 27 図 44～48)

29 は口縁端部に刻目文を施し、小波状口縁を呈す甕である。頸部は縦方向のハケメ調整、胴部は横方向のハケメ調整を行う。35 は口縁端部から口縁内面にかけて刻目文を施す甕である。36 は口縁部径が胴部径に比べて極端に細い壺である。37 は外面にハケメ調整を行う壺の胴部である。外面全体に赤彩あり。38 はやや内側に屈曲する口縁部に擬凹線文を施す甕である。肩部に刻目文を施す。頸部と口縁部の接合帯が確認できる。39 は口縁端部に櫛による刻目文を施す。40 は口縁部に刺突文を施す壺で口縁内面には羽状文を施す。41 は口縁に面を持つ甕である。42 は付加状口縁部に 2 連の円形浮文を貼り付ける壺である。43 は全面ハケメ調整のやや小型の甕である。44 は器台、45 は高坏の坏部で、44 は粘土帯を貼り付けて稜をつくりだしている。46・47 は高坏の脚部で、それぞれ透孔を施している。48 は壺の底部で、穿孔している。

・SK01 出土土器 (第 27 図 49～55、第 28 図 56～64)

49 から 58 は SK01 の東側肩部より出土した土器群である。49 は三角形の刺突文を連続で刺突し、櫛描文を施す土器片である。49 から 62 までの土器群は弥生時代中期後半と考えられる。51・55 は口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。調整はハケメ調整である。58 は長頸壺で、口縁端部に刻目文を、頸部には列点文を施す。内外面とも赤彩を施す。59 から 64 は SK01 内部より出土した土器群である。59 は SK01 の埋土からの出土で、口縁端部に格子文を、口縁内面には羽状文を施す。60 から 62 は SK01 の床面より出土した土器である。60 は外反する口縁端部に刻目文を施す。61 はやや口縁端部を内湾させる甕である。62 は口縁内面に羽状文を施す。頸部から胴部にかけてはハケメ調整で、広範囲に炭化物が付着している。63 は口縁部にのみ赤彩を行う。64 は鉢で、口縁部に穿孔を行う。

・SK05 出土土器 (第 28 図 65、第 29 図 66～70)

65 は頸部に櫛描文を施す土器である。胎土に海綿骨針を多量に含むなど他の土器とは若干異なる。66 は口縁端部に刻目文を施し、口縁内面に羽状文及び斜行短線文を施す壺である。67 はやや内湾した口縁部に羽状文を施す。68 は口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。外面頸部は縦方向のハケメ調整、胴部は横方向のハケメ調整である。69 は 68 とほぼ同様の土器である。68 と比べるとハケメ調整痕が明瞭に残っている。70 は口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。頸部は縦方向のハケメ調整である。肩部にかけて、細い数条の櫛描文を施し、その間を連続刺突文で埋めている。土器はかなり歪んだ形をしている。

・SP04 (第 30 図 71)

土師器の高坏である。

D-1 区

・土器溜まり出土土器 (第 30 図 72 ~ 81, 第 31 図 82 ~ 89)

72 は胴部が膨らむ壺である。73 は口縁端部に面を持つ壺で、内外面はハケメ調整である。74 は甕である。外面はハケメ調整、内面はケズリを行う。75 は口縁に面を持つ小型甕である。口縁端部には刺突文を、頸部から胴部上部にかけて櫛描文を施す。76 は小型壺である。77 は面を持つ壺口縁で、2 連の円形浮文を貼り付ける。78 は増胴部か。79 は小型甕とみられるが、底部に剥離痕がみられる。80 は長頸壺で、口縁部に凹線を施す。頸部から胴部にかけてはハケメ調整を行う。内面は胴部周辺に指頭圧痕がみられる。81 は長頸壺である。胴部下半分はかなり器壁が薄い。82 は口縁に面を持つ長細頸壺である。口縁端部に擬凹線文を施し、その上に円形浮文を貼り付けている。83 は半縁口縁の短頸壺である。口縁端部に刻目文を施している。口縁部下から頸部にかけては、稜線が確認できる程にしっかりとナデ調整が行われている。85 は頸部から口縁部が直立する壺である。口縁部はナデ調整を行い、頸部は縦方向のハケメ調整である。頸部には「W」字状の記号文が施されている。84・86 から 88 は高坏の脚部である。88 には透孔が施されている。89 は高坏である。保存状態が悪いため、調整などは明瞭ではない。

・SD14・15 出土土器 (第 31 図 90)

SD14・15 が交差する箇所から出土した非ロクロ整形の土師器皿である。

・SX01 出土土器 (第 31 図 91)

弥生時代中期後半の高坏脚部である。櫛描文を施す。外面はケズリ調整で、内面はハケメ調整である。

・包含層出土土器 (第 32 図 92 ~ 107)

92 は非ロクロ整形の土師器皿である。93 は口縁部及び口縁端部に刺突文を施す壺口縁部である。94 は口縁に面を持ち、2 連の円形浮文を貼り付ける壺口縁部で、口縁内面にはスタンプ文を施す。95・96 は高坏の坏部で、95 は口縁に面を持つ甕で、口縁には擬凹線文を、屈曲部に刻目文を施す。97 から 100 は甕である。97 は口縁に面を持ち、口縁端部を内湾させる甕である。口縁には擬凹線文を、口縁内面には刺突文を施す。胴部外面はハケメ調整で、内面は斜め方向のケズリ調整である。98 は頸部が「く」の字状に屈曲する甕である。101・102 は頸部から口縁部が直立する壺である。101 は口縁端部に刻目文を施すが、102 は口縁部より若干下の部分で刻目文を施す。103 はつまみのある有紐蓋である。104 は台付鉢である。105・106 は高坏脚部である。107 は甕底部で、全面ハケメ調整、底部に穿孔を行っている。

・谷部出土土器 (第 33 図 108 ~ 121, 第 34 図 122 ~ 127)

108 は口縁に面を持つ壺で、口縁部に擬凹線文を巡らす。109 は壺で、108 と同じく付加口縁部に擬凹線文を巡らす。胴部内外面はミガキ調整だが、口縁部付近はハケメ調整である。110 はやや口縁部が広がる小形の甕とみられる。111 は口縁に面を持ち擬凹線文を施す。112 は甕である。胴部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整である。113 は口縁に面を持つ壺で、口縁部に擬凹線文を施す。114 から 116 は面を持つ口縁部に擬凹線文を施す甕である。116 は胴部径に対

し口縁径が大きい。117は口縁部が外反する甕である。118は口縁部が大きく広がる壺の口縁部とみられる。外面は縦方向のハケメ調整で、内面は横方向のハケメ調整の後、縦方向にケズリ調整を行っている。119は丁寧なハケメ調整を行っている台付鉢である。120は器台脚部、121は高坏脚部である。122・123はいわゆる布留系の甕とみられる。器壁がケズリ調整により5mm弱とかなり薄く成形されている。124は高坏の坏部である。125・126は壺の底部である。125は底部を凹ませている。127は口縁端部に面を持つ甕である。

D-2 区

・SD01 出土土器 (第34図 128・129)

128は口縁に面を持つ甕である。胴部には横方向にほぼ直線的にハケメ調整が行われている。129は把手付の坏である。

・SD02 出土土器 (第34図 130～132)

130・131は口縁部が広がる甕である。130は口縁端部に刻目文を施すことにより波状口縁を呈する。131は口縁端部に刻目文を施す。132は珠洲焼の摺鉢底部である。

・SK02 出土土器 (第35図 134)

口縁部に擬凹線文を施し、赤彩を行う。肩部に把手を付ける。外面は縦方向のハケメ調整で、内面はケズリ調整や指頭圧痕がみられる。

・SK04 出土土器 (第35図 133・135)

133は面を持つ口縁部に、擬凹線文を施す甕である。135は高坏の坏部で、屈曲部には接合痕が確認される。

・SK06 出土土器 (第35図 136)

全面にハケメ調整を行う壺である。

・SK07 出土土器 (第35図 137)

同一個体とみられる珠洲焼大甕である。

・SK08 出土土器 (第36図 138～140)

いずれも口縁部に擬凹線文を施す甕である。

・SK11 出土土器 (第36図 141・142)

141は口縁部に擬凹線文を施す甕で、142は胴部が筒形の甕である。

・SP43 出土土器 (第36図 143)

口縁に面を持つ甕である。

・SP58 出土土器 (第36図 144～146)

144は口縁部が外反する甕である。145は台付鉢の脚部、146は頸部と胴部の境界に粘土帯を貼り付け、その上に刻目文を施す。器壁は約4cm弱とかなり厚く、大型の壺と考えられる。

・SX01 出土土器 (第36図 147・148, 第37図 149～153)

147は大きく外反する口縁端部に刻目文を、口縁内面に羽状文を施す甕である。頸部には隆帯

を巡らし、その上に格子状刻目文を施す。外面全体に赤彩を施すが、内面は口縁部のみ赤彩を施す。148は口縁に面を持つ甕で、頸部から肩部にかけて炭化物が付着している。149は非ロクロ整形の土師器皿である。150・151は面を持つ口縁の甕であり、151は口縁に面を持ちに擬凹線文を施す。152は高坏坏部である。全体的に丁寧なミガキ調整を行っている。153は外反する口縁端部に刻目文を施す甕である。胴部外面中央部及び底部内面周辺に炭化物が付着している。

・包含層出土土器（第38図154～156）

154は胴部がやや張りを持ち、頸部から口縁部にかけて直立する甕である。口縁端部に稜を持つ。155は口縁部が強く外反する高坏坏部である。外面は保存状態が悪く明瞭ではないが、内面は横方向を基本としたハケメ調整が確認できる。156は透孔がある器台脚部で、外面はハケメ調整だが、内面はケズリ調整も行っている。

E-1区

・SD01出土土器（第38図157～159）

157・158は甕で、157は口縁に面を持ち、158は口縁端部を屈曲させている。159は頸部から口縁部が直立する甕である。保存状態が悪く、調整などは明瞭ではない。

・SD02出土土器（第39図160～180、第40図181）

160から162、164・166・169は甕である。162・164・166は面を持つ口縁に擬凹線文を施す。163・165・167・168は壺口縁部である。163は面を持つ口縁に擬凹線文と棒状浮文を貼り付ける。167は面を持つ口縁に擬凹線文を施す。170・171は高坏坏部で、171は口縁に面を持ち、外面横方向のミガキ調整を行う。172は長細頸壺の口縁部で、外面はミガキ調整、内面はハケメ調整を行う。173は閉脚高坏の坏部とみられる。174は鉢で、特に施文はなくミガキ調整を行っている。176は壺の胴部で、把手が付いていたものとみられる。175・177はそれぞれ有紐蓋とみられる。178は高坏の脚部、179は有紐蓋、180は台付鉢の脚部である。181は古代の須恵器壺口縁部である。上層からの混入と考えられる。

・SD05出土土器（第40図182～184）

182は有段口縁の甕もしくは壺で、口縁下端に刻目文を施す。184は有段口縁の壺で、擬凹線文を施す。内面には丁寧にハケメ調整を行っている。183は蓋か。

・SD08出土土器（第40図185）

口縁端部から内面にかけて刻目文を施し、波状口縁を呈する甕である。内外面ハケメ調整であるが、内面はハケメ調整の後、ナデ調整を行っている。

・SD09出土土器（第40図186・187）

186は甕または壺の、187は小型の壺底部である。

・SD11出土土器（第40図188）

高坏の脚部である。脚裾端部に面を持ち2連の円形浮文を貼り付ける。

・SK02 出土土器 (第40図189～192)

それぞれ甕になるかとみられる。189・192は「く」の字状に屈曲する甕で、190・191は口縁に面を持ち、擬凹線文を施す。192は口縁部を上に向けた状態で出土した。頸部から胴部の中程と、内面の底部周辺に炭化物が付着している。

・包含層出土土器 (第41図193～206, 第42図207～227)

193・196・197・200・201・202・206・212は甕である。197と212は「く」の字状に屈曲する甕で、197は口縁端部から内面にかけて刻目文を施し、波状口縁を呈す。193・196・200・206は口縁に面を持つ甕で、193・201・202・206は口縁部に擬凹線文を施す。203・205、207から211、214は壺である。203は口縁部に擬凹線文を巡らし、口縁端部及び内面に刺突文を施す。209はやや内湾する口縁部に擬凹線文を、その下に刻目文を施す。211は口縁部に擬凹線文を施す。205は口縁にやや厚めの面を成形している。213は把手付の坏である。215は埴とみられる。216は鉢で、口縁部に2連の穿孔を行う。204・217は鉢とみられる。内外面ともハケメ調整。218は埴の胴部である。内面ケズリ調整である。219から221は高坏坏部である。222は穿孔を行う甕の底部である。223から227は高坏脚部である。223は透孔がある。

E-2 区

・SD01 出土土器 (第43図228)

228は口縁部が直立する甕で、口縁端部に面を持つ。

・SD02 出土土器 (第43図229～235)

229は口縁部が大きく外反する甕である。口縁内面には格子状の刻目文を施す。230は甕で口縁内面には羽状文を施す。頸部から胴部にかけては内外面ともハケメ調整である。231は230と同様の施文及び調整である。232は甕である。233は口縁端部がやや内湾する甕である。234は口縁に面を持ち、2連の穿孔を行う台付鉢である。235は高坏の坏部である。

・SD03 出土土器 (第43図236～238)

236は甕で、口縁部は無文、胴部内外面はハケメ調整である。237は高坏脚部である。脚裾上部に沈線文及び刺突文を施し、透孔を施す。238は鉢とみられ、外面はミガキ調整である。

・SK01 出土土器 (第43図239)

大きく外反する口縁の甕である。口縁内面に羽状文を施す。

・SK02 出土土器 (第44図240)

内外面ともハケメ調整の甕である。

・SPO3 出土土器 (第44図241・242)

241は口縁頂部に面取りを行っている甕である。242は口縁に面を持つ甕である。厚さ5mm弱と薄い。口縁部は無文である。

・包含層出土土器 (第44図243～256)

243・247・249・251は甕である。243・247・249は口縁に面を持つ甕で、247・249は擬凹線

文を施す。251は「く」の字状に屈曲する甕である。244・248・250は口縁に面を持つ壺である。250は口縁に刻目文を施している。245は台付鉢の脚部である。246は甕もしくは壺の底部で、底部周辺まで丁寧なハケメ調整を行っている。252は有紐蓋である。253は高坏である。坏部から脚部にかけて、丁寧なミガキ調整を行っている。254は高坏脚部で、透孔を施す。255・256はそれぞれ高坏の脚部である。

E-3 区

・SD06 出土土器 (第45図257・258)

いずれも須恵器で257は壺口縁部で、口縁端部をやや肥厚させている。258は坏とみられる。

・SD07 出土土器 (第45図261・262)

261は口縁部がやや大きく外反する甕である。頸部はやや肥厚させている。262は鉢で、外面はミガキ調整、内面はハケメ調整の後、ミガキ調整を行っている。

・SD10 出土土器 (第45図259・260・263)

259は口縁部を外反させる甕である。260は口縁部に羽状文を施し、頸部から口縁部にかけて直立する壺である。口縁端部は内湾する。外面ハケメ調整である。263は口縁部をやや外反させる甕である。

・SD11 出土土器 (第45図264・265)

264は口縁端部をやや外反させる壺とみられる。外面はハケメ調整である。265は口縁に面を持つ壺とみられる。口縁部には格子状の刻目文を施す。

・SD12 出土土器 (第45図266～269, 272～276)

266は「く」の字状に屈曲させる甕である。267は床面より出土した口縁部が直立する壺である。外面はハケメ調整で、胴部内面は横方向のケズリ調整、底部にかけては指頭圧痕がみられる。268は「く」の字状に屈曲する壺である。269は頸部から口縁部にかけて外反する丸底増で、胴部は横方向にケズリ調整である。272は高坏坏部である。273・275は口縁部が外反する甕である。273は頸部と口縁部に土器接合帯がみられる。274は口縁に面を持つ甕である。276は丸底増で、内外面とも丁寧なミガキ調整を行っている。

・SD13 出土土器 (第45図270)

口縁部がやや外反する壺である。

・SK01 出土土器 (第46図277～279)

277は口縁部を上に向けた状態でSK01床面より出土した胴部の張る壺である。保存状態は良好で、胴部下半から底部にかけて黒斑がみられる。全体的にミガキ調整を行っている。278もやや胴部が張る壺とみられ、外面はハケメ調整である。277・278とも古墳時代前期になるか。279は口縁部がやや外反する壺である。内面は丁寧なハケメ調整である。

・包含層出土土器 (第45図271, 第46図280～286)

271は全面ハケメ調整の小型壺である。280は有段口縁の甕口縁部で、擬凹線文を施す。282

は口縁部がやや肥厚する甕である。283は口縁内面に炭化物が多量に付着している高坏もしくは器台である。281・284は甕口縁部である。281は面を持つ口縁で、口縁端部を内湾させ擬凹線文を施す。284は「く」の字状に屈曲する甕で、口縁内面には粗紋とみられる圧痕が確認できた。285は高坏脚部で286は胴部を強く屈曲させ透孔を施す高坏脚部である。

E-4 区

・SD01 出土土器（第47図287～299、第48図300～307、第49図308～312、第50図313～327、第51図328～335）

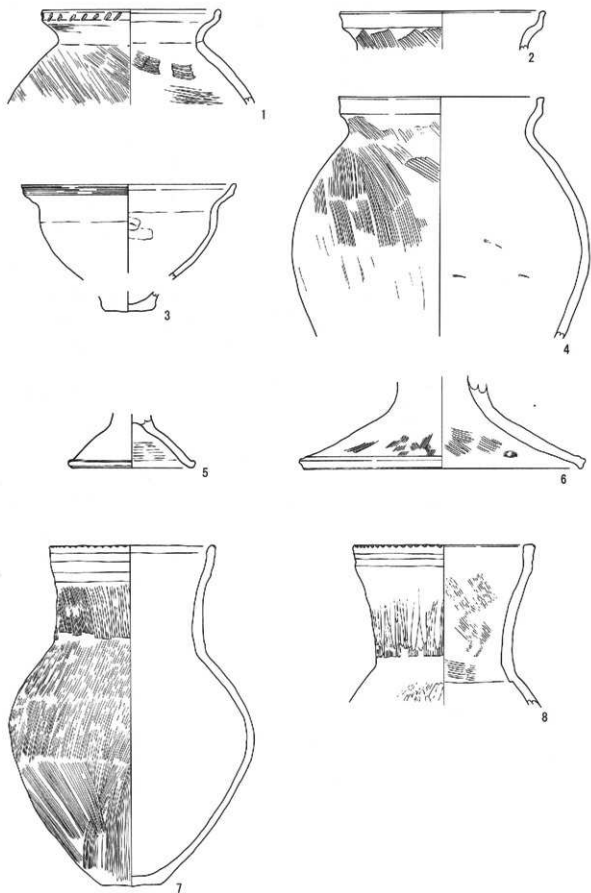
287から300は「く」の字状に屈曲する甕の口縁部である。287は口縁端部を面取りしている。290から292は頸部と口縁部の接合帯が確認できる。300は頸部から口縁部の屈曲が強い。調整は全てハケメ調整である。301から303、305・307も同様に甕である。301から303、305は300と同様、頸部から口縁部の屈曲が強い。303は口縁部を若干屈曲させ、頸部の屈曲部分はその他の土器と比べて内面に大きくせり出している。305は頸部外面から下部分と底部内面周辺に炭化物が多量に付着している。307は口縁部を強く屈曲させる甕である。口縁端部に刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。頸部には櫛描文、その下に2列の刺突文を施す。施文原体は全て同じである。304は口縁部を外反させる甕である。頸部はハケメ調整であるが、胴部はケズリ調整である。306は304と同様、甕の口縁部であるが、口縁端部をやや外反させている。308及び309は大型壺の口縁部である。308は口縁部を直立させる甕である。胴部と口縁部には接合帯が確認できる。309は頸部から口縁部をやや外反させる甕である。310から312は大型壺の底部とみられる。310は底部に穿孔を行っており、312は底部を凹ませている。310及び311はハケメとケズリ調整だが、312はケズリ調整のみである。それぞれ、器壁も厚く、しっかりとした作りをしている。313から327は高坏の坏部及び脚部である。全て、同時期の一括資料と考えられる。328はやや成形の荒い小型甕である。調整はハケメ調整であるが、丁寧な調整ではない。329は丸底埴の完形品で丁寧なミガキ調整を行っている。330は小型壺の胴部である。331は壺の口縁部であり、頸部に向かってやや広がっている。332は有紐蓋である。333は小形器台の脚部である。334は鉢である。335は長頸台付甕で、赤彩などは確認できなかった。

・SD02 出土土器（第51図336・337）

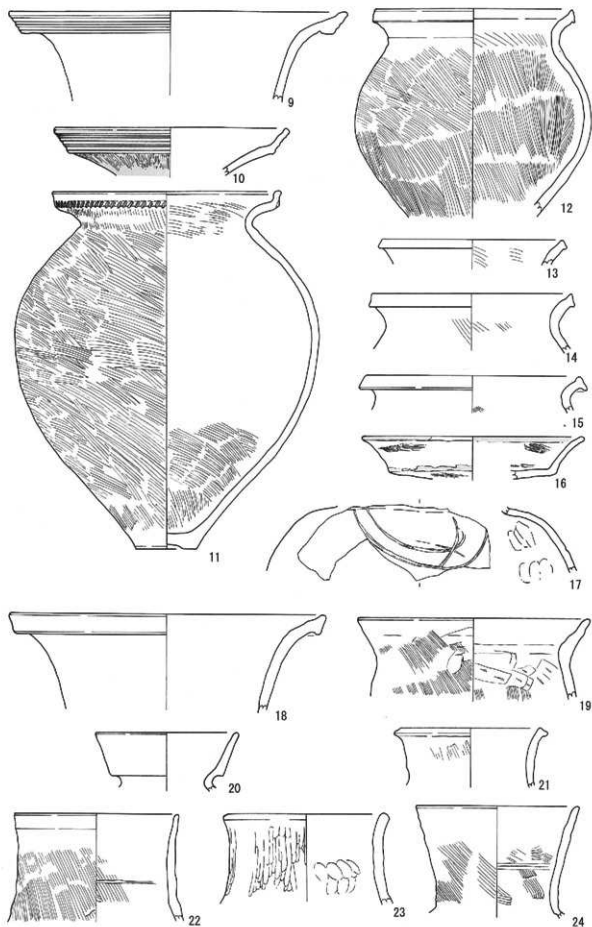
床面より出土した土器である。同一個体と思われるが、接合はできなかった。口縁部をやや外反させる甕で、口縁端部には刻目文を、口縁内面には羽状文を施す。胴部はハケメ調整であるが、底部周辺になるとミガキ調整となる。

・SK02 出土土器（第51図338）

胴部にあまり膨らみを持たずに、頸部から屈曲するタイプの甕とみられる。全面ハケメ調整である。

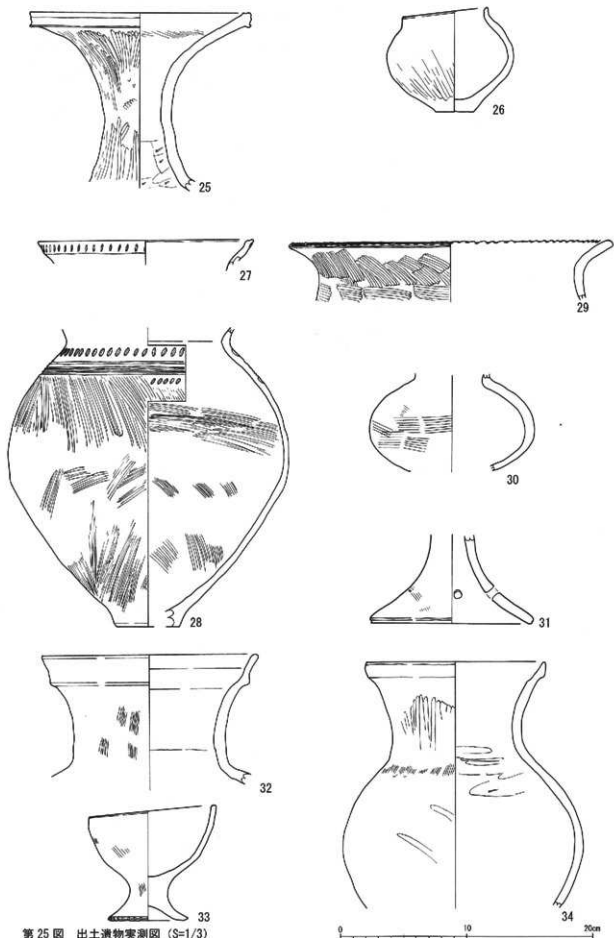


第23図 出土遺物実測図 (S=1/3)
 [C-1区] 土器酒まり (1~6)・SD06 (7・8)



第24図 出土遺物実測図 (S=1/3)

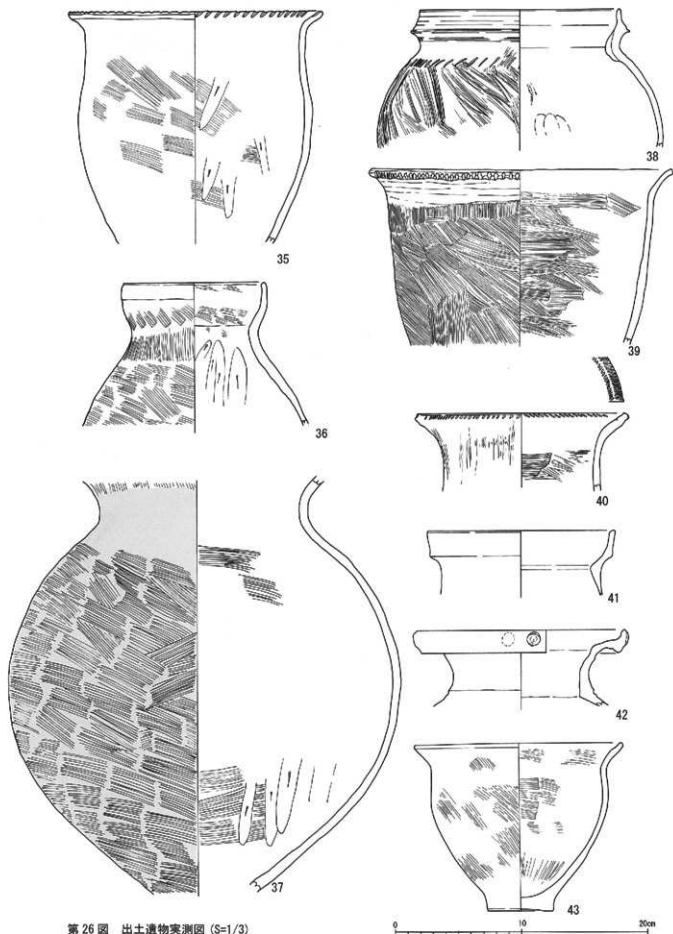
[C-1 区] SD07 ① (9 ~ 17)・SD07 ② (18 ~ 24)



第25図 出土遺物実測図 (S=1/3)

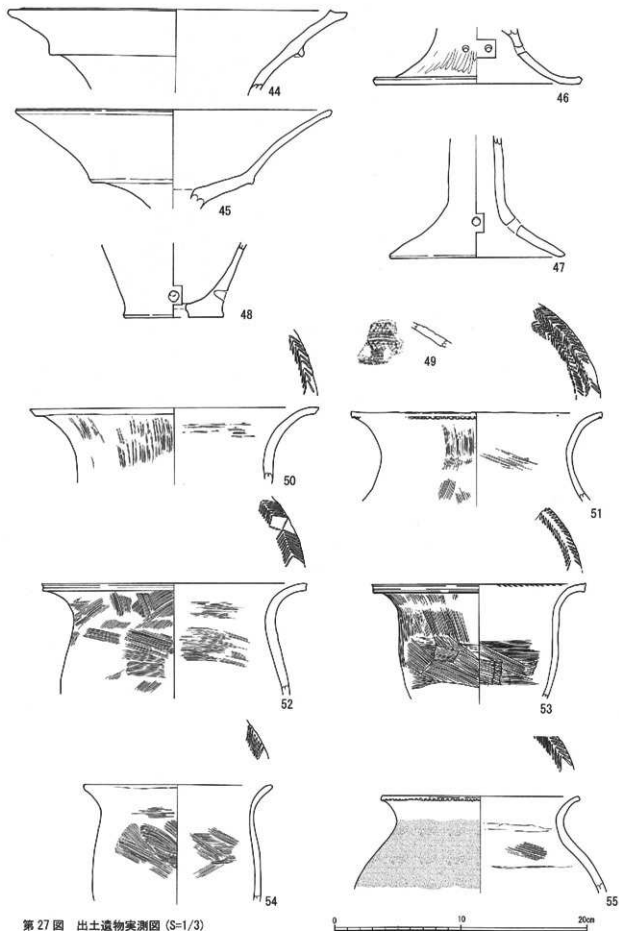
[C-1区] SD07㉔ (25)・SX03 (26)・包含層 (27・28)

[C-2区] 土器溜まり (30・31)・SD02 (32)・SD03 (34)・SD05 (33)・SD08 (29)

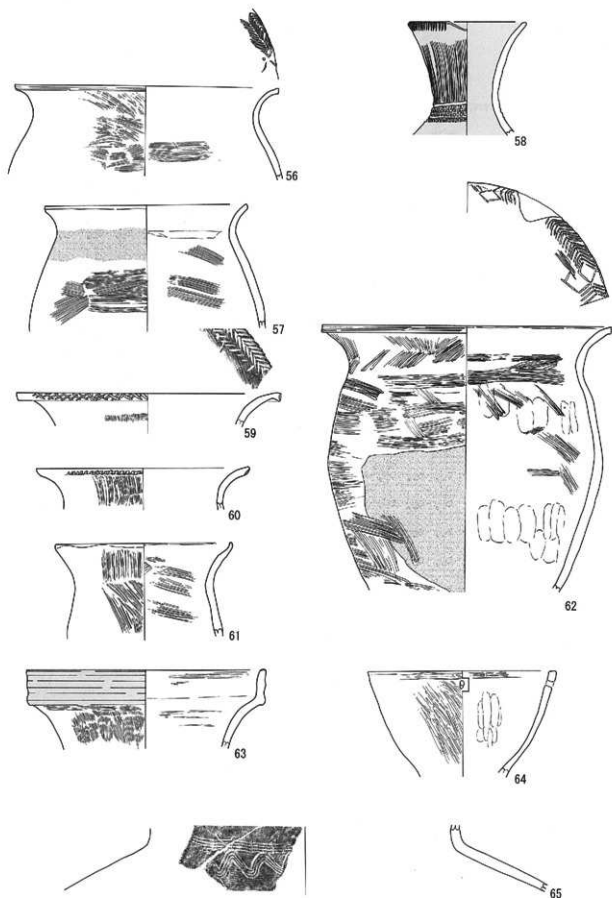


第26図 出土遺物実測図 (S=1/3)

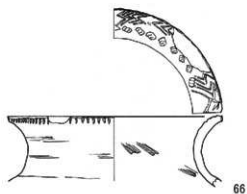
[C-2 区] SD08 (35~43)



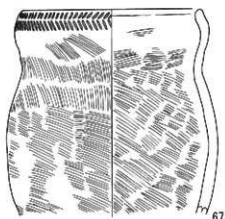
第 27 图 出土遺物実測図 (S=1/3)
 [C-2 区] SD08 (44 ~ 48)・SK01 (49 ~ 55)



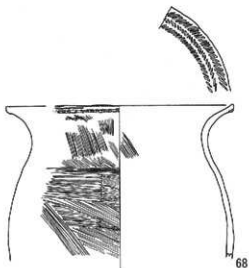
第28図 出土遺物実測図 (S=1/3)
 [C-2区] SK01 (56 ~ 64)・SK05 (65)



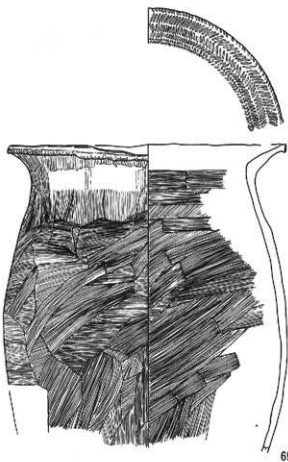
66



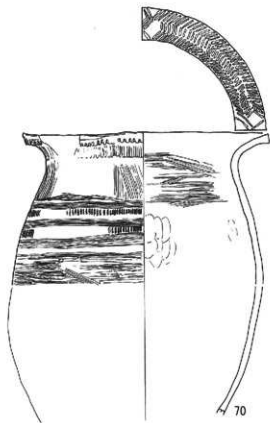
67



68



69

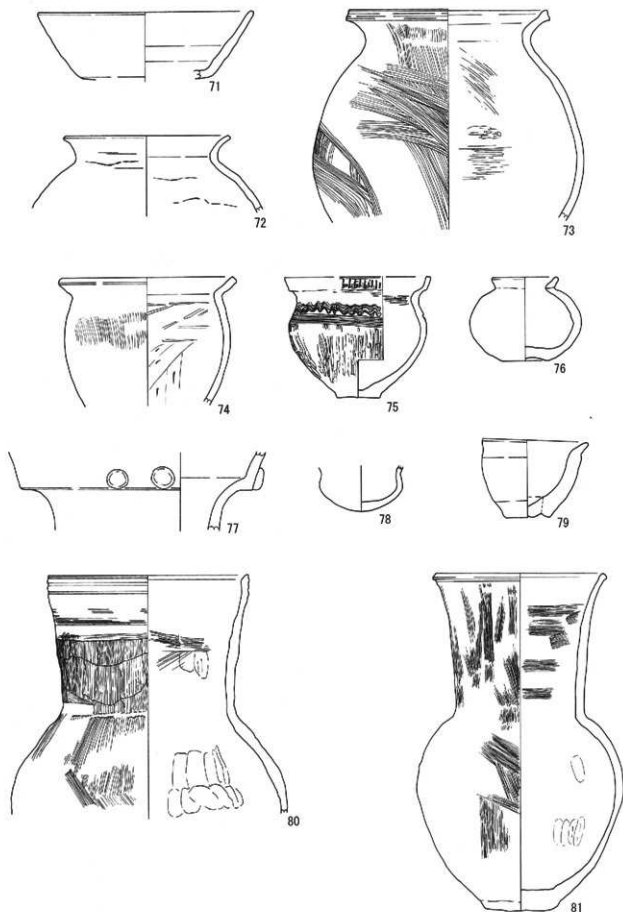


70

第29図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[C-2区] SK05 (66~70)

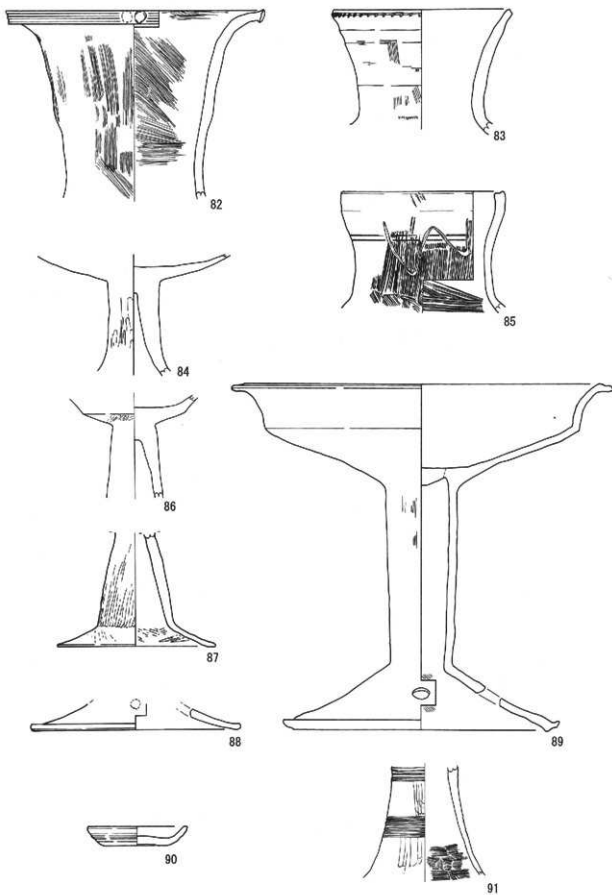




第30図 出土遺物実測図 (S=1/3)

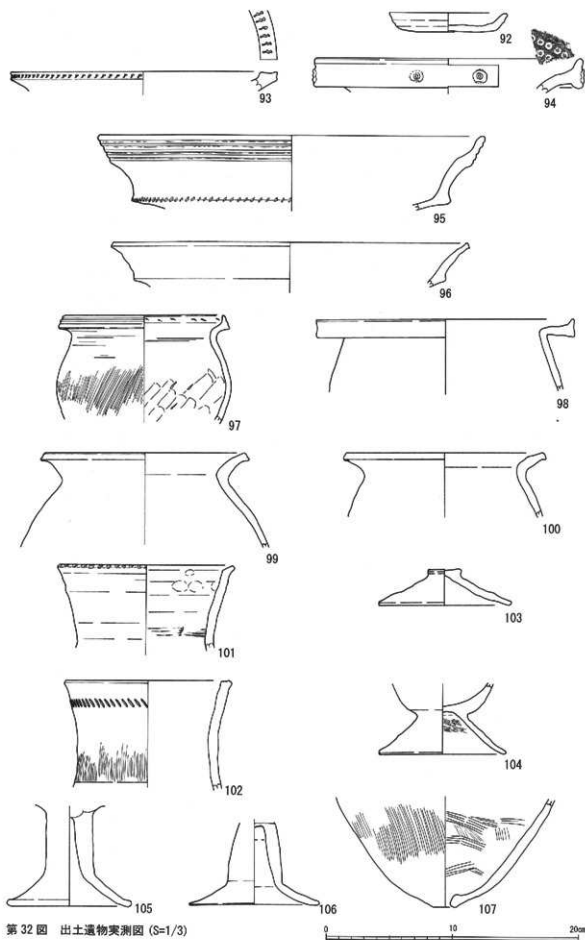
[C-2区] SP04 (71)

[D-1区] 土器溜まり (72~81)



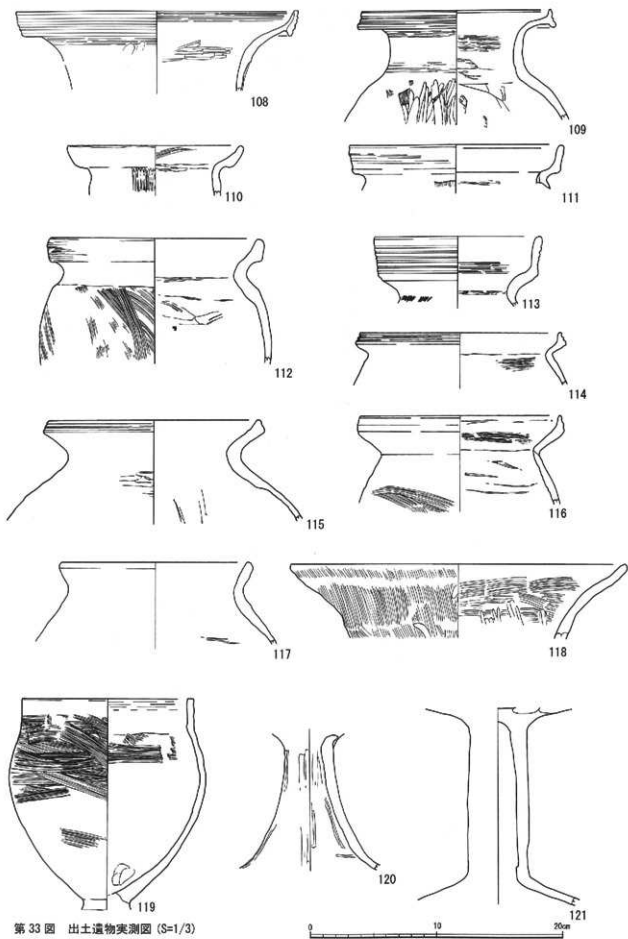
第31图 出土遺物実測図 (S=1/3)

(D-1区) 土器溜まり (82~89)・SD14・15 (90)・SX01 (91)

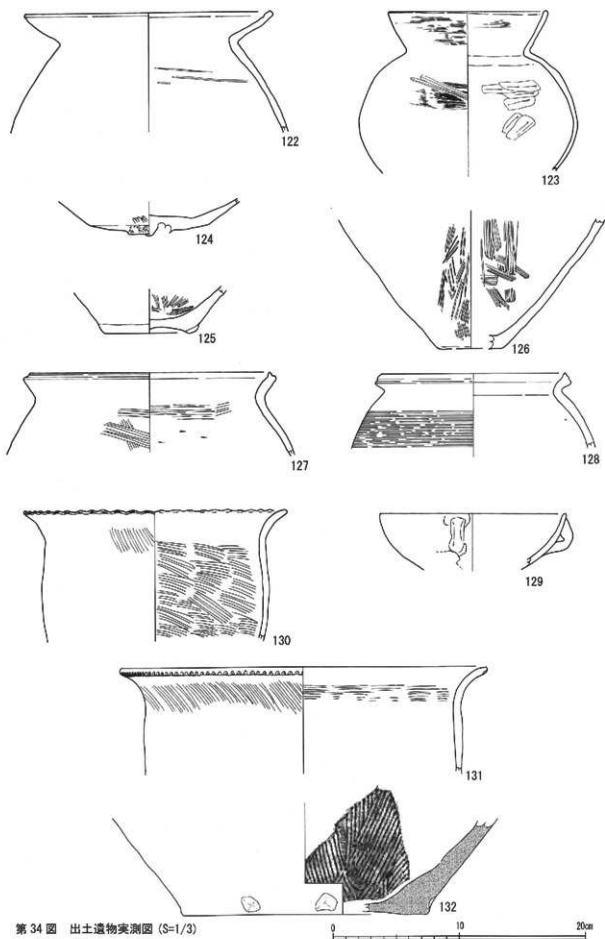


第 32 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[D-1 区] 包含層 (92 ~ 107)



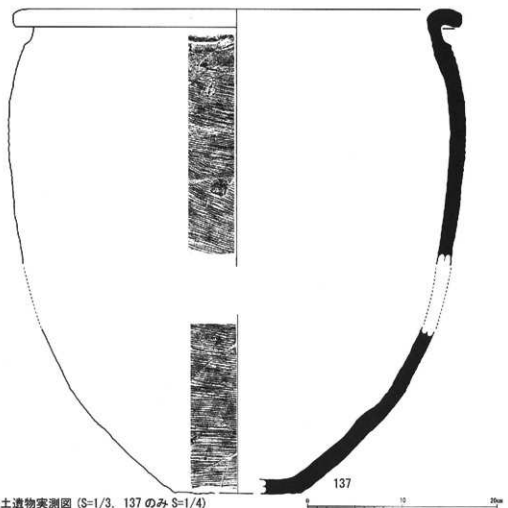
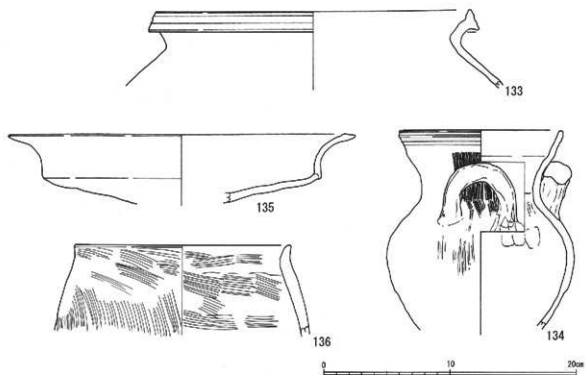
第33图 出土物実測図 (S=1/3)
 (D-1区) 谷 (108~121)



第34图 出土遺物実測図 (S=1/3)

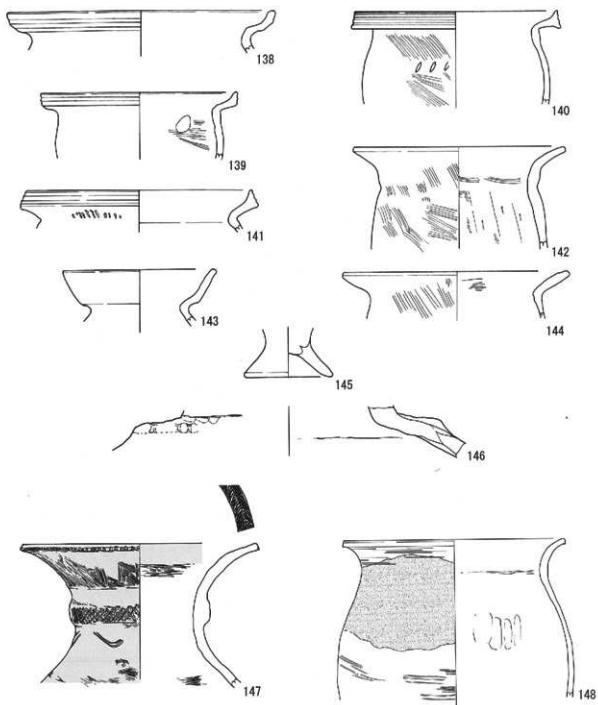
[D-1区] 谷 (122 ~ 127)

[D-2区] SD01 (128・129)・SD02 (130 ~ 132)



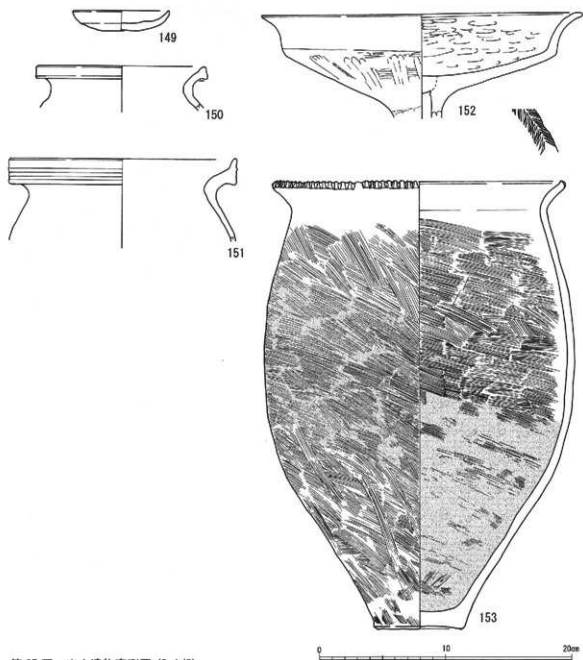
第35図 出土遺物実測図 (S=1/3, 137のみ S=1/4)

[D-2区] SK02 (134)・SK04 (133・135)・SK06 (136)・SK07 (137)



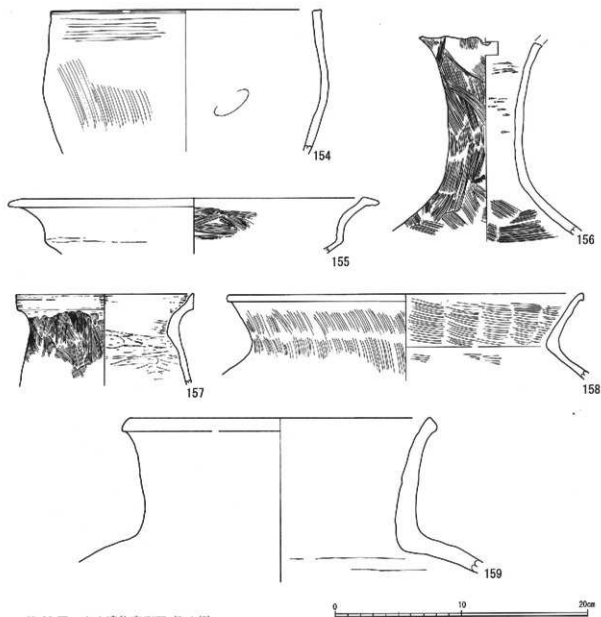
第 36 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

[D-2 区] SK08 (138 ~ 140) ・ SK11 (141 ・ 142) ・ SP43 (143) ・ SP58 (144 ~ 146) ・ SK01 (147 ・ 148)



第 37 図 出土遺物実測図 (S=1/3)

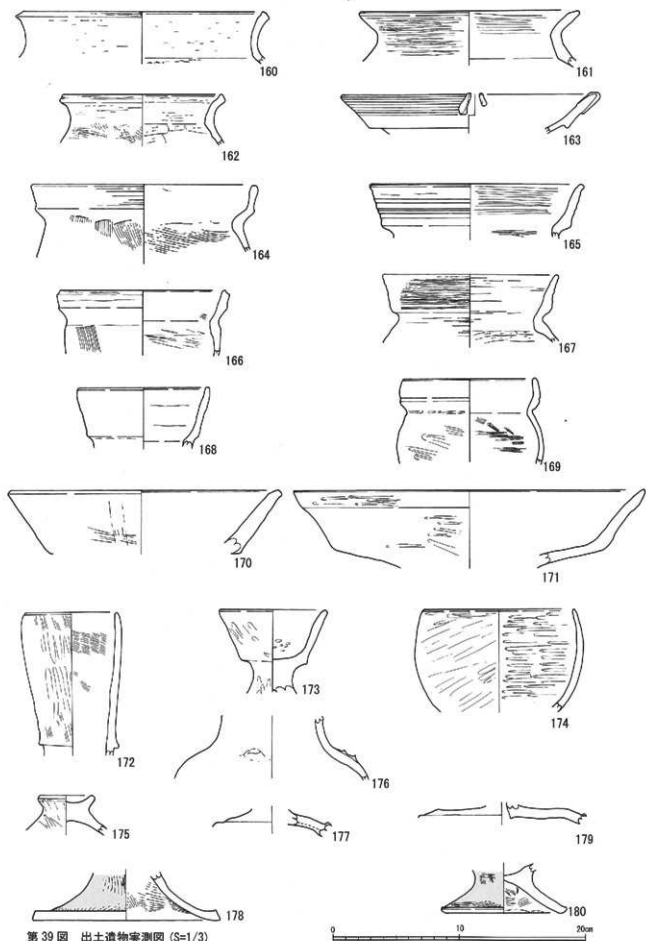
[D-2 区] SX01 (149 ~ 153)



第 38 圖 出土遺物実測圖 (S=1/3)

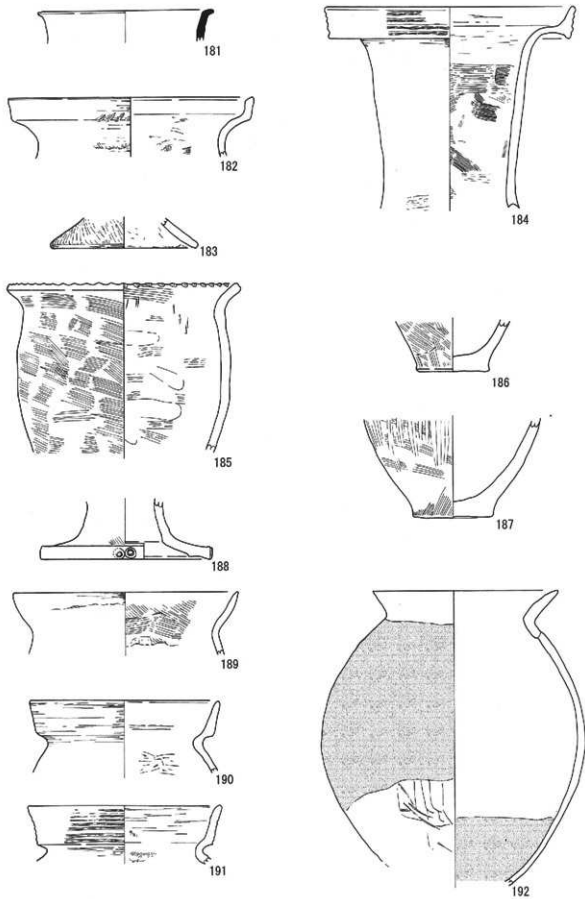
[D-2 区] 包含層 (154 ~ 156)

[E-1 区] SD01 (157 ~ 159)



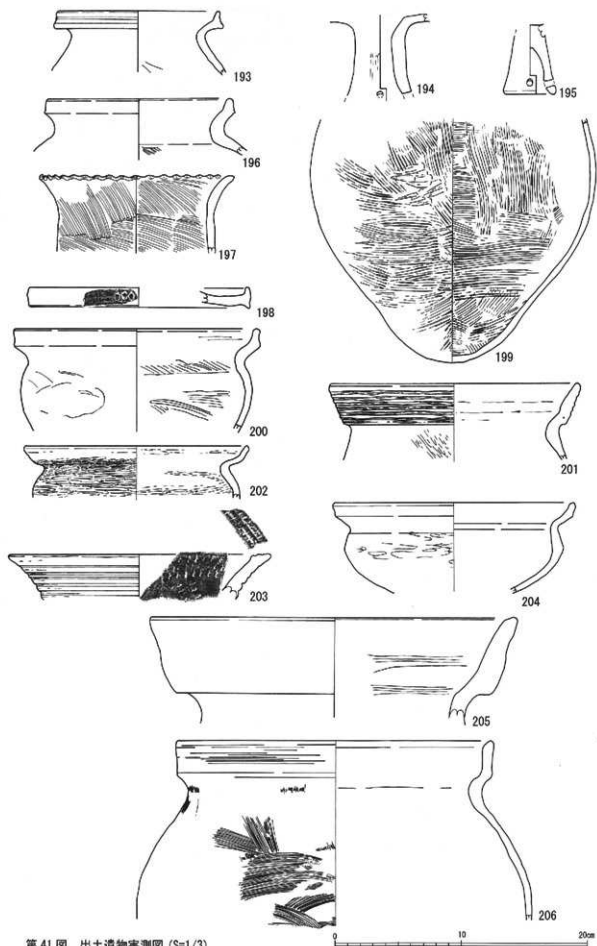
第 39 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-1 区] SD02 (160 ~ 180)

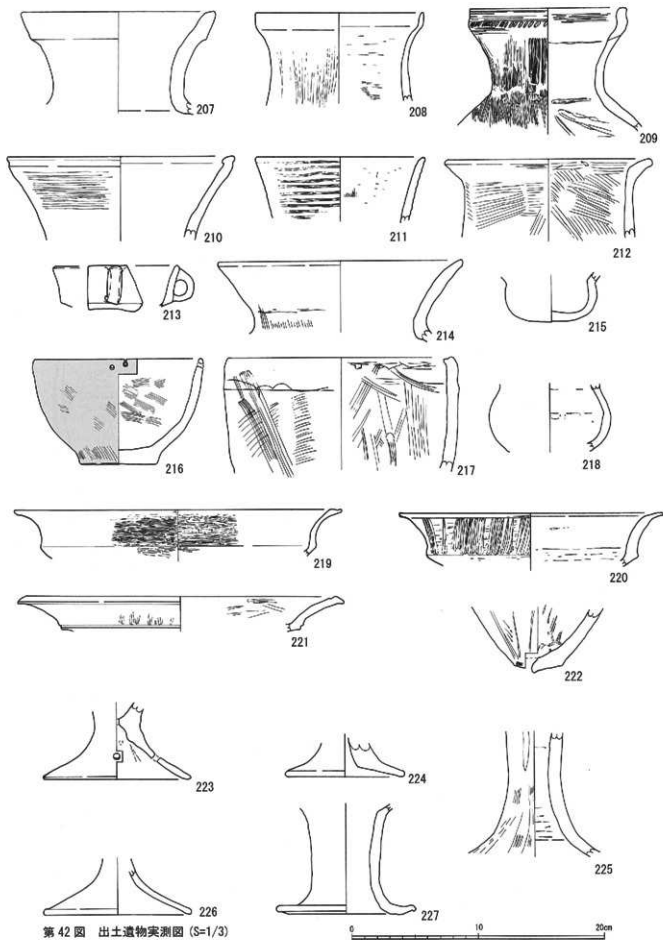


第40図 出土遺物実測図 (S=1/3)

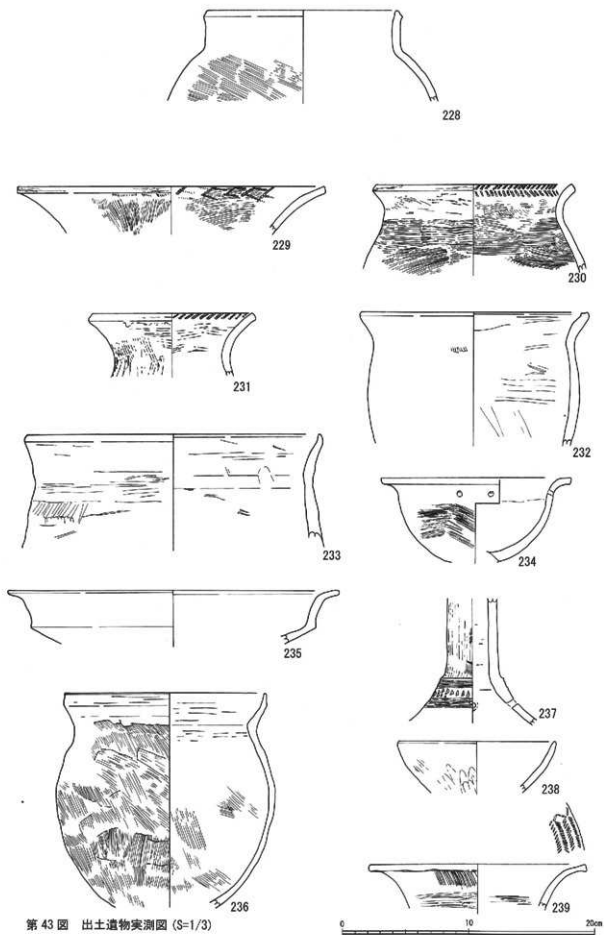
[E-1区] SD02 (181)・SD05 (182~184)・SD08 (185)・SD09 (186・187)・SD11 (188)・SK02 (189~192)



第41图 出土遗物实测图 (S=1/3)
[E-1区] 包含层 (193~206)

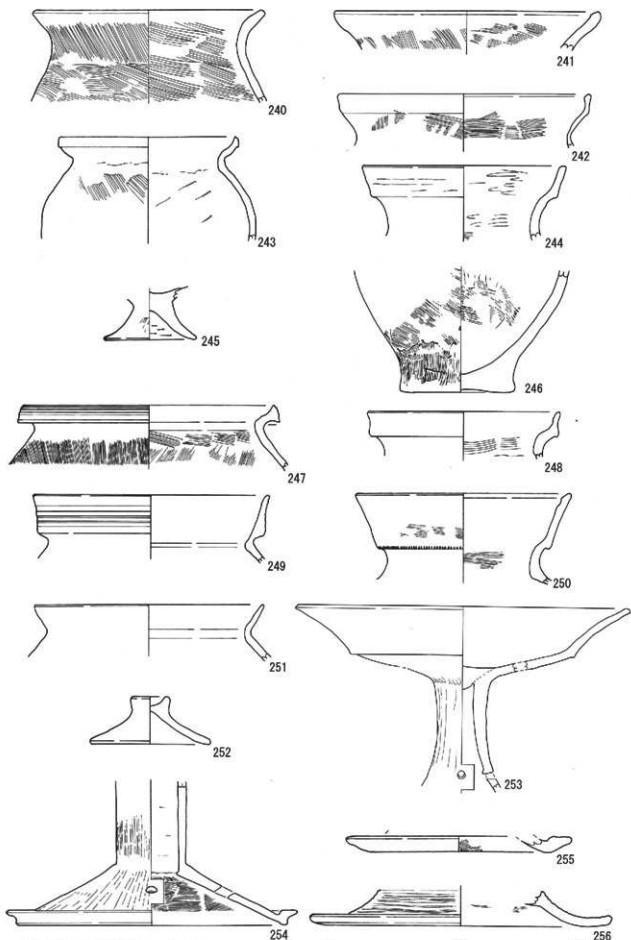


第 42 图 出土遺物実測図 (S=1/3)
[E-1 区] 包含層 (207 ~ 227)



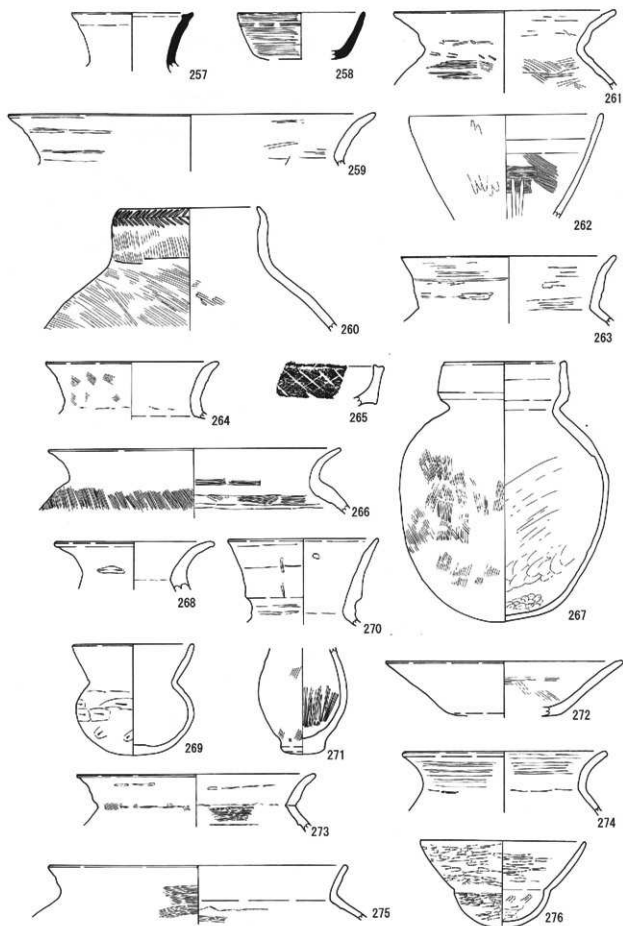
第43图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-2 区] SD01 (228)・SD02 (229 ~ 235)・SD03 (236 ~ 238)・SK01 (239)



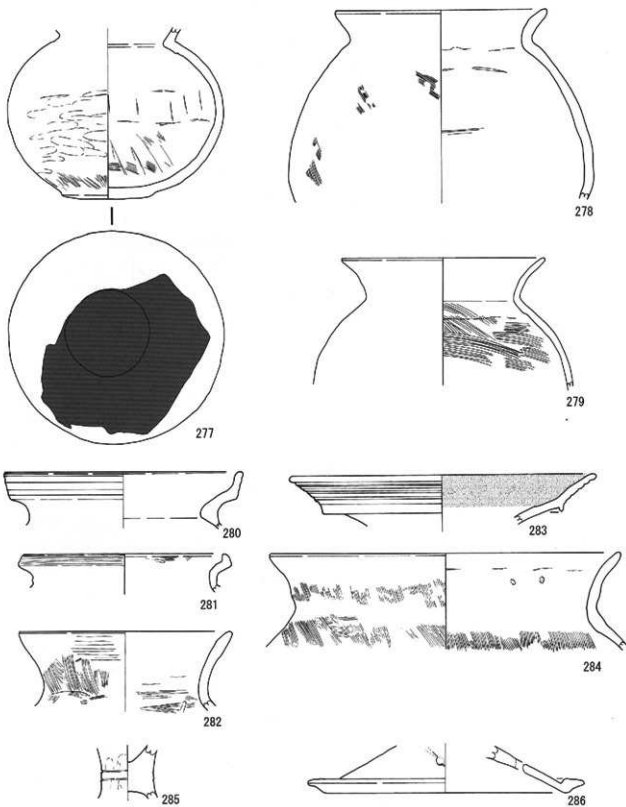
第44圖 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-2区] SK02 (240)・SP03 (241・242)・包含層 (243～256)



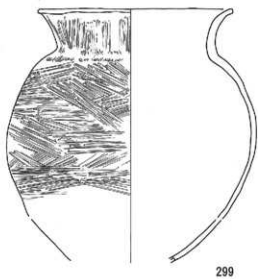
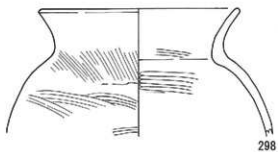
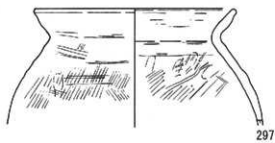
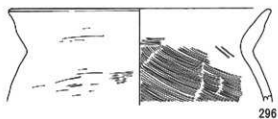
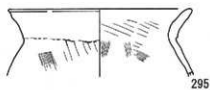
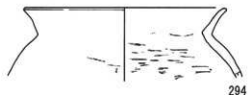
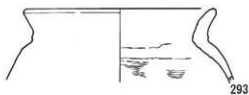
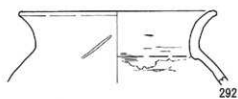
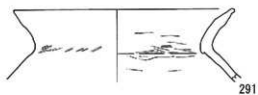
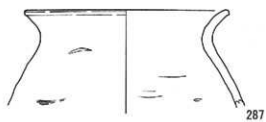
第 45 图 出土文物实测图 (S=1/3)

[E-3 区] SD06 (257 · 258) · SD07 (261 · 262) · SD10 (259 · 260 · 263) · SD11 (264 · 265)
SD12 (266 ~ 269 · 272 ~ 276) · SD13 (270) · 包含层 (271)

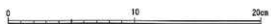


第46图 出土物实测图(S=1/3)
 [E-3区] SK01 (277~279)・包含層(280~286)

0 10 20cm



第47图 出土遺物実測図 (S=1/3)
[E-4区] S001 (287~299)

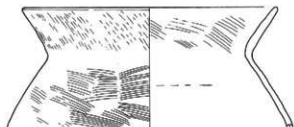




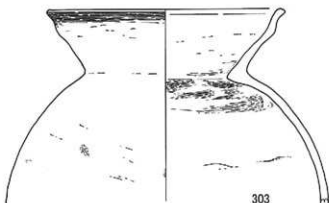
300



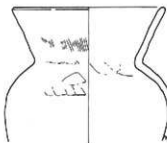
301



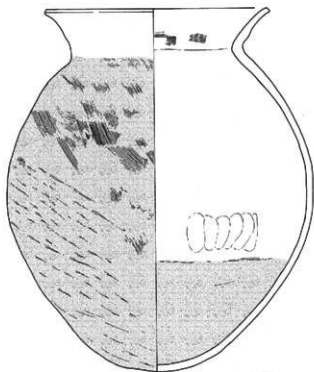
302



303



304



305

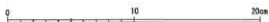


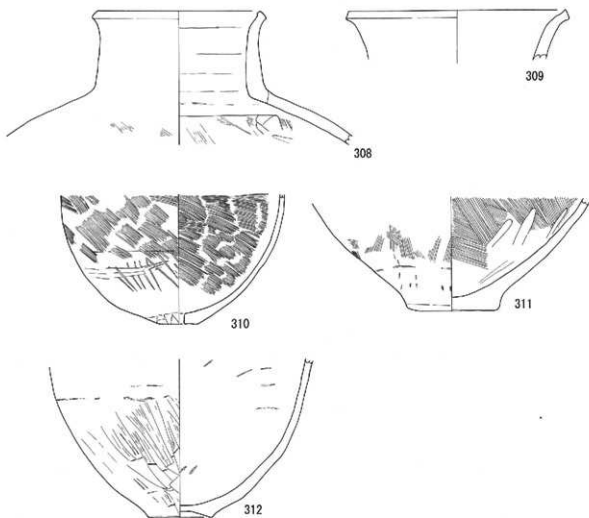
306



307

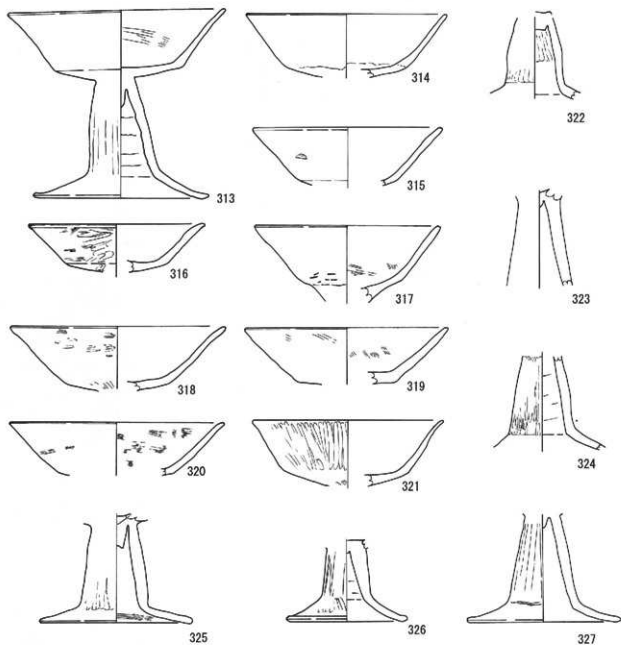
第 48 图 出土遺物実測図 (S=1/3)
[E-4 区] SD01 (300 ~ 307)



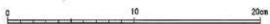


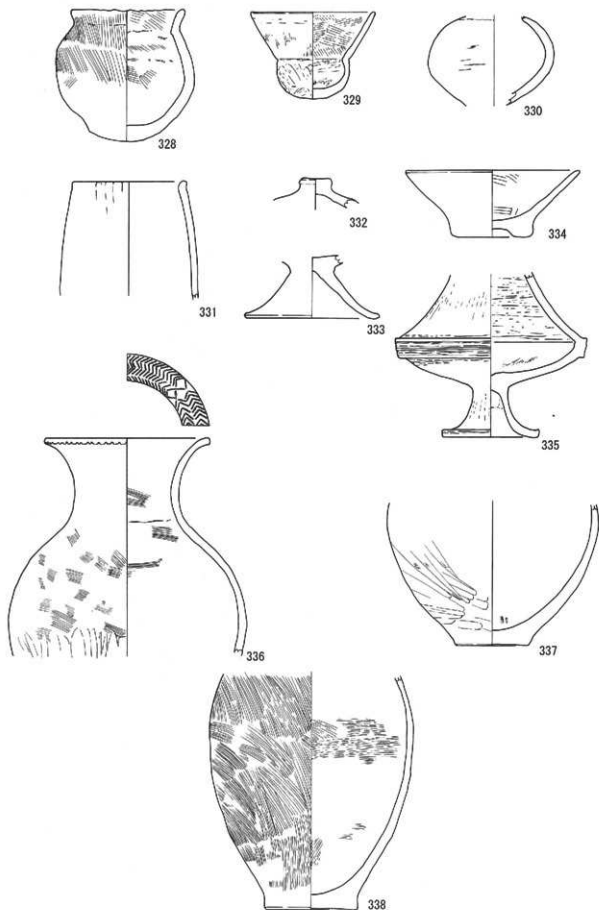
第49図 出土遺物実測図 (S=1/4)

[E-4区] SD01 (308 ~ 312)



第50图 出土遗物实测图 (S=1/3)
[E-4区] SD01 (313~327)





第 51 图 出土遺物実測図 (S=1/3)

[E-4 区] SD01 (328 ~ 335) · SD02 (336 · 337) · SK02 (338)

表 2. 土器観察表①

報告番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)					色調		備 考	
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	輪厚		(内)		(外)
									最小	最大			
第2300-1	C-1	土器盛まり	弥生土器	覆口鉢部	14.2	-	-	-	0.4	0.75	10YR5/3	10YR5/3	
第2300-2		土器盛まり	弥生土器	覆口鉢部	16.2	-	-	-	0.38	0.6	7.5YR5/4	10YR5/2	
第2300-3		土器盛まり	弥生土器	鉢	17.0	14.9	2.4	-	0.3	1.0	10YR5/3	7.5YR4/2	
第2300-4		土器盛まり	弥生土器	甕	16.0	23.5	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	10YR5/2	
第2300-5		土器盛まり	弥生土器	甕坏胴部	-	-	6.4	-	0.5	1.0	10YR5/2	2.5YR5/3	
第2300-6		土器盛まり	弥生土器	甕坏胴部	-	-	22.0	-	0.65	1.3	10YR7/3	2.5YR5/3	
第2300-7		SD06	弥生土器	甕	13.3	20.3	4.8	28.0	0.55	1.0	10YR4/2	10YR5/3	
第2300-8		SD06	弥生土器	覆口鉢部	14.6	-	-	-	0.65	0.95	10YR5/3	10YR5/3	
第2400-9		SD07①・甕部	弥生土器	覆口鉢部	26.2	-	-	-	0.65	1.05	5YR6/5	7.5YR5/4	
第2400-10		SD07①	弥生土器	甕台口鉢部	-	-	18.2	-	0.45	0.65	7.5YR5/4	5YR5/4	表面あり
第2400-11		SD07①・甕部	弥生土器	甕	18.0	24.2	4.8	28.5	0.5	1.3	10YR5/2	5YR5/3	
第2400-12		SD07①	弥生土器	甕	15.6	18.8	-	-	0.55	0.7	7.5YR4/2	7.5YR5/4	
第2400-13		SD07①・肩部	弥生土器	覆口鉢部	14.4	-	-	-	0.55	0.6	10YR5/3	10YR5/2	
第2400-14		SD07①・肩部	弥生土器	覆口鉢部	15.8	-	-	-	0.6	0.85	10YR5/3	7.5YR4/2	
第2400-15		SD07①・肩部	弥生土器	覆口鉢部	17.0	-	-	-	0.6	0.65	7.5YR4/2	10YR5/3	
第2400-16		SD07①・肩部	弥生土器	甕坏胴部	17.0	-	-	-	0.4	0.65	7.5YR5/4	7.5YR5/3	底及び表面あり
第2400-17		SD07①・肩部	弥生土器	甕胴部	-	10.9	-	-	0.5	0.6	10YR5/2	10YR5/2	
第2400-18		SD07②・肩部	弥生土器	覆口鉢部	25.0	-	-	-	0.7	1.2	10YR5/2	7.5YR5/4	
第2400-19		SD07②・肩部	弥生土器	覆口鉢部	18.4	16.4	-	-	0.6	1.05	10YR5/2	10YR5/1	
第2400-20		SD07②	弥生土器	覆口鉢部	11.2	-	-	-	0.45	0.8	10YR5/2	10YR5/2	
第2400-21		SD07②	弥生土器	覆口鉢部	11.0	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/3	2.5YR5/2	
第2400-22		SD07②	弥生土器	覆口鉢部	13.0	-	-	-	0.5	0.8	10YR5/2	7.5YR5/2	
第2400-23		SD07②	弥生土器	覆口鉢部	13.2	-	-	-	0.75	0.8	10YR5/3	10YR5/2	
第2400-24		SD07②	弥生土器	覆口鉢部	12.8	-	-	-	0.45	0.65	7.5YR5/3	10YR5/2	
第2400-25		SD07・東部窓	弥生土器	甕台	17.4	-	-	-	0.7	1.0	10YR5/2	10YR5/2	
第2500-26		SD03	弥生土器	小甕	6.7	10.1	2.9	8.3	0.25	1.1	10YR5/2	10YR5/2	
第2500-27		包含物	弥生土器	覆口鉢部	17.0	-	-	-	0.45	0.6	7.5YR5/3	2.5YR4/1	
第2500-28		包含物	弥生土器	甕	-	22.4	5.0	-	0.4	1.6	7.5YR5/3	10YR5/2	
第2500-29		SD08	弥生土器	覆口鉢部	25.0	-	-	-	0.6	0.75	10YR6/3	10YR5/2	
第2500-30		土器盛まり	弥生土器	小甕胴部	-	13.0	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	2.5YR5/4	
第2500-31		土器盛まり	弥生土器	甕坏胴部	-	-	12.6	-	0.65	0.8	7.5YR5/3	7.5YR5/3	
第2500-32		SD02	弥生土器	覆口鉢部	17.0	-	-	-	0.4	0.95	5YR5/1	7.5YR5/3	
第2500-33		SD05	弥生土器	甕坏台付鉢	9.9	-	6.0	-	0.4	1.3	10YR5/2	10YR5/2	
第2500-34		SD03・東部	弥生土器	甕	14.2	19.2	-	-	0.65	0.8	10YR5/2	10YR5/2	
第2600-35		SD08	弥生土器	甕	20.0	18.6	-	-	0.45	0.6	7.5YR5/3	7.5YR5/3	
第2600-36		SD08	弥生土器	甕	11.0	17.8	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/2	5YR5/2	
第2600-37		SD08	弥生土器	甕胴部	-	29.0	-	-	0.55	0.8	10YR5/2	5YR5/4	表面あり
第2600-38		SD08	弥生土器	甕	15.8	22.8	-	-	0.4	1.1	7.5YR5/3	10YR5/2	
第2600-39		SD06	弥生土器	甕	24.9	20.4	-	-	0.45	0.65	10YR5/2	10YR4/2	
第2600-40		SD09	弥生土器	覆口鉢部	16.5	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR5/3	7.5YR5/4	
第2600-41		SD08	弥生土器	覆口鉢部	14.8	-	-	-	0.15	0.4	7.5YR4/2	2.5YR5/6	
第2600-42		SD09	弥生土器	覆口鉢部	16.6	-	-	-	0.5	1.2	7.5YR5/3	5YR5/4	
第2600-43		SD08	弥生土器	甕	16.5	14.0	5.0	13.3	0.35	0.7	7.5YR5/3	5YR5/4	
第2700-44		SD08	弥生土器	甕台付鉢	-	26.6	-	-	0.7	1.45	10YR6/3	10YR5/3	
第2700-45		SD08	弥生土器	甕坏胴部	25.0	-	-	-	0.5	1.35	10YR5/2	7.5YR5/4	
第2700-46	SD06	弥生土器	甕坏胴部	-	-	16.2	-	0.45	0.9	10YR4/2	7.5YR5/2		
第2700-47	SD09	弥生土器	甕坏胴部	-	-	13.6	-	0.5	1.0	7.5YR5/3	10YR5/2		
第2700-48	SD08	弥生土器	甕底部	-	-	7.6	-	4.5	2.1	10YR4/2	10YR5/2		
第2700-49	SK01・甕部	弥生土器	鉢?	-	-	-	-	0.5	0.8	10YR4/2	7.5YR5/2		
第2700-50	SK01・甕部	弥生土器	覆口鉢部	23.0	18.8	-	-	0.5	0.6	10YR6/3	10YR5/3		
第2700-51	SK01・甕部	弥生土器	覆口鉢部	20.0	18.0	-	-	0.4	0.5	7.5YR5/3	7.5YR5/2		
第2700-52	SK01・肩部	弥生土器	甕	21.0	18.2	-	-	0.6	0.8	10YR5/2	10YR4/2		
第2700-53	SK01・甕部	弥生土器	甕	18.0	12.9	-	-	0.45	0.65	10YR5/2	7.5YR5/3		
第2700-54	SK01・甕部	弥生土器	甕	15.0	13.0	-	-	0.3	0.5	10YR5/2	7.5YR5/3		
第2700-55	SK01・甕部	弥生土器	甕	15.8	20.0	-	-	0.4	0.8	10YR4/2	7.5YR5/2		
第2800-56	SK01・甕部	弥生土器	甕	21.0	21.8	-	-	0.3	0.6	10YR5/2	10YR5/2		

表2. 土器観察表②

報告番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)					色調		備考		
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	高さ	壁厚	最小	最大		(内)	(外)
第28図-57	C-2	S601・前部	弥生土器	甕	16.4	18.8	-	-	-	0.4	0.7	10YR5/2	7.5YR5/2	
第28図-58		S601・前部	弥生土器	長頸甕	8.2	-	-	-	-	0.4	0.6	10YR4/2	2.5YR5/4	赤黒あり
第28図-59		S601・南	弥生土器	甕口縁部	21.0	15.0	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	7.5YR5/3	
第28図-60		S601・東面	弥生土器	甕口縁部	17.0	12.8	-	-	-	0.5	0.5	10YR4/2	7.5YR5/2	
第28図-61		S601・東面	弥生土器	甕	14.0	12.4	-	-	-	0.3	0.7	10YR4/2	7.5YR5/2	
第28図-62		S601・東面	弥生土器	甕	19.0	21.9	-	-	-	0.5	0.75	10YR5/2	10YR5/3	
第28図-63		S601	弥生土器	甕	19.0	13.0	-	-	-	0.9	0.7	7.5YR5/3	7.5YR5/3	口縁部に赤黒あり
第28図-64		S601	弥生土器	鉢	18.0	12.4	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	10YR5/2	
第28図-65		S605	弥生土器	甕	-	37.8	-	-	-	0.4	0.85	10YR4/2	7.5YR5/2	
第29図-66		S605	弥生土器	甕口縁部	17.0	-	-	-	-	0.45	0.65	7.5YR5/3	7.5YR5/3	
第29図-67		S605	弥生土器	甕	14.0	10.7	-	-	-	0.35	0.9	7.5YR5/3	7.5YR5/3	
第29図-68		S605	弥生土器	甕	18.0	18.0	-	-	-	0.35	0.55	10YR5/2	7.5YR5/3	
第29図-69		S605	弥生土器	甕	22.0	22.6	-	-	-	0.4	1.0	7.5YR5/2	7.5YR5/3	
第29図-70		S605	弥生土器	甕	19.4	19.9	-	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	7.5YR5/3	
第30図-71		SP94	土師器	高杯	17.0	-	-	-	-	0.4	0.75	10YR5/3	10YR7/2	
第30図-72		土師埴まり	弥生土器	甕口縁部	13.0	-	-	-	-	0.4	0.5	10YR5/2	10YR5/3	
第30図-73		土師埴まり	弥生土器	甕	15.5	21.6	-	-	-	0.45	0.85	10YR5/2	10YR4/1	
第30図-74		土師埴まり	弥生土器	甕	13.6	13.2	-	-	-	0.5	0.6	7.5YR4/2	7.5YR5/3	
第30図-75		土師埴まり	弥生土器	小型甕	11.6	11.0	3.4	9.8	0.2	1.2	10YR5/3	10YR5/3		
第30図-76		土師埴まり	弥生土器	小型甕	5.2	8.8	3.6	6.65	0.35	0.95	10YR5/2	10YR5/2	古墳?	
第30図-77	土師埴まり	弥生土器	甕口縁部	-	-	-	-	-	0.7	1.9	7.5YR4/4	7.5YR5/4		
第30図-78	土師埴まり	弥生土器	埴輪部	-	-	-	3.35	0.35	0.7	10YR3/2	10YR5/3			
第30図-79	土師埴まり	土師器	小型甕	8.3	7.8	3.45	6.3	0.4	1.4	7.5YR5/3	7.5YR4/2			
第30図-80	土師埴まり	弥生土器	長頸甕	15.8	22.0	-	-	-	0.45	0.95	10YR5/2	10YR5/3		
第30図-81	土師埴まり	弥生土器	長頸甕	13.3	16.4	5.0	26.9	0.35	1.7	10YR5/2	10YR5/2			
第31図-82	土師埴まり	弥生土器	甕口縁部	20.5	-	-	-	-	0.6	0.9	10YR5/2	10YR5/3		
第31図-83	土師埴まり	弥生土器	甕口縁部	14.0	-	-	-	-	0.5	1.9	7.5YR4/4	10YR5/3		
第31図-84	土師埴まり	弥生土器	高杯脚部	-	6.0	-	-	-	0.35	2.1	5YR5/4	7.5YR5/4		
第31図-85	土師埴まり	弥生土器	甕口縁部	13.0	-	-	-	-	0.55	0.8	10YR5/3	10YR5/2	記号文	
第31図-86	土師埴まり	弥生土器	高杯脚部	-	-	-	-	-	0.4	2.6	10YR5/3	10YR7/3		
第31図-87	土師埴まり	弥生土器	高杯脚部	-	-	12.5	-	-	0.35	0.9	10YR5/3	10YR5/3		
第31図-88	土師埴まり	弥生土器	高杯脚部	-	-	10.2	-	-	0.35	0.6	7.5YR5/4	7.5YR5/4		
第31図-89	土師埴まり	弥生土器	高杯	28.2	-	19.9	27.7	0.45	1.65	5YR5/4	2.5YR5/6	古墳?		
第31図-90	S614・15	土師器	甕	8.0	-	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/4	10YR7/3		
第31図-91	S601	弥生土器	高杯脚部	-	5.2	-	-	-	0.4	1.5	10YR3/1	7.5YR5/3		
第32図-92	包含層	土師器	甕	9.4	-	5.0	1.6	0.4	0.8	10YR5/3	10YR7/2			
第32図-93	包含層	弥生土器	甕口縁部	21.0	-	-	-	-	0.8	0.95	7.5YR5/3	10YR5/2		
第32図-94	包含層	弥生土器	甕口縁部	21.0	-	-	-	-	0.75	0.95	7.5YR4/2	10YR5/2		
第32図-95	包含層	弥生土器	高杯脚部	-	-	30.0	-	-	0.45	1.6	2.5YR5/6	2.5YR5/4		
第32図-96	包含層	弥生土器	高杯脚部	28.2	-	-	-	-	0.55	0.9	10YR5/3	10YR5/2		
第32図-97	包含層	弥生土器	甕	12.6	13.8	-	-	-	0.55	0.6	7.5YR5/3	10YR5/2		
第32図-98	包含層	弥生土器	甕口縁部	25.0	-	-	-	-	0.4	0.6	2.5YR5/3	5YR5/4		
第32図-99	包含層	弥生土器	甕口縁部	15.9	-	-	-	-	0.45	1.6	7.5YR4/2	10YR5/3		
第32図-100	包含層	弥生土器	甕口縁部	15.7	-	-	-	-	0.5	0.8	10YR5/2	10YR5/3		
第32図-101	包含層	弥生土器	甕口縁部	13.0	-	-	-	-	0.65	0.7	10YR5/2	10YR5/3		
第32図-102	包含層	弥生土器	甕口縁部	13.0	-	-	-	-	0.65	0.8	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第32図-103	包含層	弥生土器	甕	16.0	-	-	2.8	0.4	0.6	10YR5/2	10YR7/2			
第32図-104	包含層	弥生土器	合付鉢	-	-	10.0	-	-	0.4	1.6	10YR5/2	10YR5/2	小型台付鉢?	
第32図-105	包含層	弥生土器	高杯脚部	-	-	9.3	-	-	0.5	1.85	10YR5/3	7.5YR5/3		
第32図-106	包含層	弥生土器	高杯脚部	-	-	10.2	-	-	0.3	1.9	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第32図-107	包含層	弥生土器	埴輪部	-	-	1.6	-	-	0.55	0.8	7.5YR5/4	7.5YR5/4		
第33図-108	谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	22.0	-	-	-	-	0.4	1.65	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第33図-109	谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	14.9	-	-	-	-	0.45	0.9	10YR5/2	10YR7/3		
第33図-110	谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	13.8	10.5	-	-	-	0.45	0.73	7.5YR4/2	10YR4/1		
第33図-111	谷部タチワリ	弥生土器	甕口縁部	17.0	-	-	-	-	0.45	0.9	10YR5/2	10YR5/2		
第33図-112	谷部タチワリ	弥生土器	甕	16.6	18.45	-	-	-	0.5	1.15	10YR5/3	5YR5/3		

表2. 土器観察表③

報告書番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考	
			種別	器種	口徑	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)	(外)		
									最小	最大				
第33図-113		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	13.2	-	-	-	-	0.4	0.9	5YR5/4	10YR5/2	
第33図-114		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	16.9	-	-	-	-	0.35	0.75	7.5YR6/3	10YR2/1	
第33図-115		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	16.9	-	-	-	-	0.3	1.1	7.5YR6/3	10YR6/3	
第33図-116		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	10.9	-	-	-	-	0.4	0.75	7.5YR5/3	7.5YR5/2	
第33図-117		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	15.9	-	-	-	-	0.4	0.9	10YR5/2	10YR5/2	
第33図-118		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	20.9	-	-	-	-	0.6	0.9	7.5YR5/2	10YR5/2	
第33図-119		谷部タテワリ	弥生土器	台付縁部	12.0	16.4	-	-	-	0.35	1.0	10YR5/2	7.5YR5/2	
第33図-120		谷部タテワリ	弥生土器	面台脚部	-	5.0	-	-	-	0.45	0.95	10YR5/2	7.5YR5/2	
第33図-121		谷部タテワリ	弥生土器	底杯脚部	-	-	-	-	-	0.45	1.3	5YR5/4	5YR5/6	
第34図-122		谷部タテワリ	土師器	壺口縁部	9.6	-	-	-	-	0.1	0.7	10YR6/3	7.5YR5/2	有留素土層
第34図-123		谷部タテワリ	土師器	壺	13.0	18.0	-	-	-	0.26	0.6	10YR5/3	5YR6/4	有留素土層
第34図-124		谷部タテワリ	弥生土器	底杯脚部	14.2	-	-	-	-	0.3	1.06	10YR5/3	10YR6/3	
第34図-125		谷部タテワリ	弥生土器	底底部	-	-	-	7.0	-	0.40	1.6	10YR5/3	10YR6/3	
第34図-126		谷部タテワリ	弥生土器	底底部	-	-	-	5.0	-	0.6	1.1	10YR5/3	10YR6/3	
第34図-127		谷部タテワリ	弥生土器	壺口縁部	19.9	-	-	-	-	0.35	0.7	7.5YR5/3	10YR6/3	
第34図-128		SD01	土師器	壺	19.2	17.1	-	-	-	0.7	1.1	7.5YR5/3	10YR5/3	
第34図-129		SD01	弥生土器	坪	14.9	-	-	-	-	0.25	0.5	7.5YR4/2	7.5YR5/2	把手付
第34図-130		SD02	弥生土器	壺	-	-	19.4	-	-	0.6	2.8	7.5YR6/2	7.5YR6/3	
第34図-131		SD02	弥生土器	壺	29.9	25.3	-	-	-	0.6	0.65	10YR5/2	7.5YR3/1	
第35図-132		SD02	埴輪	磨光底部	20.6	1R.1	-	-	-	0.35	0.55	10YR5/2	7.5YR4/1	
第35図-133		SK04	弥生土器	壺口縁部	29.8	-	-	-	-	0.1	0.8	2.5YR5/6	5YR5/4	
第35図-134		SK02	弥生土器	壺	12.8	16.0	-	-	-	0.35	0.65	7.5YR5/3	10YR5/3	把手付、口縁部に漆部
第35図-135		SK04	弥生土器	底杯脚部	27.6	-	-	-	-	0.4	0.7	2.5YR5/6	5YR5/4	
第35図-136		SK06	弥生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	-	0.3	0.95	7.5YR5/3	10YR7/3	
第35図-137		SK07	埴輪	壺	47.0	47.8	13.0	-	-	0.35	1.8	7.5YR5/11	10YR6/1	
第36図-138		SK08	弥生土器	壺口縁部	21.4	-	-	-	-	0.3	0.8	2.5YR5/4	7.5YR5/2	
第36図-139		SK06	弥生土器	壺口縁部	17.8	-	-	-	-	0.6	0.8	5YR5/4	7.5YR6/2	
第36図-140		SK06	弥生土器	壺	16.4	14.9	-	-	-	0.6	0.7	10YR5/2	10YR6/3	
第36図-141		SK11	弥生土器	壺	18.8	13.4	-	-	-	0.4	0.7	10YR5/2	10YR2/1	
第36図-142		SK11	弥生土器	壺	16.8	14.0	-	-	-	0.45	0.85	10YR4/2	7.5YR5/3	
第36図-143		SP43	弥生土器	壺口縁部	12.4	-	-	-	-	0.6	0.6	10YR6/3	2.5YR6/2	
第36図-144		SP38	弥生土器	壺口縁部	18.4	-	-	-	-	0.4	0.8	10YR6/2	10YR5/2	
第36図-145		SP58	弥生土器	台付縁部	-	-	-	7.0	-	0.6	1.2	10YR6/2	7.5YR6/3	
第36図-146		SP58	弥生土器	壺	-	-	30.0	-	-	1.3	1.85	7.5YR6/3	7.5YR6/3	
第36図-147		SK01	弥生土器	波舟底	18.4	-	-	-	-	0.45	1.3	5YR5/4	5YR5/4	底面あり
第36図-148		SK01	弥生土器	壺	17.8	13.9	-	-	-	0.25	0.6	7.5YR5/3	7.5YR4/2	
第37図-149		SK01	土師器	壺	7.8	-	2.8	1.6	0.4	0.6	10YR6/2	2.5YR6/2		
第37図-150		SK01	弥生土器	壺口縁部	13.8	-	-	-	-	0.3	0.7	7.5YR4/2	7.5YR2/4	
第37図-151		SK01	弥生土器	壺口縁部	18.2	-	-	-	-	0.1	0.9	5YR5/3	5YR5/3	
第37図-152		SK01	弥生土器	高洋洋部	26.2	-	-	-	-	0.3	1.9	10YR5/2	10YR6/2	
第37図-153		SK01	弥生土器	壺	23.4	24.5	7.2	36.05	-	0.56	0.8	10YR5/2	10YR5/2	
第38図-164		包舎溝	弥生土器	壺	21.6	22.8	-	-	-	0.6	0.6	7.5YR6/2	7.5YR6/2	
第38図-165		包舎溝	弥生土器	高洋洋部	15.0	-	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/4	5YR5/4	
第38図-166		包舎溝	弥生土器	壺台脚部	-	-	-	-	-	0.65	0.75	7.5YR6/2	7.5YR6/3	
第38図-167		SD01	弥生土器	壺口縁部	14.0	-	-	-	-	0.3	0.95	2.5YR5/2	10YR6/2	
第38図-168		SD01	弥生土器	壺口縁部	28.0	-	-	-	-	0.5	1.0	10YR5/3	10YR6/3	
第38図-169		SD01	弥生土器	壺口縁部	23.8	-	-	-	-	0.85	2.1	10YR6/3	10YR6/3	台付?
第39図-180		SD02	弥生土器	壺口縁部	19.1	-	-	-	-	0.5	0.75	10YR5/3	7.5YR5/3	
第39図-181		SD02	弥生土器	壺口縁部	17.6	-	-	-	-	0.7	1.0	10YR5/2	7.5YR4/2	
第39図-182		SD02	弥生土器	壺口縁部	12.6	-	-	-	-	0.4	0.75	10YR6/2	7.5YR6/3	
第39図-183		SD02	弥生土器	壺口縁部	20.6	-	-	-	-	0.4	0.8	7.5YR5/4	7.5YR5/4	
第39図-184		SD02	弥生土器	壺口縁部	17.7	-	-	-	-	0.38	0.9	10YR5/3	10YR5/3	
第39図-185		SD02	弥生土器	壺口縁部	16.8	-	-	-	-	0.4	1.0	7.5YR5/3	7.5YR4/2	
第39図-186		SD02	弥生土器	壺口縁部	13.2	12.4	-	-	-	0.6	0.8	2.5YR5/2	10YR5/2	
第39図-187		SD02	弥生土器	壺口縁部	13.8	-	-	-	-	0.35	0.9	7.5YR6/3	10YR6/3	
第39図-188		SD02	弥生土器	壺口縁部	10.9	-	-	-	-	0.6	0.7	7.5YR5/2	10YR5/3	

表2. 土器観察表④

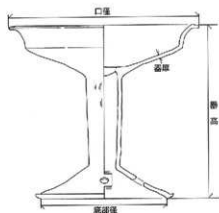
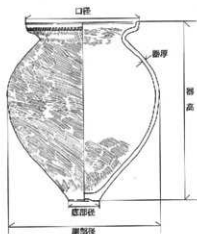
報告番号	出土地区	遺構名	種類		法量(cm)						色調		備考	
			種別	器種	口径	胴部径	底径	器高	器厚		(内)	(外)		
									最小	最大				
第39回-169		S002	弥生土器	甕	10.5	11.7	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	10YR5/2	
第39回-170		S002	弥生土器	高坪坏部	21.3	-	-	-	-	0.7	1.3	5YR5/6	7.5YR6/4	
第39回-171		S002	弥生土器	高坪坏部	27.8	-	-	-	-	0.7	1.0	7.5YR5/3	2.5YR/2	
第39回-172		S002	弥生土器	長頸甕口縁部	7.2	-	-	-	-	0.38	1.0	7.5YR/2	7.5YR5/3	
第39回-173		S002	弥生土器	短頸高坪坏部	4.4	-	-	-	-	0.5	0.8	10YR6/2	10YR5/3	
第39回-174		S002	弥生土器	鉢	12.4	13.4	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	10YR5/3	
第39回-175		S002	弥生土器	甕	-	-	4.6	-	-	0.5	1.6	7.5YR4/3	10YR4/2	
第39回-176		S002	弥生土器	甕胴部	-	-	-	-	-	0.4	0.7	7.5YR5/4	7.5YR6/4	
第39回-177		S002	弥生土器	甕	-	-	-	-	-	0.7	1.1	7.5YR5/4	7.5YR4/2	
第39回-178		S002	弥生土器	高坪坏部	-	-	15.0	-	-	0.5	0.8	10YR6/3	7.5YR5/4	
第39回-179		S002	弥生土器	甕	-	-	-	-	-	0.7	1.2	10YR5/3	7.5YR5/4	
第39回-180		S002	弥生土器	台付鉢胴部	-	-	10.0	-	-	0.4	0.9	10YR5/3	2.5YR5/4	
第40回-181		S002	弥生土器	短頸甕	口径部	13.4	-	-	-	0.3	0.55	2.5YR/1	10YR4/1	
第40回-182		S005	弥生土器	甕もしくは高口縁部	19.4	-	-	-	-	0.45	0.6	10YR5/2	7.5YR5/2	
第40回-183		S005	弥生土器	甕?	-	-	11.5	-	-	0.4	0.66	10YR5/2	10YR4/1	
第40回-184		S005	弥生土器	長頸甕	19.6	-	-	-	-	0.4	1.25	7.5YR4/2	2.5YR/2	
第40回-185		S008	弥生土器	甕	15.0	16.9	-	-	-	0.65	0.85	10YR5/2	10YR5/3	
第40回-186		S009	弥生土器	甕もしくは高口縁部	-	-	5.4	-	-	0.6	1.2	7.5YR4/2	10YR4/1	
第40回-187		S009	弥生土器	短頸甕	-	-	6.4	-	-	0.65	1.4	10YR5/2	10YR5/3	
第40回-188		S011	弥生土器	高坪坏部	-	-	13.2	-	-	0.96	1.06	10YR5/2	10YR5/2	
第40回-189		S002	弥生土器	甕口縁部	17.0	-	-	-	-	0.25	0.55	7.5YR4/2	7.5YR3/1	
第40回-190		S002	弥生土器	甕口縁部	14.9	-	-	-	-	0.4	0.85	10YR7/2	2.5Y4/1	
第40回-191		S002	弥生土器	甕口縁部	15.2	-	-	-	-	0.52	0.75	10YR5/2	10YR5/2	
第40回-192		S002	弥生土器	甕	14.7	21.0	-	-	-	0.35	0.9	10YR5/3	5YR5/3	埋納土器
第41回-189		110Y159	弥生土器	甕口縁部	13.0	-	-	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	10YR5/3	
第41回-194		S002	弥生土器	短頸甕部	-	-	-	-	-	0.6	1.96	10YR6/2	10YR5/2	
第41回-195		Y3Y150	弥生土器	高坪坏部	-	-	3.8	-	-	0.6	1.2	7.5YR2/1	10YR5/2	
第41回-196		SP22	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	-	0.6	1.0	10YR5/2	7.5YR6/3	
第41回-197		SP12	弥生土器	甕口縁部	15.0	-	-	-	-	0.55	0.7	7.5YR6/4	7.5YR5/3	
第41回-198		S004・SP06の上層	弥生土器	高坪坏部	-	-	17.8	-	-	0.6	0.8	10YR5/2	10YR5/3	S004・SP06の上層
第41回-199		SP10	弥生土器	甕胴部	-	-	22.0	-	-	0.35	0.66	10YR5/2	10YR5/2	
第41回-200		3200Y145	弥生土器	甕	19.8	18.5	-	-	-	0.4	0.9	10YR4/2	10YR4/1	
第41回-201		3185Y145	弥生土器	甕口縁部	19.6	-	-	-	-	0.4	1.05	10YR6/2	10YR5/3	
第41回-202		3200Y145	弥生土器	甕	17.6	16.45	-	-	-	0.35	0.65	10YR3/1	10YR5/3	
第41回-203		3185Y145	弥生土器	甕口縁部	20.0	-	-	-	-	0.6	1.15	10YR6/2	10YR5/3	
第41回-204		3185Y145	弥生土器	鉢	19.0	17.3	-	-	-	0.35	0.8	5YR/4	7.5YR6/3	
第41回-205		3200Y145	弥生土器	甕口縁部	29.2	-	-	-	-	1.2	2.0	7.5YR4/2	10YR5/3	
第41回-206		3200Y145	弥生土器	甕	24.7	31.3	-	-	-	0.45	1.96	10YR5/3	7.5YR6/3	
第42回-207		3190Y145	弥生土器	甕口縁部	15.4	-	-	-	-	1.0	1.15	10YR7/3	10YR6/4	
第42回-208		3185Y145	弥生土器	甕口縁部	13.3	-	-	-	-	0.2	0.65	7.5YR6/4	7.5YR5/3	
第42回-209		3200Y145	弥生土器	短頸甕部	12.4	-	-	-	-	0.45	0.8	2.5Y4/1	7.5YR5/3	
第42回-210		3200Y145	弥生土器	甕口縁部	18.2	-	-	-	-	0.6	0.9	7.5YR4/3	7.5YR4/2	
第42回-211		3185Y145	弥生土器	甕口縁部	13.3	-	-	-	-	0.35	0.65	10YR6/3	10YR5/2	
第42回-212		3200Y145	弥生土器	甕口縁部	16.6	-	-	-	-	0.7	1.0	10YR4/1	10YR2/1	
第42回-213		3180Y145	弥生土器	短頸坏部	9.7	-	-	-	-	0.1	0.65	7.5YR5/3	7.5YR6/3	
第42回-214		3160Y145	弥生土器	甕口縁部	19.6	-	-	-	-	0.6	1.1	10YR5/3	5YR5/4	
第42回-215		3180Y145	弥生土器	埴	-	7.3	-	-	-	0.5	0.8	10YR6/3	2.5YR/2	
第42回-216		3200Y145	弥生土器	鉢	13.2	13.5	5.3	8.4	-	0.4	0.9	5YR4/4	5YR5/4	表面面に産影
第42回-217		3200Y145	弥生土器	鉢	17.8	18.7	-	-	-	0.9	1.0	10YR5/2	10YR5/2	
第42回-218		3185Y145	弥生土器	埴	-	8.7	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR4/2	10YR6/2	
第42回-219		3200Y145	弥生土器	短頸坏部	25.8	-	-	-	-	0.3	0.6	7.5YR4/2	10YR4/2	
第42回-220		3185Y145	弥生土器	短頸坏部	20.8	-	-	-	-	0.25	1.05	7.5YR4/3	10YR6/3	
第42回-221		3200Y145	弥生土器	短頸坏部	24.0	-	-	-	-	0.6	0.9	7.5YR5/4	7.5YR5/3	
第42回-222		3200Y145	弥生土器	短頸部	-	-	4.0	-	-	3.9	1.4	7.5YR4/2	10YR5/2	穿孔あり
第42回-223		3185Y145	弥生土器	短頸坏部	-	-	11.6	-	-	0.4	1.7	2.5YR/2	10YR6/2	
第42回-224		3190Y145	弥生土器	短頸坏部	-	-	9.0	-	-	0.5	1.7	7.5YR6/4	10YR6/3	

表 2. 土器観察表⑤

報告番号	出土地区	遺構名	種類		量目(cm)					色澤		備考	
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	器高	器厚		(内)		(外)
									最小	最大			
第42区-223	E-1	X190Y145	弥生土器	高坪髷部	-	-	-	-	0.7	1.0	7.5YR6/4		
第42区-226		X190Y146	弥生土器	高坪髷部	-	-	12.2	-	0.5	0.6	5YR4/4	5YR6/6	
第42区-227		X185Y145	弥生土器	高坪髷部	-	-	9.7	-	0.4	0.8	2.5YR5/4	7.5YR5/3	
第43区-228		SD01	弥生土器	蓋口縁部	15.0	-	-	-	0.55	0.65	7.5YR5/4	10YR5/3	
第43区-229		SD02	弥生土器	蓋口縁部	24.4	-	-	-	0.5	0.6	10YR6/3	10YR5/3	
第43区-230		SD02	弥生土器	蓋口縁部	15.5	-	-	-	0.5	0.65	10YR5/3	10YR5/3	
第43区-231		SD02	弥生土器	蓋口縁部	12.7	-	-	-	0.5	0.65	10YR5/3	10YR4/2	
第43区-232		SD02	弥生土器	蓋	18.0	16.9	-	-	0.6	0.75	7.5YR5/3	10YR5/3	
第43区-233		SD02	弥生土器	蓋口縁部	23.6	-	-	-	0.5	1.1	7.5YR4/3	10YR6/5	
第43区-234		SD02	弥生土器	台付鉢	11.8	18.2	-	-	0.4	0.8	10YR6/2	7.5YR6/3	
第43区-235		SD02	弥生土器	高坪髷部	26.9	-	-	-	0.4	0.7	10YR6/3	7.5YR6/2	
第43区-236		SD03	弥生土器	罎	16.0	17.45	-	-	0.2	0.75	10YR5/3	7.5YR6/3	
第43区-237	SD03	弥生土器	高坪髷部	-	-	-	-	0.5	1.05	7.5YR5/3	10YR6/5		
第43区-238	SD03	弥生土器	鉢	12.4	-	-	-	0.3	0.45	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第43区-239	SD01	弥生土器	蓋口縁部	17.9	-	-	-	0.35	0.6	10YR5/2	10YR4/1		
第44区-240	SD02	弥生土器	蓋口縁部	18.0	-	-	-	0.55	0.8	10YR5/3	7.5YR5/3		
第44区-241	SP03	弥生土器	蓋口縁部	21.0	-	-	-	0.45	0.8	10YR5/3	10YR5/5		
第44区-242	SP03	弥生土器	蓋口縁部	20.0	-	-	-	0.28	0.5	10YR6/3	10YR6/2		
第44区-243	X130Y115	弥生土器	罎	14.0	17.0	-	-	0.4	0.6	10YR5/3	10YR5/3		
第44区-244	X130Y115	弥生土器	蓋口縁部	16.0	-	-	-	0.36	0.75	7.5YR5/4	7.5YR4/2		
第44区-245	X130Y113	弥生土器	台付鉢髷部	-	-	2.2	-	0.3	1.4	7.5YR5/3	10YR5/3		
第44区-246	X130Y110	弥生土器	覆もしくは蓋底部	-	-	8.0	-	0.8	2.8	10YR/2	10YR5/3		
第44区-247	トレンチ	弥生土器	覆口縁部	20.6	-	-	-	0.5	0.75	10YR5/3	10YR6/3		
第44区-248	X130Y135	弥生土器	蓋口縁部	16.0	-	-	-	0.4	0.86	7.5YR5/4	7.5YR5/1		
第44区-249	自然河道	弥生土器	蓋口縁部	18.7	-	-	-	0.4	0.95	10YR5/2	10YR3/1		
第44区-250	X130Y120	弥生土器	蓋口縁部	17.0	-	-	-	0.4	0.95	10YR5/3	10YR6/3		
第44区-251	X130Y135	弥生土器	蓋口縁部	18.0	-	-	-	0.4	0.5	10YR5/3	7.5YR4/2		
第44区-252	X130Y130	弥生土器	蓋	9.2	-	-	3.8	0.55	0.8	10YR6/3	10YR6/3		
第44区-253	トレンチ	弥生土器	高坪	32.1	-	-	-	0.45	1.26	7.5YR5/3	5YR6/4		
第44区-254	X130Y110	弥生土器	高坪髷部	-	-	21.2	-	0.25	1.1	10YR5/2	7.5YR5/3		
第44区-255	X130Y130	弥生土器	高坪髷部	-	-	13.9	-	0.5	1.0	10YR5/2	5YR6/4		
第44区-256	X130Y120	弥生土器	高坪髷部	-	-	24.0	-	0.6	1.2	10YR6/4	2.5YR5/4		
第45区-257	SD06	須恵器	蓋口縁部	9.8	-	-	-	0.6	0.8	10YR6/1	10YR6/1		
第45区-258	SD06	須恵器	罎	16.2	-	5.6	3.7	0.2	0.7	2.5YR/1	2.5YR/1		
第45区-259	SD10	弥生土器	覆口縁部	29.2	-	-	-	0.5	0.8	10YR4/2	10YR3/1		
第45区-260	SD10	弥生土器	蓋口縁部	11.9	-	-	-	0.4	0.7	10YR6/3	10YR6/2		
第45区-261	SD07	弥生土器	蓋口縁部	17.6	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR5/3	7.5YR4/2		
第45区-262	SD07	弥生土器	鉢	13.6	14.2	-	-	0.4	0.6	7.5YR5/3	7.5YR5/3		
第45区-263	SD10	弥生土器	蓋口縁部	17.0	-	-	-	0.4	0.6	10YR4/2	10YR2/1		
第45区-264	SD11	弥生土器	蓋口縁部	14.4	-	-	-	0.4	0.9	7.5YR5/2	7.5YR1/2		
第45区-265	SD11	弥生土器	蓋口縁部	-	-	-	-	0.7	1.3	10YR4/2	7.5YR3/2		
第45区-266	SD12・片断	弥生土器	蓋口縁部	22.0	-	-	-	0.3	1.2	10YR5/3	7.5YR4/3		
第45区-267	SD12・床面	弥生土器	蓋	9.6	16.6	-	20.6	0.4	0.85	7.5YR6/2	7.5YR5/3		
第45区-268	SD12	弥生土器	蓋口縁部	12.8	-	-	-	0.5	1.3	10YR4/2	10YR3/2		
第45区-269	SD12・中間	弥生土器	罎	9.4	9.4	-	8.8	0.35	0.85	10YR5/2	10YR5/2		
第45区-270	SD13	弥生土器	蓋口縁部	12.0	-	-	-	0.4	1.1	2.5Y/1	7.5YR4/3		
第45区-271	自然河道	弥生土器	小型蓋	-	7.0	3.4	-	0.4	0.9	10YR5/3	10YR6/2		
第45区-272	SD12	弥生土器	高坪髷部	17.8	-	7.6	4.1	0.5	0.7	10YR4/2	10YR3/5		
第45区-273	SD12	弥生土器	蓋口縁部	18.4	-	-	-	0.5	0.7	7.5YR5/3	10YR3/1		
第45区-274	SD12	弥生土器	蓋口縁部	16.4	-	-	-	0.4	0.0	10YR4/1	10YR3/1		
第45区-275	SD12	弥生土器	蓋口縁部	23.8	-	-	-	0.4	0.7	10YR2/1	10YR2/1		
第45区-276	SD12	土師器	罎	12.6	-	2.5	7.6	0.2	0.6	7.5YR4/2	10YR6/2		
第46区-277	SK01・中間	弥生土器	蓋	-	17.2	3.8	-	0.6	0.9	10YR4/2	10YR5/2		
第46区-278	SK01	弥生土器	蓋	16.6	24.2	-	-	0.6	0.9	10YR4/2	10YR2/1		
第46区-279	SK01	弥生土器	蓋	16.9	-	-	-	0.4	0.6	7.5YR6/2	7.5YR4/3		
第46区-280	包含層	弥生土器	蓋口縁部	18.6	-	-	-	0.4	1.3	7.5YR4/2	2.5YR4/1		

表2. 土器観察表⑥

報告書番号	出土地区	通称名	種類		流量(cm)						色調		備考
			種別	器種	口径	胴部径	底部径	高さ	器厚		(内)	(外)	
									最小	最大			
第46図-281	E-3	包含層	赤生土器	壺口縁部	18.4	-	-	-	0.5	0.9	10YR4/2	7.5YR3/2	
第46図-282		包含層	赤生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.7	0.9	10YR5/3	10YR5/2	
第49図-283		包含層	赤生土器	高杯もしくは高杯	-	-	24.0	-	0.45	1.1	7.5YR3/1	7.5YR3/3	口縁内面黄土物付着
第49図-284		包含層	赤生土器	甕口縁部	28.8	-	-	-	0.6	1.1	7.5YR5/3	7.5YR4/3	
第49図-285		包含層	赤生土器	高杯縁部	-	4.8	-	-	0.8	2.4	10YR5/2	2.5YR5/2	
第49図-286		包含層	赤生土器	高杯縁部	-	-	19.2	-	0.55	1.0	10YR5/3	10YR5/3	
第47図-287	E-4	S01	赤生土器	壺口縁部	18.3	-	-	-	0.5	0.8	10YR5/3	7.5YR1/2	
第47図-288		S01	赤生土器	壺口縁部	15.0	-	-	-	0.55	0.7	10YR5/2	7.5YR3/3	
第47図-289		S01	赤生土器	壺口縁部	15.2	-	-	-	0.6	1.1	7.5YR5/3	10YR4/2	
第47図-290		S01	赤生土器	壺口縁部	18.9	-	-	-	0.55	1.2	2.5YR5/3	10YR5/3	
第47図-291		S01	赤生土器	壺口縁部	17.5	-	-	-	0.4	0.9	10YR5/3	10YR5/3	
第47図-292		S01	赤生土器	壺口縁部	15.8	-	-	-	0.6	0.9	10YR5/2	7.5YR4/2	
第47図-293		S01	赤生土器	壺口縁部	15.0	-	-	-	0.45	1.2	10YR5/3	10YR4/1	
第47図-294		S01	赤生土器	壺口縁部	18.0	-	-	-	0.35	0.7	10YR5/2	10YR5/2	
第47図-295		S01	赤生土器	壺口縁部	14.4	-	-	-	0.4	0.76	10YR5/2	10YR5/2	
第47図-296		S01	赤生土器	壺口縁部	20.6	-	-	-	0.5	1.1	7.5YR5/3	10YR5/2	
第47図-297		S01・床面	赤生土器	壺口縁部	18.2	20.3	-	-	0.4	0.7	2.5YR5/1	10YR4/1	
第47図-298		S01	赤生土器	壺口縁部	15.6	20.9	-	-	0.5	1.1	10YR5/2	10YR5/1	
第47図-299		S01	赤生土器	壺口縁部	16.4	20.0	-	-	0.35	0.7	7.5YR6/4	7.5YR4/3	
第48図-300		S01	赤生土器	壺口縁部	19.1	-	-	-	0.4	0.8	7.5YR5/3	10YR5/2	
第48図-301		S01	赤生土器	壺口縁部	18.2	-	-	-	0.5	1.0	10YR5/3	10YR5/3	
第48図-302		S01・床面	赤生土器	壺	20.0	-	-	-	0.4	0.8	7.5YR4/3	7.5YR5/4	
第48図-303		S01	赤生土器	壺	18.2	25.7	-	-	0.5	1.5	10YR5/2	7.5YR4/1	
第48図-304		S01	赤生土器	壺	12.0	13.3	-	-	0.35	0.65	7.5YR5/3	7.5YR5/4	
第48図-305		S01	赤生土器	壺	17.5	24.1	-	29.0	0.45	0.9	7.5YR5/1	7.5YR4/1	
第48図-306		S01	赤生土器	壺口縁部	12.8	-	-	-	0.55	0.9	10YR5/2	7.5YR5/3	
第48図-307		S01	赤生土器	壺	13.2	-	3.8	15.25	0.25	0.5	7.5YR5/2	7.5YR4/1	
第49図-308		S01	赤生土器	壺口縁部	17.0	-	-	-	0.8	2.0	10YR5/3	10YR5/3	
第49図-309		S01	赤生土器	壺口縁部	23.0	-	-	-	0.55	1.2	10YR5/2	10YR5/3	
第49図-310		S01	赤生土器	壺底部	-	23.5	3.9	-	0.5	1.3	10YR5/2	10YR5/3	
第49図-311		S01	赤生土器	壺底部	-	-	9.2	-	0.8	1.8	7.5YR5/3	10YR5/2	
第49図-312		S01	赤生土器	壺底部	-	-	6.6	-	0.6	1.25	10YR5/3	10YR5/2	
第50図-313		S01	赤生土器	高杯	17.2	-	14.0	15.1	0.4	0.86	7.5YR5/3	10YR5/2	
第50図-314		S01	赤生土器	高杯縁部	15.8	-	-	-	0.3	0.7	10YR5/2	7.5YR5/4	
第50図-315		S01	赤生土器	高杯縁部	15.2	-	-	-	0.4	0.5	2.5YR5/1	7.5YR5/2	
第50図-316		S01	赤生土器	高杯縁部	14.2	-	-	-	0.3	0.9	10YR5/2	7.5YR4/1	
第50図-317	S01	赤生土器	高杯縁部	14.5	-	-	-	0.45	0.5	10YR5/3	10YR5/3		
第50図-318	S01	赤生土器	高杯縁部	17.0	-	-	-	0.25	0.75	7.5YR5/2	7.5YR4/1		
第50図-319	S01	赤生土器	高杯縁部	16.0	-	-	-	0.4	0.85	10YR4/2	7.5YR4/2		
第50図-320	S01	赤生土器	高杯縁部	17.0	-	-	-	0.3	0.65	10YR5/2	7.5YR4/2		
第50図-321	S01	赤生土器	高杯縁部	15.0	-	-	-	0.25	0.85	7.5YR5/3	2.5YR5/6		
第50図-322	S01	赤生土器	高杯縁部	-	-	-	-	0.5	0.65	10YR5/3	10YR5/3		
第50図-323	S01	赤生土器	高杯縁部	-	-	-	-	0.75	1.15	7.5YR5/3	10YR5/2		
第50図-324	S01	赤生土器	高杯縁部	-	-	-	-	0.45	0.8	10YR4/2	10YR5/3		
第50図-325	S01	赤生土器	高杯縁部	-	-	12.2	-	0.5	1.0	10YR5/2	10YR5/2		
第50図-326	S01	赤生土器	高杯縁部	-	-	9.0	-	0.45	1.3	7.5YR5/2	7.5YR5/2		
第50図-327	S01	赤生土器	高杯縁部	-	-	11.0	-	0.5	0.85	7.5YR4/2	7.5YR5/3		
第51図-328	S01	赤生土器	小甕	8.9	11.0	5.7	10.55	0.55	1.1	10YR5/2	5YR5/2		
第51図-329	S01	赤生土器	小甕	9.7	5.8	-	6.9	0.4	0.8	10YR5/2	10YR5/3		
第51図-330	S01	赤生土器	小甕口縁部	-	10.0	-	-	0.15	0.7	10YR5/2	10YR5/3		
第51図-331	S01	赤生土器	壺口縁部	9.0	10.9	-	-	0.4	0.6	10YR5/2	10YR5/3		
第51図-332	S01・床面	赤生土器	壺	-	-	-	-	0.6	1.2	10YR5/2	10YR5/2		
第51図-333	S01	赤生土器	壺口縁部	-	-	10.2	-	0.45	1.0	10YR5/2	10YR5/3		
第51図-334	S01	赤生土器	壺	43.8	-	5.75	5.3	0.4	0.9	7.5YR5/3	7.5YR5/4		
第51図-335	S01	赤生土器	壺口縁部付着	-	15.3	7.6	-	0.5	1.0	10YR7/2	10YR7/2		
第51図-336	S02・床面	赤生土器	壺	13.0	19.0	-	-	0.5	0.65	7.5YR5/3	10YR5/3		
第51図-337	S02・床面	赤生土器	壺底部	-	16.8	6.0	-	0.36	0.7	10YR5/2	10YR5/2		
第51図-338	S02・床面	赤生土器	壺	-	16.2	7.6	-	0.36	1.6	7.5YR6/4	10YR5/3		



※ 法量測定基準

※ 器種分類の基準

- ・甕……口径部径及び胴部径がほぼ同じか、もしくは口径部の方が胴部に比べて大きい土器。
- ・壺……口径部径が胴部径よりも小さい土器。

3. その他の出土遺物

1) 石製品

・環状石器 (第52図1)

C-2区SK01床面より出土した直径126.0mm、厚さ42.0mmの環状石器である。欠損している半分はSK01では出土しなかった。凝灰岩系の石材を敲打することにより円形状に加工し、削りにより平らな面を成形し円盤状にしたものとみられる。中心は両側穿孔で貫通している。環状石斧の可能性も考えられるが、周囲を刃として加工していないため、凹み石の一種とみられる。

・砥石 (第52図2)

D-2区SX01の最下層から出土した現存最大長130.5mm、厚さ25.5mmの砥石である。石材は安山岩系である。中央部に製品を磨く際の凹みが確認できる。凹みがある面は加工することによって平らな面をしている。石材が軟質のため、製作最終工程の際に使用された砥石とみられる。

・敲き石 (第52図3～5)

敲打痕が確認できた石製品を敲き石とした。3はC-2区SP07から出土した現存最大長103.5mm、幅53.5mmの敲き石である。石材は砂岩系もしくは凝灰岩系の比較的軟質の石材である。全体に敲打もしくは擦痕が確認できる。敲打や削りにより成形したものと考えられる。4・5は両側に敲打痕がみられる凝灰岩系の敲き石である。3とは異なり、擦痕は確認できない。4は最大長96.5mm、幅49.0mm、5は最大長107.5mm、幅54.0mmで、4はC-2区SK01から、5はD-2区SX01から出土した。

・石刀 (第 52 図 6)

C-3 区表土掘削時に出土した石刀である。敲打により成形し、削り加工で最終成形を行っている。刃部は特に丁寧に擦っている。現存最大長 87.5mm、幅 34.5mm で、石材はやや硬質の砂岩系とみられ、表面には鉄分とみられる付着物がある。時期は縄文時代晩期の石刀とみられるが、表土からの出土ということもあり、明確にはわからない。

・有溝石製品 (第 53 図 7)

C-2 区包含層より出土した石製品である。現存最大長 62.5mm 現存最大幅 16.5mm、厚さ 14.5mm である。石材は蛇紋岩とみられ、両側より擦り切りを行っている。管玉等の製作過程のものともみられる。

・磨製石斧 (第 53 図 8 ~ 11)

いずれも小形の磨製石斧である。8 は C-2 区 SD08 出土で、現存最大長 40.5mm、現存最大幅 24.5mm 厚さ 15.5mm で、若干厚めの片刃磨製石斧である。9 は C-1 区表土からの出土で、最大長 47.5mm、最大幅 32.0mm、厚さ 5.0mm と薄めの片刃磨製石斧である。10 は 9 と同じく C-1 区表土からの出土で、現存最大長 30.0mm、現存最大幅 19.5mm、厚さ 5.0mm とかなり小形の磨製石斧である。刃部は欠損している。全面に擦痕がみられる。11 は D-1 区 SD14・15 出土で、現存最大長 27.0mm、現存最大幅 16.5mm、厚さ 11.0mm と 10 と同様、かなり小形の磨製石斧である。

・翡翠製石製品 (第 53 図 12)

D-1 区土器溜まりより出土した翡翠製の石製品である。グリーンタフのチップと混在して出土した。現存最大長 14.0mm、厚さ 4mm とかなり小さい。両面及び側面を加工し円盤状に成形している。2 連の穿孔がみられるが、片側からの穿孔部分は貫通していない。半分は欠損しているが、一端に切り込みがみられ、塊状石製品とみられる。

以上が石製品であるが、この他に翡翠の原石なども出土した。

2) 土製品

・土鍾 (第 53 図 13・14)

3 点の土鍾が出土し、比較的残りの良い物を図示した。13 は E-1 区 SP16 出土で、最大長 40.5mm、最大幅 32.5mm の寸胴な土鍾である。14 は C-2 区 SD08 出土で、最大長 40.5mm、最大幅 34.5mm の若干胴部が膨らむ土鍾である。

・不明土製品 (第 53 図 15)

C-2 区 SK01 の肩部より出土した不明土製品である。用途は不明である。

3) 木製品

・下駄 (第 53 図 16)

D-1 区の井戸状遺構などから箸や曲げ物の底板などが出土した。いずれも時期は中世以降の木製品とみられ、弥生時代に属する木製品は出土しなかった。

16 は C-1 区 SD07 ①の埋土から出土した下駄である。現存最大長 218.0mm、現存最大幅 82.0mm で材は広葉樹とみられる。差し歯は欠損しており、周囲からも出土しなかった。SD07 が埋積す

る際に混入した物と考えられる。

4) その他

・古銭 (第53図 17・18)

その他の遺物としては図示した「閉眼通寶」や「元佑通寶」などの古銭や、近世以降のキセルなどが出土した。

4. 特殊石製品 (第54図)

1) 出土状況

D-1区とD-2区にかかる自然河道もしくは谷部とみられる箇所肩部より出土した。谷部に対し断ち割りを入れ、層序の確認を行ったところ、基本的に第1層に表土・床土、第2層に粘土層、第3層に砂質層、第4層が黒褐色の粘土層、第5層が地山である。谷部の埋積土は基本的に砂質層の第3層である。(第13図) この石製品が出土した地点では、第3層に弥生時代後期から古墳時代前期の土器群 (第30図 72～81・第31図 87) が、また、この第3層直下、第4層より弥生時代後期の土器群 (第31図 82～86・88・89) が出土した。石製品は第4層の土器群とほぼ同じ位置とみられる谷の落ち際で出土した。石製品を取り上げる前に出土地点の周辺の遺構検出などを行ったが、他に関連するような遺物・遺構は検出しなかった。

2) 形状及び加工・施文

石製品の外見は、丸みを帯びた三角形に近い平面形で、一見すると二枚貝に似た形状となっている。類例が見あたらないため、仮に三角形の頂点を下方、割り抜かれた面を上とし、容器状の遺物として取り扱うことにした。

石材は広義の蛇紋岩であり、法量は縦13.8cm・横17.1cm・高さ7.0cm・最大厚1.9cm・最小厚0.8cm・重量918.7gである。

口縁部両側面には瘤状の突起が彫り出され、背面には幅2mm弱の凹線により、中央に縦の直線、左側には矢印、右側は三角形に似た文様が施されている。また、内外面ともに、口縁部付近には漆とみられる付着物が一部残存している。

成形方法としては、大まかな形を造り出し、全体を丁寧な研磨により成形したものであろう。表面には若干の敲打痕も観察できる。口縁部側面の瘤状突起や凹線などは、擦切技法を用いて施文したものとみられる。

加工具の識別は、肉眼観察では識別が困難であるが、凹線の観察から、幅約2mm弱の先端部が鋭利ではない加工具の使用痕が識別できる。加工具の素材については、硬度3前後の蛇紋岩より硬質な石英等の石材・鉄器・骨角器等が推定できる。いずれにせよ、全体の丁寧な仕上げや割り抜きも含め、加工には長時間を要したものと考えられる。

3) 年代

石製品そのものの年代に関しては、文様や形態等、縄文時代の遺物に類似する点が多い。しか

し、現在のところ類例が見あらず、遺物単独での時期比定は困難であることから、現時点では出土状況を重視し、遺物の埋没時期を推測することに留めたい。

出土状況については、①標高 1m 前後の沖積低地に位置する高島 A 遺跡の周辺では、これまで明確な縄文時代集落跡は確認されておらず、今回の調査でも、前身となる縄文時代の集落の存在は確認されていない。②出土地点の河道跡は遺構機能時も流れが緩やかで、重量のある石製品が流れ込んだとは考えられず、また、石製品の表面にも流れ込みの際に生じる磨耗がみられない。③出土層位は弥生時代後期に当たり、下部層の上限は弥生時代後期前半であり、上部層では無遺物間層堆積後に古墳時代の土器が投棄されている。

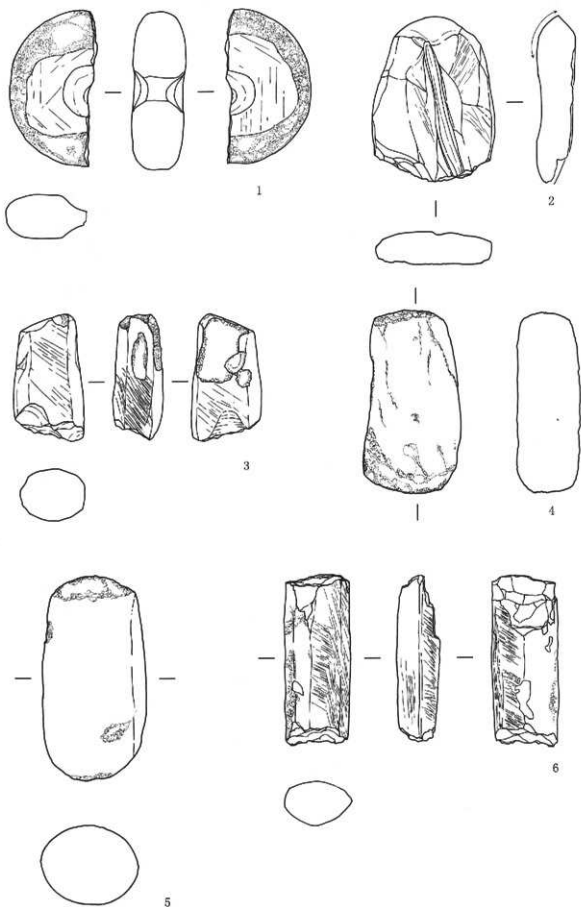
以上 3 点から、この石製品は、弥生時代後期前半から古墳時代前期以前に、出土地点の周囲から谷（河道）に投棄されたものと考えられる。

4) 考察

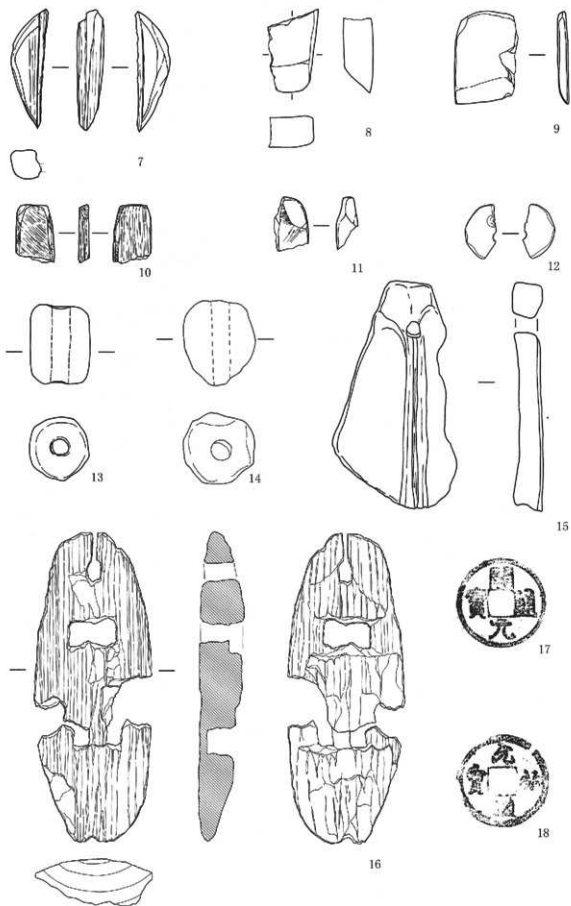
特殊石製品は、今回の調査での出土遺物の中で特異な雰囲気を感じ出している。蛇紋岩の加工技術自体は、縄文時代前期の玦状耳飾にみられるとおり、かなり古い時代から存在し、瘤状突起などの装飾は、東日本の縄文時代晩期の土器の文様にも類似している。しかし、蛇紋岩の塊を削り抜き成形するという技法は、現在のところ縄文時代の遺物にはみられない。その点から考えると古墳時代の中・後期にかけて東日本地域にみられる特徴的な石枕は、その一面に窪みを持たせるといった点では、比較の対象として挙げられよう。しかし、出土状況を重視すると、弥生時代後期に投棄された可能性が最も高いことは先述の通りである。

石製品は、その形状から容器として用いられたものと考えられる。特異な装飾などから、やはり祭祀的な側面についての検討を避けることはできないが、弥生時代の祭祀具とは、いわゆる農耕祭祀と総称される銅鏡・銅鐸を代表とする青銅器や武器形・鳥形等の木製品、これらを模した石製品・土製品等が主体となっている。従って、この石製品は一般的に知られる弥生時代の遺物の尺度からは、評価することが困難である。

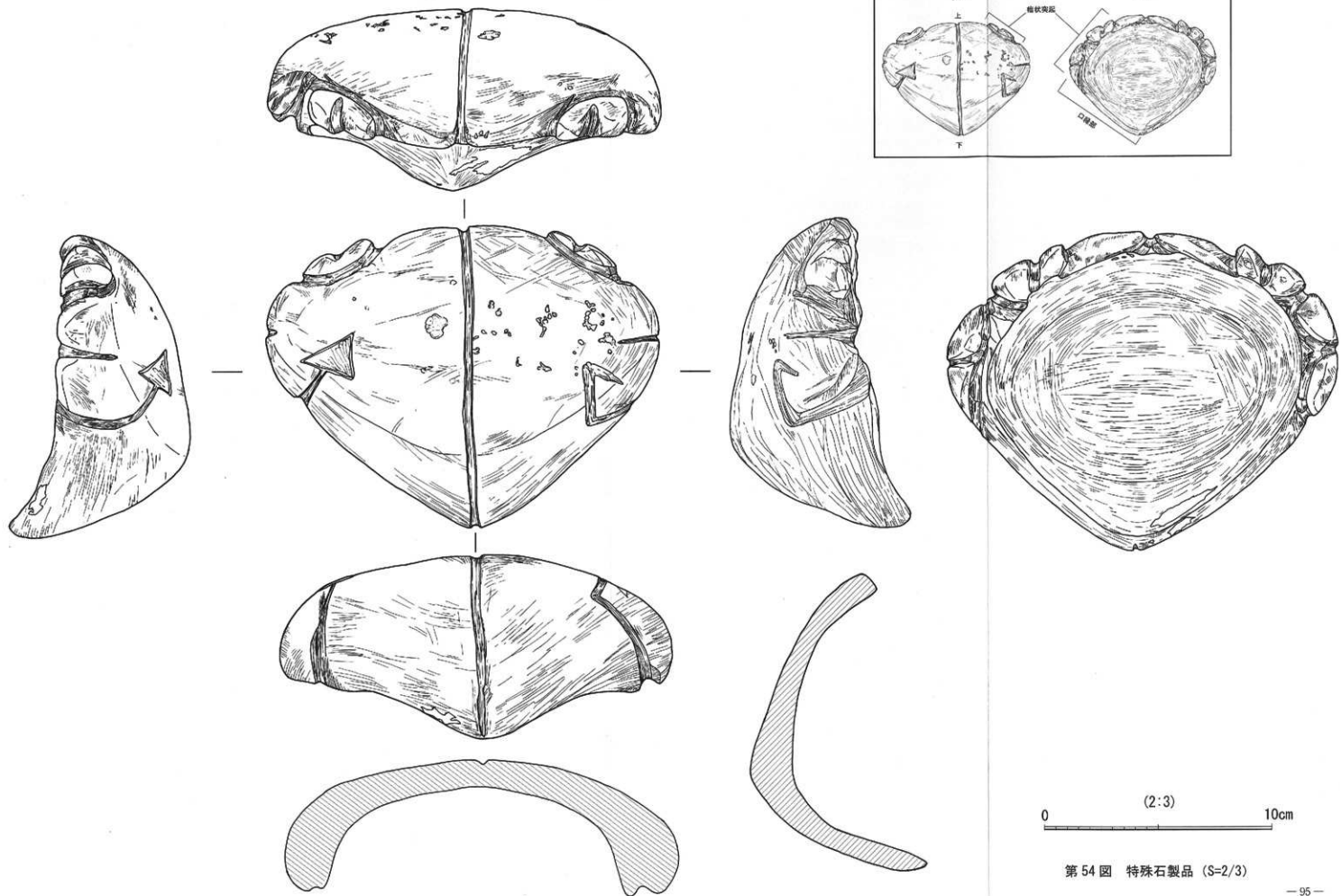
結論として、現時点では類例がないため、用途・性格を特定することはできない。ただ、鳥取県・青谷上寺池遺跡でも蛇紋岩製の異形石製品や銅鐸形石製品の出土が報告されており、特異な形状の蛇紋岩製品が弥生時代祭祀具の一角に存在する可能性を示唆している。今後の調査研究によって遺跡の性格とともに遺物の持つ意味を解明していきたい。



第 52 圖 石製品 (S=1/3)



第53圖 石製品・土製品・木製品・古銭 (7~11・13・14:S=1/3, 12・15・17・18:S=1/1, 16:S=1/4)



第 54 图 特殊石製品 (S=2/3)

V 理化学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高島A遺跡（富山県射水市鏡宮所在）は、射水平野の中央部に位置する。射水平野は縄文海進の最盛期には全域が海域であったが、海退と砂堤の形成により縄文時代後期～晩期には広範囲にわたり潟湖となる。その後は土砂の流入等により急速に潟が縮小していったと考えられている（藤井, 2000）。本遺跡では、弥生時代以降、遺物や遺構など人間活動の痕跡が認められることから、この時期にはすでに安定した微高地が形成されていたものと推定される。

今回は、1. ボーリング調査による遺跡内基本層序の確認、2. ボーリング試料を用いた弥生時代以前の古環境、3. 遺構埋積物を対象とした古環境、4. 石製品内容物、の4項目について調査する。また、調査手法として、手動によるボーリング調査、珪藻分析、花粉分析（イネ属同定含む）、植物珪酸体分析、微細物分析を用いる。

1. ボーリング調査

(1) 分析地点

調査地点は図55に示す6地点である。地形やトレンチ断面の結果を考慮し、遺物包含層が厚く堆積していると思われる、谷状地形の延長線上を中心に選定して実施する。

(2) 手法

ボーリングは、トーマス型サンプラーを用いて行った。この機材は、試料採取量が少なく（直径2cm）、試料が多少攪乱された状態で採取されるという欠点をもつが、砂質な堆積物においても手動で掘削が可能のため、今回の調査地域においては適すと判断した。現地にて採取した試料は、層相観察を行ったあと、分析用試料として5-10cm単位で分割・保存する。

(3) 結果

結果を図56に、試料の状態を図版1に示す。調査の結果、標高0m前後に青灰色の砂質シルト～砂層が分布し、これが基底となる。場所によっては灰色～褐灰色となるが、これは地下水位の影響等で酸化を受けているためと思われる。ただし、3地点や4地点では、地山の標高が他の地点に比べて50cm高い。その上には遺物包含層となる土壌化した暗灰～黒灰色の粘土質層が堆積する。ただし、2地点は中世以降の溝の延長線上にある点や、土質などから中世の溝の覆土にあたると思われる。また5地点は断面で確認された谷状遺構の延長線上にあるため、覆土に相当する粘土層が厚く堆積する。標高1m前後には、現在の「耕作土」が30cm前後の厚さでみられる。過去の発掘調査所見によれば、調査地点の標高は0.9-1.3mと平坦で、標高差はほとんどない。遺構確認面までの深度は浅く、ほ場整備や現在の耕作によって遺物包含層が削平されるなどの影響を受けている。基本層序はI層（現耕作土）、II層（中世遺構確認面 黄褐色粘土など）、III層（弥生時代～古代遺物包含層 黒色粘土など）、IV層（弥生時代～中世遺構確認面 黄灰色粘土など）、V層（灰黄色粘土 地山）となる（新潟市教育委員会, 2002）。今回のボーリング調

査結果と比較すると、地山の青灰色砂層はV層より下位に相当し、黒灰～褐灰色粘土がIII層に、現耕土がI層にあたると思われる。

2. 分析試料

弥生時代の遺構が構築される以前の古環境を把握するために、5地点で行ったボーリング試料を用いる。珪藻分析3点(試料番号2、3、6)、花粉分析1点(試料番号3)をそれぞれ実施する。これらは遺構との層位関係から、弥生時代中・後期以前と思われるが、弥生時代から極端にさかのぼることはないと推測される。

また、遺構が構築された弥生時代中期～古墳時代の古環境を推定する目的で、遺構覆土を対象とした調査を実施する。C-1区SX03では珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析各1点(試料番号6)を分析する。D-2区SX01では珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析を各1点(上層)分析する。D-1区流路では珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析を各1点(試料番号4)分析する。E-4区SD01では珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を各1点(試料番号A-A';1)分析する。E-4区SD04では珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を各1点(試料番号A-A';2)分析する。石製品内容物の検討は、遺物上面の覆土1点を分析する。なお、花粉分析に関しては、イネ属同定も併せて実施する。

3. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、KrAmmer(1992)、KrAmmer & Lange-BertAlot(1986, 1988, 1991A, 1991b)などを参照した。

同定結果は、海水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性が異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境を解析するにあたって、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性はAsAi & WAtAnAbe(1995)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による

有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Tax）について同定・計数する。結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

なお、イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚の状況・粒径などを考慮して、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類した。

(3) 植物珪酸体分析

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検出しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(4) 微細物分析

SX01 上層 (200cc)、石製品内容物 (150cc)、D-1 流路の 4 層 (50cc) の各試料を水に一晩浸した後、0.5mm 目の篩を通して水洗し、残渣を粒径別にシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や木材、炭化材を抽出する。種実遺体の形態的特徴を、所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川, 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか, 2000）等と比較し、種類を同定し個数を求める。炭化材、不明炭化物、高師小僧は、70℃ 48 時間乾燥後の重量を求める。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れ、70% 程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

4. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 3、図 57 に示す。また、珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表 4 に示す。5 地点の試料番号 2、SD01、SD04 の各試料では珪藻化石の産出が少なかったが、それ以外の 5 試

料からは比較的多く産出する。また、完形殻の出現率は、50%以下の試料が多い。産出分類群数は、合計で46属112分類群である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

ポーリング試料の5地点では、珪藻化石が産出した試料番号3と6では群集が異なる。試料番号3は、水生珪藻が約60%と多産し、これに次いで陸生珪藻が約30%、淡水生種～汽水生種が約10%産出する。主な産出種は、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Synedra ulna*、陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群でもある *Eunotia praerupta* var. *bidens*、それに陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia Amphioxys* である。試料番号6は、多産するものではなく、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*、好流水性の *Caloneis bacillum*, *Placoneis elginensis* var. *neglecta*, *Pinnularia mesolepta*, *Placoneis elginensis*、それに陸生珪藻B群の *Pinnularia subcapitata* が産出する。なお、珪藻化石の少なかった試料番号2は、第三紀絶滅種を含む海水生種、水生珪藻、陸生珪藻等が少量産出したのみである。

C-1区SX03は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が約70%、陸生珪藻が約30%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩嫌塩性種、真+好酸性種、流水不定性種が多産する。主な産出種は、流水性で中～下流性河川指標種群の *Meridion circulare* var. *constrictum*、流水不定性で好酸性の *Eunotia bilunaris*、*Eunotia minor* var. *minor*、*Eunotia* cf. *subarcuatoidea*、陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群でもある *Eunotia praerupta* var. *bidens* である。このうち、*Eunotia minor* var. *minor* は、沼沢湿地付着生種群でもある。

D-2区SX01の上層は、水生珪藻が約85%と優占する。淡水性種の生態性は、貧塩不定性種と貧塩嫌塩性種、pH不定性種、流水不定性種と真+好止水性種が多産する。主要種は、貧塩嫌塩性で好止水性の *Fragilaria bicapitata* が約30%と優占し、好流水性の *Gomphonema cf. helveticum*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、沼沢湿地付着生種群の *Eunotia minor* var. *minor* が約10%産出する。これに次いで沼沢湿地付着生種群の *Eunotia incisa* を伴う。

D-1区流路の試料番号4は、水生珪藻が約60%、第三紀絶滅種を含む海水生種が約20%、陸生珪藻が約15%産出する。多産するものではなく、海水浄遊性の *Thalassionema nitzschioides*、第三紀絶滅種の *Actinocyclus ingens*、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*、流水性で中～下流性河川指標種群の *Meridion circulare* var. *constrictum*、*Rhoicosphenia abbreviata*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Eunotia minor* var. *minor*、それに陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群でもある *Eunotia praerupta* var. *bidens* 等が産出する。

E-4区のSD01とSD04は、珪藻化石の産出が少ない。保存の悪い水生珪藻、沼沢湿地付着生種群、および第三紀絶滅種を含む海水生種が少量産出したのみである。

(2) 花粉分析・イネ属同定

結果を表5、図58に示す。全ての試料から比較的多くの花粉化石が検出されるが、保存状態は悪い。また草本花粉と木本花粉の割合は、ほぼ同率もしくは草本花粉の方が高い。

木本花粉をみると、全体的にスギ属とハンノキ属の割合が高い。この中でもスギ属は5地点の試料番号3で高く、ハンノキ属はE4区SD04と5地点の試料番号3で低い。その他、マツ属、ブナ属、コナラ亜属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などがみられる。

草本花粉をみると、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の割合が高い。この中でもE4区SD04では、ヨモギ属の割合が特に高い。その他、ガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、サンショウモなど水生植物の花粉化石も少量みられる。

イネ属花粉は、5地点の試料番号3を除く試料から検出される。イネ科全体に対するイネ属の割合は3%~60%以上とばらつきが見られる。特にE-4のSD01で多産するが、これは植物珪酸体分析の結果と調和的である。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表6、図59に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

C-1区のSD07ではヨシ属の産出が顕著に目立ち、クマザサ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。D-1区の流路では、検出量が少なく、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族などがわずかに認められるに過ぎない。D-1区のSX01ではヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。また、栽培植物であるイネ属も認められる。この中には、初稔に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列といった珪化組織片も見られる。E4区のSD01とSD04では、いずれもヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属などが検出される。この中でもSD01ではイネ属の産出がめだち、短細胞列も見られる。

(4) 微細物分析

結果を表5に示す。D-1区SX01からは、草本4分類群(オモダカ科、イネ、カヤツリグサ科、イボクサ)118個の種実が検出され、栽培植物のイネの胚乳が3個、穎が110個確認された。その他に、木材、炭化材、木材組織が認められない種類、部位共に不明の炭化物、昆虫、高師小僧(褐鉄鉱)、土器などが確認された。一方、D-1区流路や、石製品の覆土からは、同定可能な種実の検出は認められなかった。検出された種実の遺存状態は、栽培植物のイネが炭化している以外は、比較的良好である。以下に、同定された種実の形態的特徴などを記す。

・オモダカ科 (AlismAtAceAe)

種子が検出された。淡褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1.5mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ (OryzA sActivA L.) イネ科イネ属

胚乳と穎(果)が検出された。炭化しており黒色を呈す。長楕円形でやや偏平。長さ4.5~6.5mm、幅2~3mm、厚さ1.5mm程度。胚乳は一端に胚が脱落した凹部があり、表面はやや平滑で、2~3本の縦溝がみられる。表面に穎が付着している個体が1個みられた。穎は基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。黒褐色、三稜状倒卵体。長さ 2.7mm、径 1.8mm 程度。頂部の柱頭部分はやや伸び、断面は三角形。基部は切形で基部から伸びる逆刺のある髯状の腕が残る個体もみられる。果皮はやや厚く、表面には微細な網目模様がある。

・イボクサ (Aneilema keiskei Hassk.) ツノクサ科イボクサ属

種子が検出された。淡灰褐色、半横長楕円形。径 2.2mm 程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

5. 考察

(1) 弥生時代以前の古環境

5地点で行った珪藻分析の結果、試料番号 3、6 で珪藻化石が多く産出する。下位の試料番号 6 は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、流水性種を伴うことから、流水の影響のある沼沢湿地のような堆積環境が示唆される。一方試料番号 3 は化石の保存が極めて悪く、複数の生態性を示す種類が混在し、殻が丈夫で化石として残りやすい種類が多産する。このことから、検出された化石は河川の氾濫によってもたらされた二次的なもので、当時の堆積環境を反映しているとはいえない。本遺跡の立地からすると、かつては氾濫や湿地化など、河川の影響を顕著に受けるような状況であったと推測される。その後、流路変更などによって微高地が形成されると水の影響が少なくなり、人が生活できる環境へと変化したと考えられる。5地点における珪藻化石群集は、このような徐々に離水していく過程を表しているといえる。また、遺物包含層や遺構覆土は、かつての氾濫堆積物が母材となり、これらが土壌化したり再堆積したりして形成されており、これらの母材となった堆積物の群集を反映しているともいえる。

縄文時代の射水平野に分布する遺跡や十二潟で行われた花粉分析結果 (安田, 1982A, b; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 1999; 山崎, 1999 など) をみると、ハンノキ属をはじめとした低湿地林を形成する種類が多産する。また、弥生時代以降草本類の割合が急増する傾向が認められるが、これは水田など低地の開発に伴い、低地林が切りひらかれ、草地が増加したためと考えられている。今回の花粉分析結果では、弥生時代以前とされる 5地点の試料番号 3 において、すでに草本類が多産する傾向がみられる。このことから、5地点の堆積物は弥生時代頃と考えられ、検出されている遺構の時代観と大きな差はないと考えられる。したがって、5地点の花粉分析結果は、遺構覆土の結果と併せて次項で検討することにする。このように、5地点の堆積物と遺構覆土との花粉化石群集は類似するが、イネ風花粉が検出されないなどの違いがみられ、これが遺構の時代観よりもやや古いことを反映していると思われる。

(2) 遺構の埋積過程

C-1 区 SX03 の珪藻化石群集は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種を伴う。また、陸生珪藻 B 群の *Eunotia praerupta* var. *bidens*

も多産するが、他に陸生珪藻を多く伴わないこと、沼沢湿地付着生種群でもあることから、湿地を指標していると思われる。これらのことから、流水の影響を受ける沼沢地のような湿潤な堆積環境であったと推測される。

D-2区SX01の珪藻化石群集は、好止水性のFrAgilAriA bicApitAtAが多産し、沼沢湿地付着生種群を多産する流水不定性種や流水性種を少量伴っていた。このことから、当時ある程度水深がある水域が存在していたと推測され、SX01が井戸と考えられていることと調和的である。ただし、本遺跡周辺は地下水位が高いので、廃絶後にある程度埋積が進んでも、水溜まりのような状態が維持されたと考えられることから、必ずしもこれが機能時の状態を反映しているとはいえない。

D-1区の流路の珪藻化石群集は、第三紀絶滅種を含む海水生種や中～下流性河川指標種群を含む流水性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種など様々な堆積環境を示す珪藻化石が産出する。また、化石の保存状態も悪かった。このことから、流路の埋積物には生育環境の異なる珪藻化石が二次的に混入したと考えられ、流路内の水域環境を反映していると言ひ難い。前項でも述べたように、遺構内の覆土は、地山である氾濫堆積物が二次的に堆積したものと考えられることから、母材の影響を強くうけているものと思われる。

E-4区のSD01とSD04からは珪藻化石の産出が少なく、珪藻化石群集から堆積環境について検討することは困難である。ただし、種類構成をみると、D-1区の流路のように、様々な生態性をもつ珪藻が混在していることから、地山である氾濫堆積物が二次的に堆積したものと考えられ、母材となった堆積物の影響を強くうけているものと思われる。

(3) 弥生時代頃の古植生

木本類の花粉組成をみると、先述した過去の事例と同様にハンノキ属やスギ属が多産しており、本遺跡周辺にはハンノキやスギの湿地林が分布していたと考えられる。なお、スギは現在では山間部にその分布が限られているが、富山県入善町には低地にスギの天然林が存在しており、富山県魚津市の海底からはスギの埋没林が検出されている。また、北陸地方の各遺跡からはスギの木製品や自然木が多数検出されていることから、かつては低地にスギが多く生育していたと考えられている(鈴木, 2002など)。また、マツ属、ブナ属、コナラ亜属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属の種類は、丘陵上や丘陵縁部などを中心に生育していたと思われる。

一方草本花粉をみると、イネ科をはじめ、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科、キク亜科等開けた草地を好むものが多い。また、オモダカ属、ガマ属、ミズアオイ属、イボクサ属、コオホネ属、サンショウモ等水生植物の花粉化石も検出される。その他、植物珪酸体からはヨシ属が、種実遺体からはオモダカ属やイボクサといった水生植物が検出される。このことから、本遺跡周辺で当時開発が進んだ地域では、草地が中心であったと推測される。特に、検出される水生植物は水田雑草として普通にみられる種類であることから(現在は農業の影響で激減している)、水田開発に伴って生じた草地を中心に生育していたと思われる。

栽培植物であるイネ(属)は、種実遺体、植物珪酸体、花粉化石で検出されるが、特にSX01

では多量の炭化した穎の破片が検出される。SX01からは、穎に由来する植物珪酸体も検出されるが、これも多産する穎の破片の一部とみられる。これらは当時の残渣が遺構内に投棄されたものと考えられる。さらに、イネ属の花粉化石や植物珪酸体は、割合の差はあるがほとんどの遺構から検出されており、当時の栽培・利用が示唆される。分析対象とした遺構の中でも、SD01はイネ属花粉、イネ属植物珪酸体ともに高率であることから、水田に伴う水利施設であったか、もしくは水田域から導水されていたことが推測される。しかし、現在の水田に関するイネ属花粉の調査(中村, 1980)や、水田遺構におけるイネ属植物珪酸体の分布(辻本・田中, 2000)等を見ると、いずれも同一層位における組成のばらつきが大きいのが特徴である。したがって、1点の試料を対象とした分析では断定することは難しく、平面的に複数分析し傾向を捉えるなどの調査が今後望まれる。

(4) 石製品内容物の検討

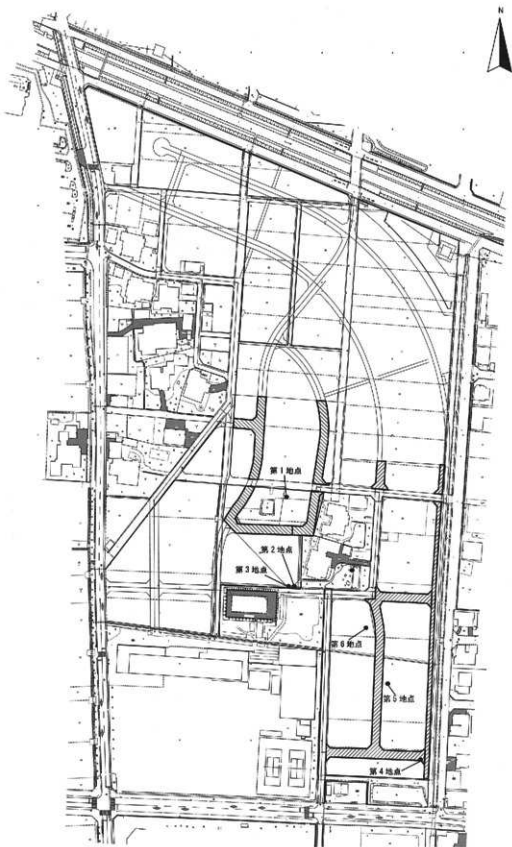
本分析では塗膜片が検出されることが想定されたため、分析中に頻りに確認し、また洗い出し作業も通常より振動や水流を押さえるなどして注意深く抽出を試みた。しかし、覆土中からは炭化材が微量検出されたのみであり、塗膜片などは検出されなかった。

引用文献

- ・安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- ・Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistical Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and Saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- ・藤井 昭二, 2000, 大地の記憶—富山の自然史, 桂書房, 197p.
- ・原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- ・伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- ・石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- ・小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- ・近藤 錬三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドログスト, 48, 46-64.
- ・Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- ・Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- ・Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav

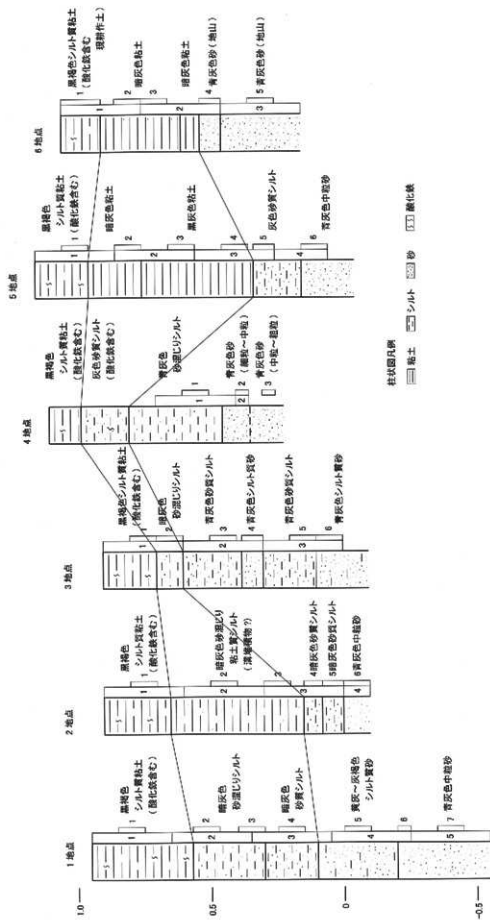
Fischer Verlag, 536p.

- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991A, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthesaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 考古学・美術史の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 日本学術振興会, 185-204.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 布目沢東遺跡自然科学分析報告. 大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1) 一布目沢東遺跡・布目沢西遺跡一, 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会, 81-118.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1999, 下村加茂遺跡の古環境復元. 富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告. 下村教育委員会, 55-62
- 鈴木三男, 2002, 日本人と木の文化. 八坂書房, 255p.
- 新湊市教育委員会, 2002, 富山市新湊市 市内遺跡試掘調査報告. 新湊市鏡宮地区土地区画整理事業に伴う高島A遺跡試掘調査, 新湊市教育委員会, 1-50.
- 辻本 崇夫・田中 義文, 2000, 川田条里遺跡 D2 地区第6水田面の微化石分析. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 47, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10 長野市内その8 川田条里遺跡 第3分冊(自然科学 総論編), 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター, 152-157.
- Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D., 2000, Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G. Gantner Verlag K.G., 881p
- 山崎 雅恵, 1999, 下村加茂遺跡泥土の花粉分析. 富山県射水郡下村加茂遺跡発掘調査報告. 下村教育委員会, 63-67
- 安田 喜憲, 1982A, 花粉分析. 大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡 一県道改修工事に伴う調査一, 大門町教育委員会, 48-62.
- 安田 喜憲, 1982b, 花粉分析からみた富山湾沿岸の縄文前期の遺跡 一ナラ林文化と環日本海文化圏一. 大門町埋蔵文化財報告第5集 小泉遺跡 一県道改修工事に伴う調査一, 大門町教育委員会, 99-108.

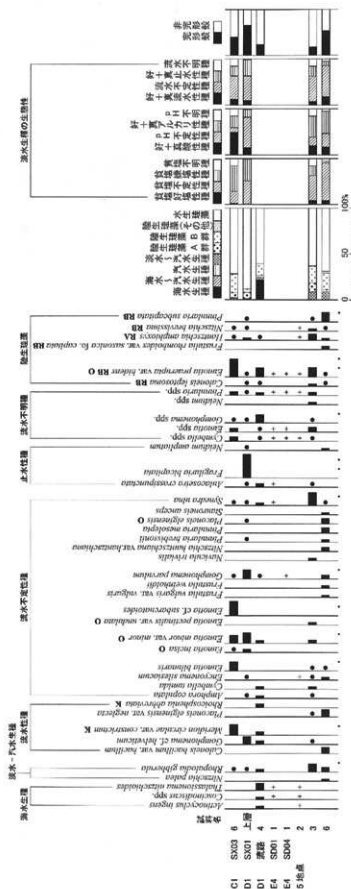


第55図 ボーリング調査地点

標高 (m)



第 56 図 ボーリング調査地点の柱状図



淡水・汽水・汽水性植物化石、毛葉植物化石、平葉植物化石は全断面、淡水生物化石の出現率は淡水生物化石の割合を全断面から算出された百分率で算出した。いずれも100個体以上の検出された区間について、なお、●は24%未満、○は100個体未満の区間について検出した区間を示す。

環境地層階級

K 中一ノ下泥岩河川階級、○ 沼澤階級(淡水性)、(汽水性)、(汽水性)

R 陸生階級(0-0.5m, 0.5-1.0m, 1.0-1.5m, 1.5-2.0m, 2.0-2.5m, 2.5-3.0m, 3.0-3.5m, 3.5-4.0m, 4.0-4.5m, 4.5-5.0m)

第57図 主要珪藻化石群の層位分布

表 3. 硅藻分析結果①

種 名	生態性			環境	G1 SX03	D1 SX01	D1 SX02	E4 S01	E4 S04	採集点			
	塩分	pH	水深							1	2	3	6
<i>Actinocyclus ingens</i> Ratzky	Esh	-	-		-	-	3	-	1	-	-	-	
<i>Actinocyclus senarius</i> (Ehr.) Ehrenberg	Esh	-	-	A	-	-	1	-	-	1	-	-	
<i>Biddulphia</i> spp.	Esh	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Coscinodiscus marginatus</i> Ehrenberg	Esh	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Coscinodiscus</i> spp.	Esh	-	-		-	-	3	-	-	2	-	-	
<i>Gyrodinium aureolum</i> Grun.	Esh	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Paralella sulcata</i> (Ehr.) Cleve	Esh	-	-	B	-	-	2	-	-	-	-	-	
<i>Stephanopyxis</i> spp.	Esh	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Synedra joussaei</i> Schestakova	Esh	-	-		-	-	-	1	-	1	-	-	
<i>Thalassiosira nikrazovae</i> (Grun.) Grunow	Esh	-	-	AB	-	-	6	4	-	3	-	-	
<i>Thalassiosira</i> spp.	Esh	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Thalassiosira</i> spp.	Esh	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Thalassiosira</i> spp.	Esh	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Thalassiosira</i> spp.	Esh	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula grandis</i> Dorkin	Ogh-Men	sh-I	ind	U	-	-	-	-	-	-	2	1	
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Men	sh-I	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) Wisnitsch	Ogh-Men	sh-I	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	3	
<i>Plagiodium glaberrimum</i> (Ehr.) Müller	Ogh-Men	sh-I	ind	S	3	3	3	-	-	-	10	7	
<i>Actinocyclus granulatus</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Actinocyclus senarius</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Actinocyclus senarius</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Actinocyclus senarius</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Amphora opulenta</i> (Kuetz.) Schoeman et R.E.M. Arnhöfeld	Ogh-ind	sh-I	ind	T	-	-	3	-	-	-	1	-	
<i>Amphora montana</i> Krauss	Ogh-ind	sh-I	ind	RAU	-	4	-	-	-	-	-	-	
<i>Amphora normani</i> Røberfjord	Ogh-ind	sh-I	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Actinocyclus granulatus</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	1	4	1	-	-	-	-	1	
<i>Actinocyclus granulatus</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Actinocyclus granulatus</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Actinocyclus granulatus</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Coloneis lacillum</i> (Grun.) Cleve var. <i>lacillum</i>	Ogh-ind	sh-I	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	6	
<i>Coloneis leuta</i> Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	sh-I	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Coloneis leptomacrum</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	sh-I	ind	RB	-	-	2	-	-	-	3	2	
<i>Coloneis sulcata</i> (Ehr.) Cleve var. <i>sulcata</i>	Ogh-ind	sh-I	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Coloneis</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Cocconeis egyptia</i> Ehrenberg	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Cocconeis leueta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Cocconeis placentula</i> Ehr. var. <i>placentula</i>	Ogh-ind	sh-I	ind	U	1	2	2	-	-	-	-	-	
<i>Cocconeis</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Cricatula cuspidata</i> (Kuetz.) G.Mann	Ogh-ind	sh-I	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Cricatula</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	sh-I	ind	U	-	-	2	-	-	-	-	-	
<i>Cymbella subaequalis</i> Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Cymbella tumida</i> (Ehr.) Van Heurck	Ogh-ind	sh-I	ind	T	-	-	3	-	-	-	3	-	
<i>Cymbella turbida</i> Grunow	Ogh-ind	sh-I	r-ph	KT	-	-	-	-	-	-	1	2	
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	5	-	1	1	1	1	-	-	
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	-	4	-	-	-	-	-	-	
<i>Dactinocyclus senarius</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	ind	RA, T	2	2	-	-	-	-	1	-	
<i>Diatoma tenuis</i> Agardh	Ogh-ind	sh-I	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Enaymonia aleutica</i> (Beise) G.Mann	Ogh-ind	sh-I	ind	T	-	2	-	-	-	1	2	4	
<i>Epithemia adriata</i> (Kuetz.) Robinson	Ogh-ind	sh-I	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Eunotia bicarinata</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-hab	sh-I	ind	U	10	-	-	-	-	-	1	2	
<i>Eunotia leueta</i> Ehrenberg	Ogh-hab	sh-I	ind	O	-	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Eunotia imbricata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hab	sh-I	ind	O	1	-	2	-	-	-	2	-	
<i>Eunotia inesa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hab	sh-I	ind	O	1	7	-	-	-	-	-	-	
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow var. <i>minor</i>	Ogh-hab	sh-I	ind	O, T	9	23	3	-	-	-	4	-	
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>astatica</i> Swartzow	Ogh-hab	sh-I	ind	O	-	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Eunotia pectinata</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs.) Røberfjord	Ogh-hab	sh-I	ind	O	-	-	-	-	-	-	3	-	
<i>Eunotia praenotata</i> Ehrenberg	Ogh-hab	sh-I	r-ph	RB, O, T	-	-	2	-	-	-	2	-	
<i>Eunotia praenotata</i> var. <i>bifida</i> Grunow	Ogh-hab	sh-I	r-ph	RB, O	20	1	10	3	3	2	12	1	
<i>Eunotia cf. subaequalis</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hab	sh-I	ind	U	16	-	-	-	-	-	12	-	
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	4	-	1	1	1	-	6	-	
<i>Fraxillaria decipitula</i> A.Meyer	Ogh-hab	sh-I	ind	KT	-	32	-	-	-	-	-	-	
<i>Fraxillaria vancouverensis</i> (Pantzen) var. <i>vancouverensis</i>	Ogh-hab	sh-I	ind	KT	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Fraxillaria eque</i> (Grun.) M. Williams & Round	Ogh-hab	sh-I	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>saevicula</i> f. <i>capitata</i> (A.Meyer) Hustad	Ogh-unik	sh-I	ind	RB	-	-	-	-	-	-	5	-	
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni var. <i>vulgaris</i>	Ogh-ind	sh-I	ind	U	-	-	-	-	-	-	3	-	
<i>Frustulia wuolaki</i> Hustad	Ogh-ind	sh-I	ind	U	-	-	-	-	-	-	4	-	
<i>Gomphonema olivaceoides</i> (Hantzsch) J.R. Carter et Bailey-Watts	Ogh-ind	sh-I	r-ph	KT	-	-	1	-	-	-	2	-	
<i>Gomphonema sculpturatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	sh-I	r-ph	O	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Røberfjord	Ogh-ind	sh-I	ind	U	-	-	2	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	sh-I	r-ph	O, J	1	2	-	-	-	-	-	1	
<i>Gomphonema cf. helveticum</i> Brun	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	17	4	-	-	-	2	-	
<i>Gomphonema inaequalatum</i> (H.Kobayashi) H.Kobayashi	Ogh-ind	sh-I	r-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	sh-I	ind	U	1	20	1	-	-	-	6	-	
<i>Gomphonema purpureum</i> (Grun.) Hustad et Lange-Bertalot	Ogh-ind	sh-I	ind	U	-	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	sh-I	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Gomphonema vestium</i> Hustad	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Gomphonema viberu</i> Ehrenberg	Ogh-ind	sh-I	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unik	sh-I	unik	unik	1	1	5	-	-	-	1	-	
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	sh-I	ind	RAU	2	5	1	-	-	1	8	3	
<i>Leptocaulis nodosa</i> (Kuetz.) G.Mann	Ogh-ind	sh-I	ind	RA, S	2	1	1	-	-	-	1	-	
<i>Micidocleis confusa</i> Agardh var. <i>confusa</i>	Ogh-ind	sh-I	ind	KU	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Meridion circulare</i> var. <i>convictum</i> (Ralfs.) Van Heurck	Ogh-ind	sh-I	ind	KT	12	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula arenata</i> Okun	Ogh-ind	sh-I	ind	U	1	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula placenta</i> f. <i>obtusata</i> Meister	Ogh-ind	sh-I	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-	

表3. 珪藻分析結果②

種 類	生態性		珪藻 指標種	O1 SX03 6	D1 SX01 上層 4	D1 波路 4	E4 SD01 1	E4 SD04 1	5地点			
	塩分	pH							淡水	2	3	6
<i>Navicula pseudolepta</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula trilineata</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Navicula spp.</i>	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	1	-	-	2
<i>Neidum amplatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	-gh	-	1	-	-	-	-	-	-	3
<i>Neidum apiculatum</i> Rameer	Ogh-hob	ao-l	-gh	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Neidum vidua</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ao-l	-bi	O	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Neidum spp.</i>	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Nitzschia brevicauda</i> Grunow	Ogh-ind	al-l	ind	RB.U	1	1	-	-	1	3	1	-
<i>Nitzschia frankiana</i> (Kuetz.) Grunow var. <i>frankiana</i>	Ogh-ind	al-l	-gh	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia hantzschiana</i> (Kuetz.) Grunow var. <i>hantzschiana</i>	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	6
<i>Nitzschia paleacea</i> (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia penninata</i> (Grun.)Pirajallo	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia solgmaisi</i> Cleve-Euler	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrochaeta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-l	-gh	O	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia brevistriata</i> (Grun.)Mills	Ogh-hob	ao-l	-gh	P	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevisseria</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	4
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ao-l	-gh	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>depressiora</i> (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ao-l	ind	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ao-l	ind	O.U	-	2	-	-	-	1	1	-
<i>Pinnularia intermedia</i> W.Smith	Ogh-ind	ao-l	ind	S	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia modesta</i> Ehr. W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	6
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ao-l	-gh	O	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Pinnularia obscura</i> Kraske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia sibirica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Pinnularia similis</i> Hustadt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	4
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ao-l	ind	RB.S	-	4	-	-	-	-	1	14
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>caudistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ao-l	ind	O.U	-	1	-	-	-	-	-	2
<i>Pinnularia submontana</i> Hustadt	Ogh-hob	ao-l	-gh	U	-	-	-	-	-	-	1	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nett.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia spp.</i>	Ogh-unk	unk	unk	4	1	3	5	1	3	4	-	-
<i>Pleconis alpinensis</i> (Grag.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-l	ind	O.U	-	4	-	-	-	-	-	8
<i>Pleconis alpinensis</i> var. <i>neglecta</i> (Kraske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-l	-gh	U	-	-	-	-	-	1	11	
<i>Rosetta striata</i> (W.Grag.)Kocourek et. Stoeber	Ogh-ind	ind	-gh	KT	-	1	-	-	-	-	-	1
<i>Rhaphoclema abbreviata</i> (C.)Agardh-Lange-B.	Ogh-hl	al-l	-gh	KT	-	-	4	-	-	-	-	-
<i>Sellophora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nett.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	-gh	O	-	1	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>hattorii</i> Tsunura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	-	-	-	1	-
<i>Stauroneis spp.</i>	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis contractus</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Kuetz	Ogh-ind	al-l	-gh	S	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Surlirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-l	-hl	U	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-l	ind	U	1	3	3	1	-	-	16	1
<i>Tabellaria foeniculosa</i> (Reith)Kuetzing	Ogh-hob	ao-l	-hl	T	-	1	1	-	-	-	-	-
海水生種				0	0	22	8	0	9	0	0	0
汽水-汽水生種				0	0	0	0	0	1	0	0	0
汽水生種				0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水-汽水生種				2	2	3	0	0	0	0	10	12
淡水生種				101	201	77	18	7	14	104	123	123
珪藻化石種数				133	263	102	26	7	24	114	135	135

凡例

HL:塩分濃度に対する適応性

Euh:海水生種

Euh-Meh:海水生種-汽水生種

Ogh-Meh:汽水-汽水生種

Ogh-H:珪藻好塩性種

Ogh-ind:珪藻不定性種

Ogh-hob:珪藻好淡水性種

Ogh-unk:珪藻不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性

al-l:真アルカリ性種

al-l:弱アルカリ性種

ind: pH 不定性種

ao-l:好酸性種

al-h:真酸性種

unk: pH 不明種

OR:汽水に対する適応性

l-h:真止水性種

l-h:弱止水性種

ind:汽水不定性種

r-ph:好淡水性種

r-bi:真淡水性種

unk:汽水不明種

環境指標種群

A:外洋指標種, B:内海指標種(小杉, 1988)

K中~下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, O:沼沢地付着性種(安藤, 1990)

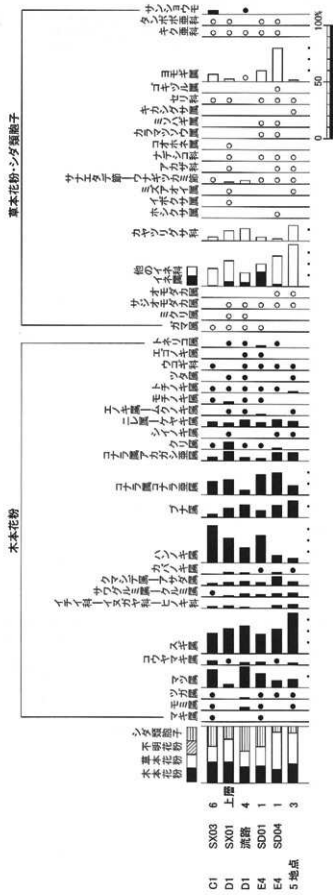
S:好汚濁性種, U:珪藻好塩性種, T:好汽水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)

R:珪藻塩度 (RA:A群, RB:B群, RC:水区分, 伊藤-堀内, 1991)

表 4. 建礫化石の生態区分および環境指標群

		塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0~0.5%に生育する種
淡水生種	真淡水性種(淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
淡水生種の生態区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに耐えることができる種
	真塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広塩塩性種	淡水~汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH Hustedt(1937-38)による	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水 Hustedt(1937-38)による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群(小杉,1988)による)	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35%の外洋水中で浮遊生活するもの
内海指標種群(B)	塩分濃度35~28%の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻類指標種群(G1)	塩分濃度35~12%の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻類指標種群(G2)	塩分濃度12~4%の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35~28%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26~9%の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30~12%の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12~2%の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2%以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2%以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20~2%の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群(安藤,1990)による)	
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中~下流性河川指標種群(K)	河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、礫状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流部河川指標種群(L)	最下流部の三角洲の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢地付着種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の強い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層温泉指標種群(P)	ミズケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の濡り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991)による)	
陸生建礫A群(RA)	陸生建礫の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生建礫B群(RB)	陸生建礫A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群
水区分陸生建礫(RC)	陸生建礫に相当すると考えられるが、乾燥に対する適応性の不明なもの

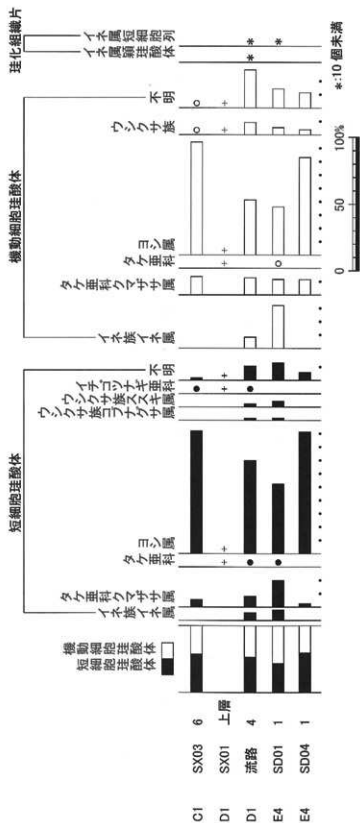


出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満を示す。

第58図 花粉化石群集層位分布

表 5. 花粉分析・イネ属同定結果

種 類	紙料番号	SK03	SK01	混粉	SD01	SD04	3
		6	上製	4	1	1	
木本花粉							
マキ属		2	-	-	1	-	-
モミ属		1	-	8	1	-	1
ツガ属		1	-	4	2	1	2
トウヒ属		-	-	1	-	-	-
マツ属(常緑葉実産区)		-	-	5	-	-	-
マツ属(常緑葉実産区)		1	2	12	7	5	14
マツ属(落葉不明)		33	5	34	21	9	9
コウヤマキ属		8	2	6	6	1	8
スギ属		38	53	68	39	50	114
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		3	5	3	-	6	11
サウヅル属		-	-	-	-	1	1
クルミ属		2	3	6	5	8	10
クマシチ属-アサダ属		4	7	10	9	15	11
ハシノキ属		-	-	-	1	1	-
カバネキ属		-	4	4	2	4	3
ハンノキ属		70	53	37	53	15	13
ブナ属		8	20	31	14	25	47
コナラ属コナラ属		25	32	12	41	45	26
コナラ属アカシガ属		7	20	8	5	17	24
クリ属		1	16	1	1	3	-
シイノキ属		-	1	-	-	1	1
ニレ属-ケヤキ属		8	8	17	9	15	16
エノキ属-ムクノキ属		-	1	1	3	-	1
アカガシツバ属		-	-	-	-	-	1
ウルシ属		-	1	-	-	-	-
モチノキ属		1	5	1	1	-	-
トチノキ属		1	1	2	1	1	4
ブドウ属		-	-	-	-	3	-
ツタ属		-	1	1	-	-	1
シナノキ属		-	-	1	-	-	-
グミ属		-	1	-	-	1	-
ウツギ科		1	-	1	2	1	1
エゴノキ属		-	-	2	1	-	-
トネリコ属		-	1	1	4	1	-
草本花粉							
ガマ属		1	3	5	2	-	-
スクリ属		-	2	2	-	-	-
サジメモダカ属		-	3	1	1	2	1
オモダカ属		-	-	-	-	1	1
イネ属		2	27	34	89	19	0
他のイネ科		87	118	81	54	237	344
カヤヤシグサ科		16	57	104	25	18	127
ホシクサ属		-	-	-	-	1	-
イボクサ属		-	1	-	-	-	-
ユツクサ属		-	-	-	-	2	-
ミズアオイ属		-	1	-	-	-	4
クワ科		-	7	-	-	-	3
サナエダデ第-ウナギツカ目類		8	10	29	3	3	8
アザガ科		-	8	-	-	1	2
ナデシコ科		-	1	-	1	6	1
コオホネ属		-	1	-	1	-	-
カラマツソウ属		-	-	-	1	1	-
キンポウゲ科		-	-	1	-	-	-
アブラナ科		-	1	-	-	-	1
バラ科		-	-	-	-	2	-
ソラマメ属		-	-	-	-	35	-
マメ科		-	-	-	-	4	-
フウロソウ属		-	-	-	-	1	-
ミソハズ属		-	-	-	1	2	-
本カシグサ属		-	-	-	-	-	1
セリ科		1	4	-	1	4	2
ヒルガオ属		-	-	-	-	1	-
シソ科		-	-	-	-	-	1
オモミエシ属		1	-	-	-	1	-
ゴキツル属		-	-	-	-	1	-
ヨモギ属		37	15	7	74	295	14
キク科		2	2	2	1	1	-
キク科		2	2	2	1	1	-
シダ類孢子		4	8	9	9	6	3
シダ類孢子							
ヒカゲカズラ属		1	-	-	1	-	-
ゼンマイ属		2	-	1	5	-	-
イノモトソウ属		-	-	3	-	-	4
サンショウモ		20	-	1	-	-	-
他のシダ類孢子		178	142	415	295	97	164
合 計							
木本花粉		214	242	279	228	230	319
草本花粉		156	280	268	281	626	508
木本花粉		4	8	3	5	6	3
シダ類孢子		201	142	420	271	97	168
総計(不明を除く)		671	644	965	780	955	835



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身植物細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は100個未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を*で示す。

第59図 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

表 6. 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	C1	D1	D1	E4	E4
		SX03	SX01	流路	SD01	SD04
		6	上層	4	1	1
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属		-	-	7	9	-
タケ亜科クマザサ属		9	-	10	23	4
タケ亜科		-	4	1	1	-
ヨシ属		152	24	86	60	138
ウシクサ族コブナグサ属		-	-	2	2	-
ウシクサ族ススキ属		-	-	3	5	-
イチゴツナギ亜科		1	4	1	-	-
不明キビ型		3	4	11	10	7
不明ヒゲシバ型		-	4	-	3	-
不明ダンチク型		-	6	2	2	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属		-	-	9	47	-
タケ亜科クマザサ属		17	-	14	17	12
タケ亜科		-	3	-	1	-
ヨシ属		104	4	45	53	76
ウシクサ族		1	2	10	8	4
不明		1	6	31	21	12
合 計						
イネ科葉部短細胞珪酸体		165	46	123	115	151
イネ科葉身機動細胞珪酸体		123	15	109	147	104
総 計		288	61	232	262	255
珪化組織片						
イネ属珪酸体		-	-	10	-	-
イネ属短細胞列		-	-	5	1	-

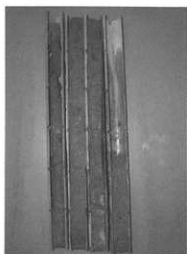
表 7. 微生物分析結果

地点・遺構	分析量	種類名	部位	個数または乾燥重量	備考	
D1 SX01 上層	200cc (293.8g)	オモダカ科	種子		3	
		イネ	胚乳		3	炭化, 1個顆付着
			類		110	炭化
		カヤツリグサ科	果実		1	
		イボクサ	種子		1	
		木材			>20	
		炭化材			1.1g	
		不明炭化物			<0.1g	
		昆虫			18	
		高師小僧			0.7g	
		土器			1	
D1 流路 4	50cc (293.8g)	炭化材			<0.1g	
		昆虫			4	
		高師小僧			<0.1g	
石製品の覆土	150cc	炭化材			<0.1g	

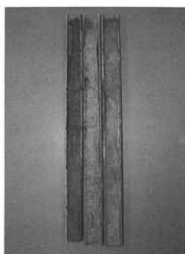
図版1 ボーリング試料



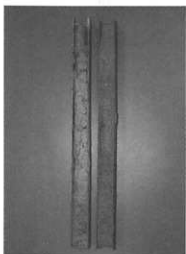
1 地点



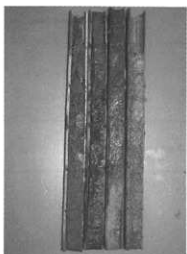
2 地点



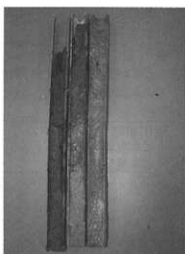
3 地点



4 地点



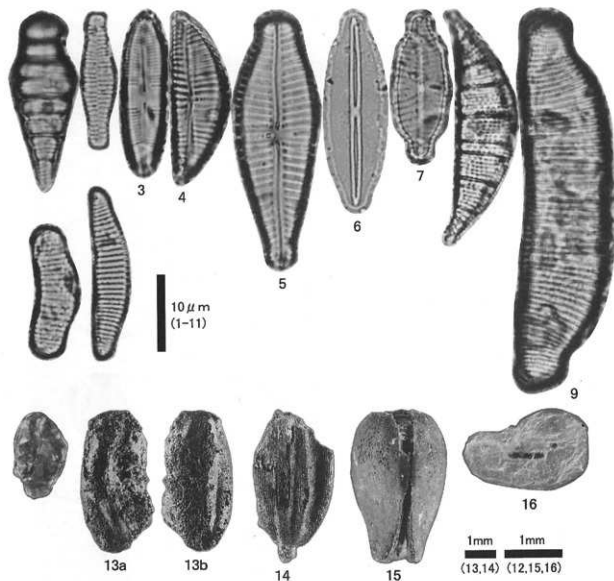
5 地点



6 地点

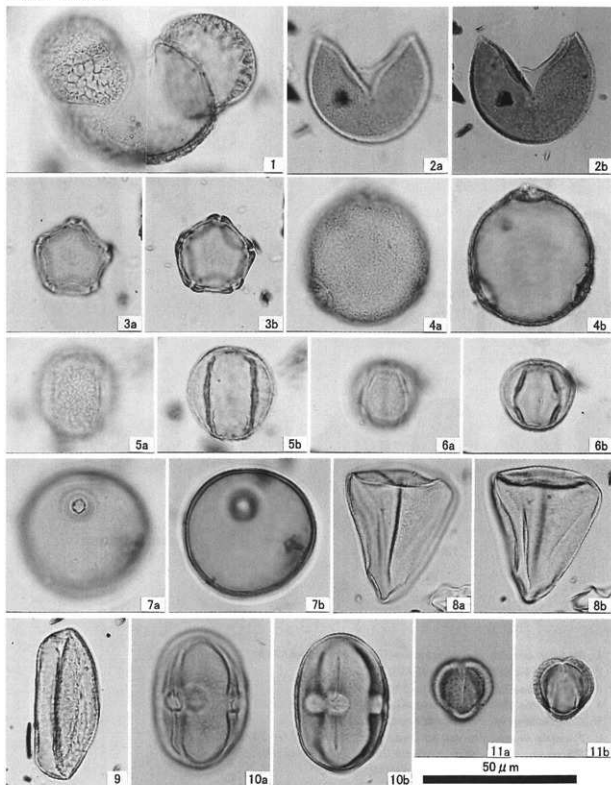
試料の長さは 30cm。左側が最上部で、順に深度が深くなる。

図版 2 珪藻化石・種実遺体



1. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck(SX03;6)
2. *Fragilaria bicapitata* A.Mayer(SX01;上層)
3. *Caloneis bacillum* (Grun.)Cleve(5地点;6)
4. *Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann(5地点;6)
5. *Gomphonema* cf. *helveticum* Brun(SX01;上層)
6. *Frustulia rhomboides* var. *saxonica* fo. *capitata* (A.Mayer)Hustedt(5地点;6)
7. *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krass.)H.Kobayasi(5地点;6)
8. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(5地点;6)
9. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow(SX03;6)
10. *Eunotia praerupta* Ehrenberg(流路;4)
11. *Eunotia minor* (Kuetz.)Grunow var. *minor*(SX03;6)
12. オモダカ科 種子(SX01;上層)
13. イネ 胚乳(SX01;上層)
14. イネ 穎・胚乳(SX01;上層)
15. カヤツリグサ科 果実(SX01;上層)
16. イボクサ 種子(SX01;上層)

図版3 花粉化石



1. マツ属複柱管束亜属(5地点:3)

2. スギ属(5地点:3)

3. ハンノキ属(5地点:3)

4. ブナ属(5地点:3)

5. コナラ亜属(5地点:3)

6. アカガシ亜属(5地点:3)

7. イネ科(5地点:3)

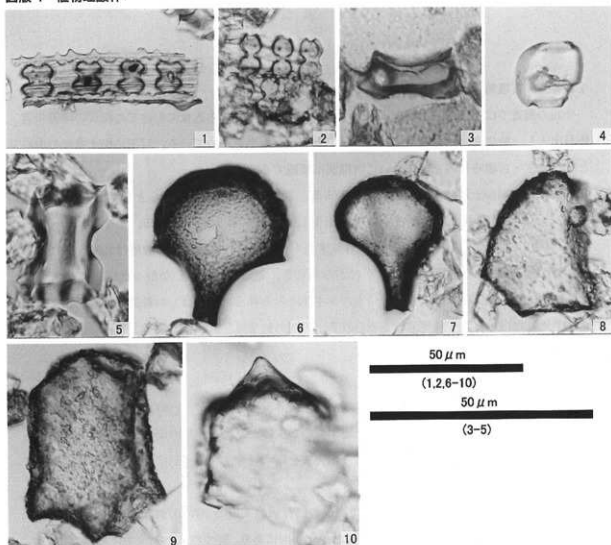
8. カヤツリグサ科(5地点:3)

9. ミズアオイ属(5地点:3)

10. ソラマメ属(SD04:1)

11. ヨモギ属(SD04:1)

図版 4 植物珪酸体



- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞列(SX01;上層) | 2. イネ属短細胞列(SD01;1) |
| 3. クマザサ属短細胞珪酸体(SD01;1) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体(SX03;6) |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体(SD01;1) | 6. イネ属機動細胞珪酸体(SX01;上層) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(SD01;1) | 8. クマザサ属機動細胞珪酸体(SX01;上層) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(SX03;6) | 10. イネ属穎珪酸体(SX01;上層) |

VI まとめ

1. 弥生・古墳時代の土器について

今回の調査では、土器・石製品・木製品等、弥生時代中期から近世にかけての幅広い時期の遺物が出土し、特に弥生・古墳時代の土器が出土遺物の大半を占めている。以下、出土遺物の中心となる弥生・古墳時代の土器について時期別に概観する。

弥生時代中期の土器は、C-2区SK01・SK05等、調査対象地の北側を中心として出土している。SK01では、甕類を中心に細頸壺・鉢等が出土している（第27図49～55、第28図56～62・64）。甕類の器形は、口縁部が緩やかに外反するものが多く、口縁端部の成形は丸みを帯びるもの、強いナデによって面取りを行うものがみられる。完形品は出土しなかったが、62のように胴部中位よりやや上位に最大径をもつものが主体とみられる。施文は、口縁部内面の羽状文が目立ち、端部には刻み目を施すものもみられる。胴部の施文は、直線文や刺突文等の櫛描文を施す49・58以外は無文である。

SK05も甕類が主体となる（第28図65、第29図66～70）。器形は、口径と胴部径がほぼ等しく、胴部中位に最大径をもち、口縁部がやや屈曲気味に外反するものがみられる。施文は、口縁部内面に羽状文を施し、口縁端部に刻み目を施すものが主体だが、口縁部内面に斜行短線文を施すものも存在する。また、胴部上位に直線文・刺突文を施す甕や、頸部・胴部の境に直線文・波状文を施す大型壺も含まれている。

SK05出土土器群は、胴部の櫛描文や口縁部の斜行短線文等の存在から、SK01出土土器群よりやや古い様相を示すが、両者ともに櫛描文は退化傾向にあり、弥生時代中期後葉に比定できよう。

弥生時代後期の土器は、C・D区を中心に調査区全体で出土している。出土量は土器全体の7割近くを占めるが、大部分が自然河道や包含層出土であり、遺構単位でのまとまりに欠ける。

C-1区ではSD07から、口縁部下端に刺突文を施す受口状口縁甕（第23図1、第24図11）が、包含層から肩部を直線文・刺突文を施す甕（第25図28）が出土している。また、D-1区自然河道では面取りした口縁端部に凹線を施す甕（第33図115、第34図127）が、D-2区SK02では丹後系の把手付壺（第35図134）がそれぞれ出土しており、後期前半に比定できる遺物が一定量含まれている。しかしながら、全体的には有段口縁甕や棒状脚の高坏等が目立ち、後期後半の資料が主体となっている。

古墳時代の土器は、D-1・E-4区を中心に出土している。D-1区では、谷（自然河道）の上層で布留系の甕（第34図122・123）が出土した。E-4区SD01では、甕・高坏が多量に出土している。甕類はすべて口縁部が緩やかに外反する「く」字状口縁甕で占められ、内外面ともにハケまたはナデ調整を施すものが主体となる。高坏は、口縁部が直線的に外反し、脚部が強く屈曲して広がる畿内系のものが主体である。その他、口縁部が短く直線的に立ち上がる大型壺（第49図308）や小型丸底壺（第51図329）等が出土しており、古墳時代前期に比定できよう。

2. 遺構

今回の調査では、溝・土坑・柱穴・井戸・自然河道等の遺構を検出した。過去に行われたほ場整備時の削平等の影響もあり、弥生時代から近世の遺構を同一面で検出したことや、遺構内への新旧遺物の混入が多いことから、帰属時期が明確な遺構は少ない。ただし、出土遺物の時期を考慮すれば、大半の遺構が弥生・古墳時代に収まるものと考えられる。

特徴的な遺構としては、まずC-1区SD04、C-2区SD02、C-3区SD01が挙げられる。これらは同一の遺構とみられ、E-1区では後世の擾乱により溝の存在が確認できないが、C-1区北部からC-3区南端部にかけて緩い弧状に伸びている。各調査区とも、この溝から北側では遺構・遺物量が激減し、平成14年度の試掘調査でも遺構空白地が確認されている。

出土遺物が少ないため、遺構の存続時期は明確ではないが、C-2区SD02出土の長頸壺（第25図32）の存在から、弥生時代後期後半頃に年代の一端を推定できる。調査区の関係から、現時点では部分的な確認に留まっているが、集落内外の区画としての性格が想定できる。

次にE区で検出したL字状に屈曲する溝状遺構が挙げられる。遺構全体を検出できたものはないが、方形の区画を呈していたものと推定できる。また、確認できる範囲では、E-1区SD08、E-4区SD01②・SD02のように溝が全周しないものが存在する。

これらの遺構を方形区画として捉えた場合、E-4区SD01では一辺約5m、同SD02では一辺約6m、E-3区SD06では一辺13m以上と推定できる。区画同士は切り合い関係をもたず、それぞれ主軸方向が北から30～40°前後西に傾く同一方位をとる傾向がある。また、E-3区SD06とSK01、E-4区SD01②とSK01、同SD02とSK02等、溝の一辺に並行する形で、土器を1・2個体出土する土坑が伴うものもみられる。E-4区SD02では弥生時代中期後半の土器が、E-1区SD02、E-4区SD01②では弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が出土している。E-3区SD06は流れ込みとみられる遺物しか出土していないが、隣接するSK01との関係から古墳時代前期と推定できる。

周辺遺跡での類例を概観すると、弥生時代の例としては、E-4区の南東約100mに位置する平成9年度調査区で検出されたSX01（6.6×4.6m、中期後半）、射水市布目沢北遺跡の方形周溝墓群（終末期）、高岡市中曾根西遺跡のSZ01（5.2×4.2m、後期）及びSZ02（5.7×5.2m、後期）、高岡市石塚遺跡きぼう地区のSZ04（一辺12m以上、中期後半）等が挙げられる。古墳時代の例としては、射水市二口油免遺跡1号墳（一辺19.0m、前期）、高岡市石塚遺跡きぼう地区のSZ01（一辺23.5m、前期）及びSZ03（一辺26.5m、前期）、同遺跡都市計画道路地区のSZ08（一辺14.0m、前期）等が挙げられる。高島A遺跡、布目沢北遺跡、中曾根西遺跡の例は四隅が切れるタイプで、二口油免遺跡、石塚遺跡の例は溝が全周するタイプである。それぞれ規模・形態・時期等は様々であるが、弥生時代に属する遺構は方形周溝墓、古墳時代に属する遺構は方墳として捉えられている。

今回検出したE区の区画群では、区画遺構が集中し、区画同士が切り合いをもたず遺構のあり方に一定の方向性が伺われる。また、周辺部に方形の溝が廻る平地式建物の検出例が存在しない

こと、近接する平成9年度調査区に方形周溝墓が存在することから、一帯を墓域と推定し、E-1区SD02、E-4区SD01②・SD02等を方形周溝墓、E-3区SD06を方墳として位置づけておく。

3. まとめ

今回の調査成果を概観しまとめとしたい。

高島A遺跡では弥生時代中期後半から遺構の形成が確認できる。中期後半にはE-4区以南やC-2区等で遺跡が確認できるが、散発的であり遺構群としてのまとまりは確認できない。弥生時代後期になると、遺物量が飛躍的に増加し、分布範囲も全調査区に広がる。D区の谷（自然河道）から出土した特殊石製品は、当期に埋没したものと考えられる。また、部分的な確認ではあるが、遺構・遺物分布範囲の北限付近に東西方向の溝が出現し、集落域の北限を区画するようになる。古墳時代前期にはD・E区へ遺構・遺物分布の中心が移るが、前代から継続して遺物量も豊富である。E区では、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけて、方形周溝墓や方墳とみられる溝状遺構が存在しており、集落の存続期間を通した墓域の存在が推定できる。

時期によって遺構・遺物の多寡はあるが、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、中心地を移動させながら集落が存続した状況が推定できる。古墳時代中期以降には集落は一旦廃絶する。その後、中世期にD区において再び遺構が形成され、近世以降に鏡宮の枝村として高島集落が成立し、今日に至っている。高島A遺跡の周辺部には作道遺跡、朴木A遺跡、朴木C遺跡、松木遺跡、松木中鹿遺跡、津幡江遺跡、中曽根遺跡、中曽根西遺跡等弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が集中している。

現在富山新港となっている古放生津潟は、かつては南側に大きく広がり、潟の外縁部には広大な低湿地帯を形成していたと考えられている。高島A遺跡をはじめとする周辺遺跡群は、潟の南西部外縁に形成された自然堤防帯等の微高地上に集落を営み、周囲の低湿地を水田として利用していたものであろう。また、当地は古来より放生津潟や、潟に流入する中・小河川を利用した水上交通の便にも恵まれた地域である。こうした水稲耕作に適した地形的条件や、水上交通の結節点という利便性が、高島A遺跡及び周辺遺跡群が一帯に展開する要因となったものと考えられる。

同様の立地環境は、日本海側の弥生・古墳時代集落にも普遍的にみられる。県内ではいまだ調査例は少ないが、今後の調査によって、沖積低地における集落の変遷や地域の拠点集落の状況等が少しずつ明らかになっていくであろう。

参考文献；

- ・富山地学会他 1966 「放生津潟周辺の地学的研究 第三集」 富山新港資料調査編 II-3
- ・石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡 I』
- ・吉岡康徳 1990 『日本海域の土器・陶磁器編 [古代編]』 六興出版
- ・藤井昭二他 1992 『北陸の丘陵と平野』 アーバンクボタ No. 31

- ・大門町教育委員会 1992 『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2) - 布目沢北遺跡第3次調査 -』
大門町埋蔵文化財発掘調査報告第8集
- ・金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保 IV』 金沢市文化財紀要 119
- ・新湊市教育委員会 2000 「富山県新湊市高島A遺跡発掘調査概要」
- ・新宅輝久 2000 「北陸における弥生時代集落の群構成 - 下老子笹川遺跡との比較から -」『富山考古学研究』第3号
- ・高橋浩二 2000 『古墳出現期における越中の土器様相 - 弥生時代後期から古墳時代前期前半の編年的位置づけ -』「庄内式土器研究」XXII
- ・高岡市教育委員会 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第7冊
- ・(財)鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』鳥取県教育文化財団調査報告書72
- ・長瀬 出 2002 「富山県における弥生集落の展開」『富山考古学研究』第5号
- ・高橋浩二 2002 「北近畿系統の土器と山陰系統の土器」『富山大学人文学部紀要』第37号
- ・新湊市教育委員会 2003 『富山県新湊市市内遺跡試掘調査報告書』
- ・小松市教育委員会 2003 『八口市地方遺跡1』
- ・高岡市教育委員会 2003 『石塚遺跡調査概報 VI - 介護老人保健施設「きぼう」建設に伴う調査 -』
高岡市埋蔵文化財調査概報第54冊
- ・富山市教育委員会 2004 『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告138
- ・高岡市教育委員会 2005 『中曽根西遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第13冊
- ・大門町教育委員会 2005 『二口油免遺跡発掘調査報告(4)』大門町埋蔵文化財調査報告第23集